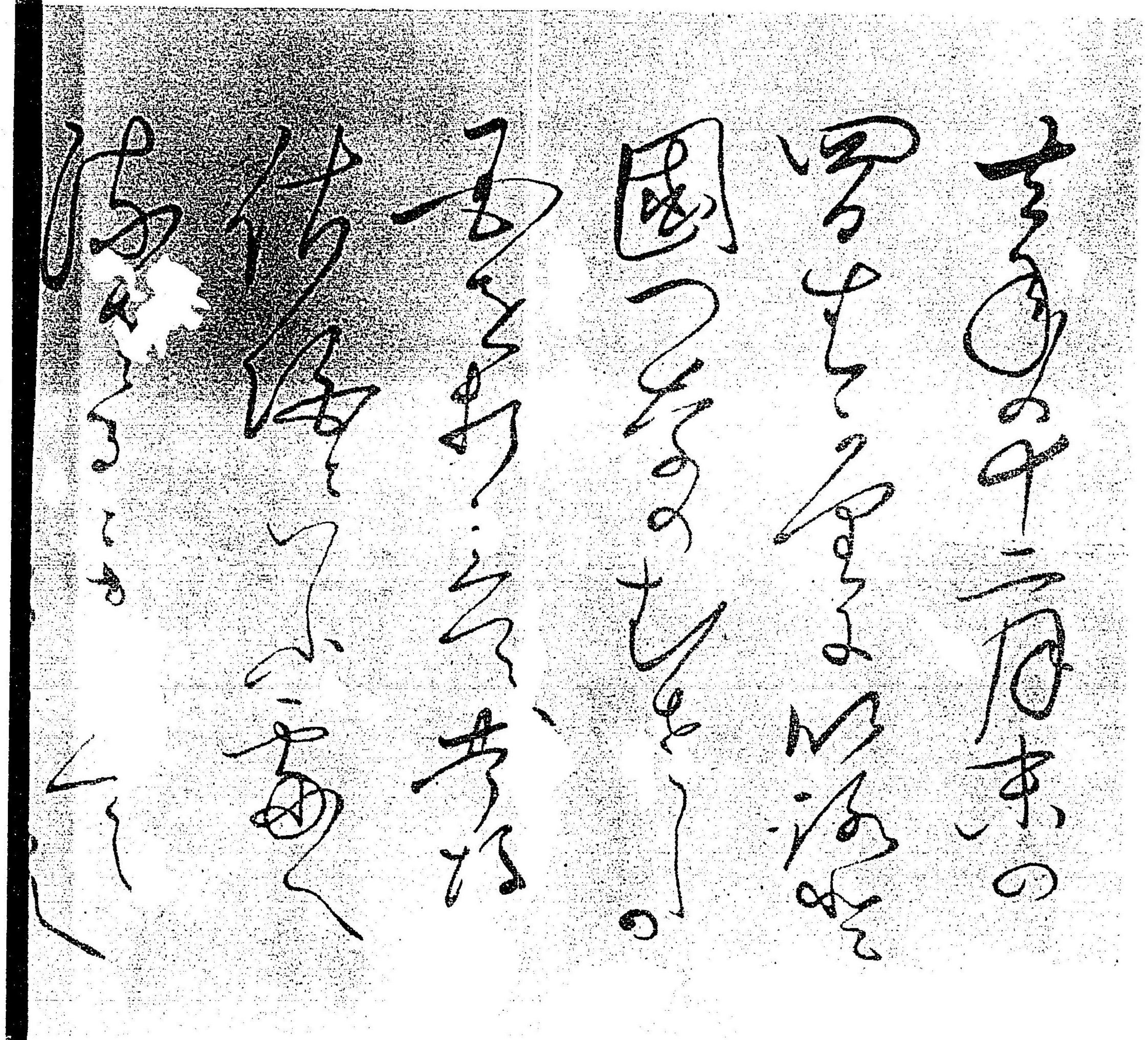
野口勝一著

櫻田始末　完

東京　博聞社發兌



210.58N911a

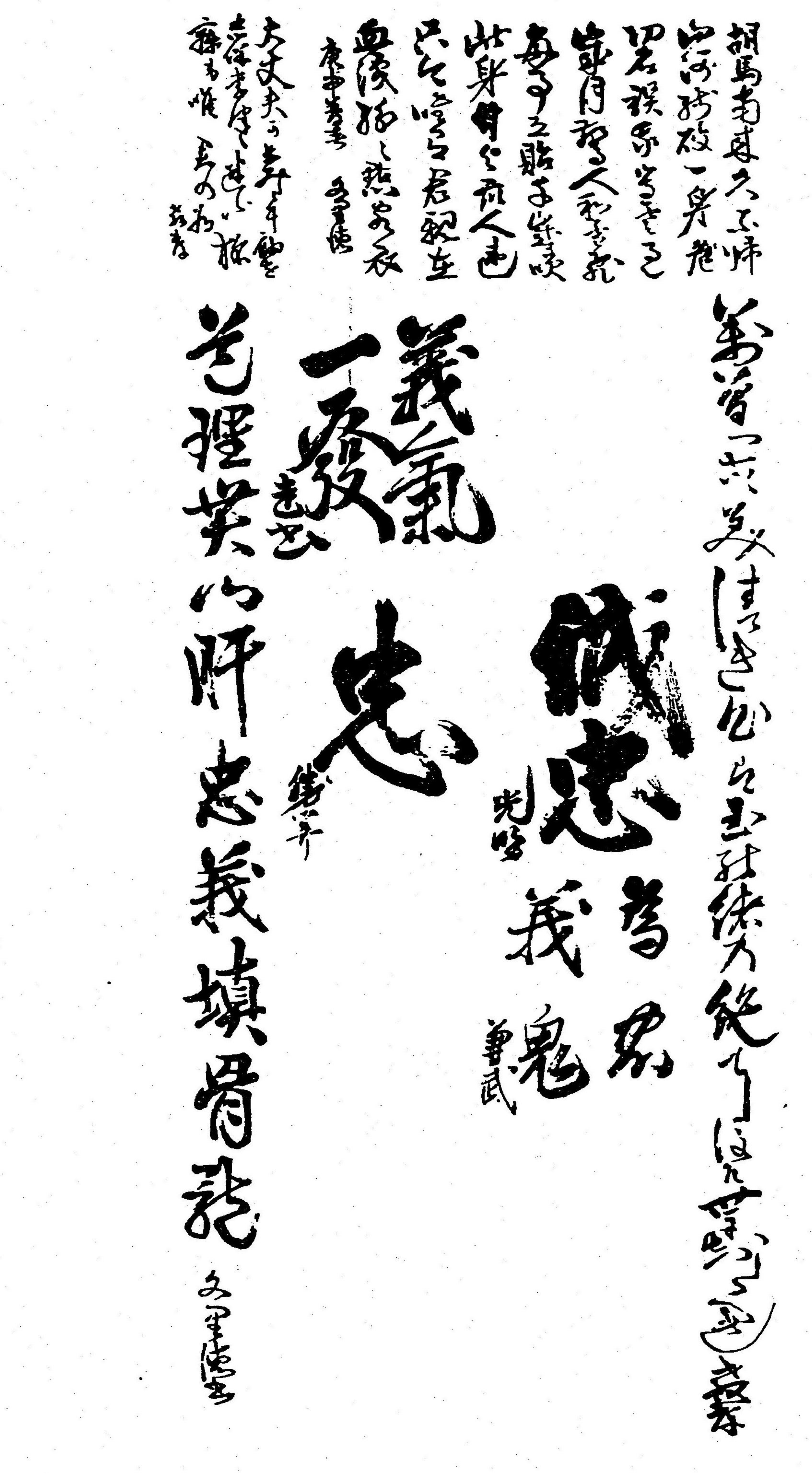
国立国会 30.11.21 図書館

寄贈 新見辰馬

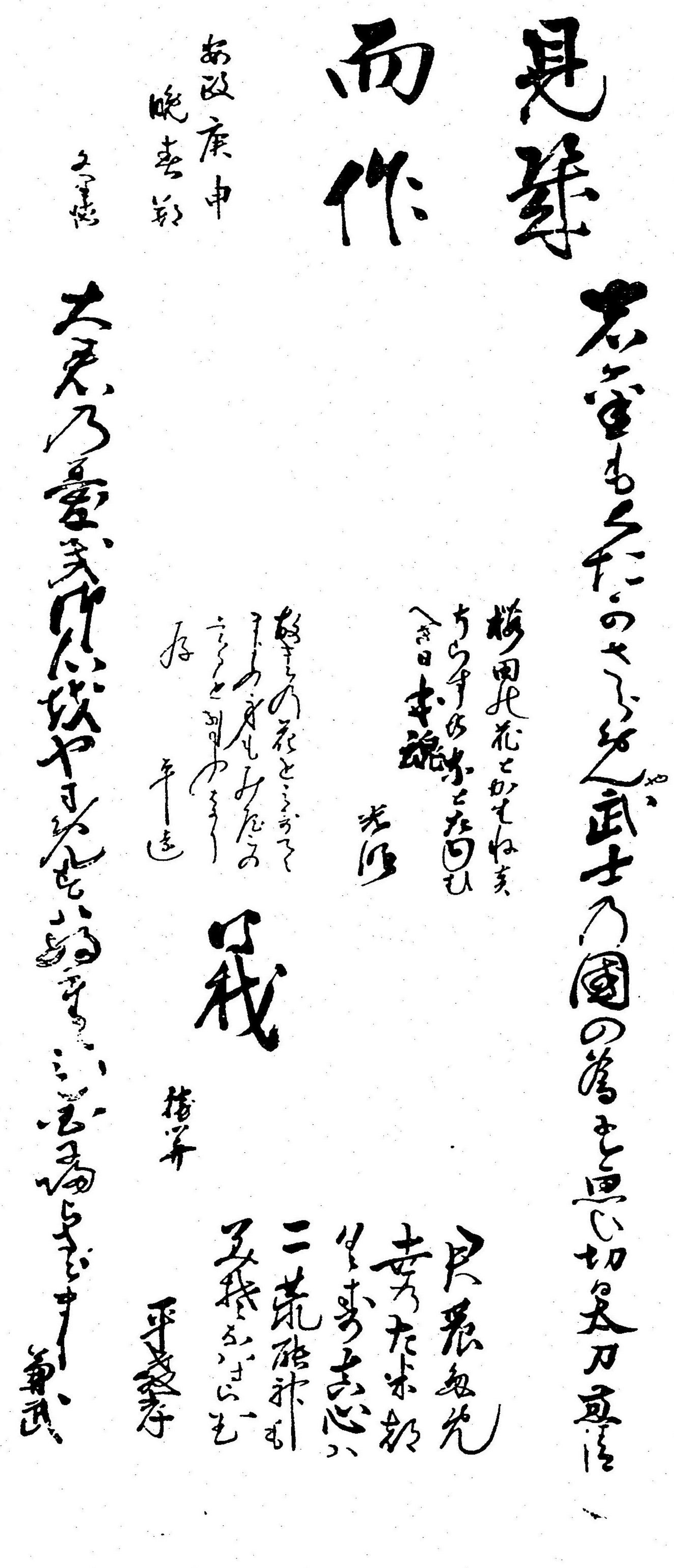
379922

去年の十二月末の
[illegible]
國へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
満[illegible]
[illegible]の
[illegible]

前日西夜亭
芳伯傳寫之及
惜乎之也
[illegible]
不[illegible]比[illegible]
[illegible]又[illegible]
[illegible]高[illegible]
[illegible]子[illegible]
三月[illegible]


誠忠爲君
光明
義魄
彜武
忠
勝算
義氣一發
敬孝

（三月一日諸士鮫津川崎樓に會し席上揮毫する所にして今猶水戸松延某に存せり本書は全唐紙二枚なり之を縮して卷首に揭く
文里ハ齋藤監物　敬孝ハ金子孫次郎　光明ハ佐野竹之介　彜武ハ有村雄介　遂ハ關鐵之助　勝算ハ黒澤忠三郎　彜清ハ有村治左衛門）



見義
而作

安政庚申
晩春於
久〔[illegible]〕

岩金もくだくのさくら花武士乃國の為とて思ひ切る太刀 直清

梅田氏花とかもねえ
ちらすはかとたのむ
へき日本魂
光陽

只〔[illegible]〕
世乃ための
[illegible]志心は
二荒[illegible]も
又我[illegible]
平〔[illegible]〕

ふるさとの花とこそ見て
ものゝふもみだるゝ
ころと知りつゝ
春 年遠

我
播芥

大君乃憂ひ我は拔やすむ心はよろしからむ 兼武

桜田始末叙

夷邦の　皇國を災害し
たるを以て天下の有志之士
其元と定し彼の家ニ而
あらゆる通し當時ニ當

乃変を生あるたらむまて
國家の不幸は見るとな
らむ水戸老公深く慮
らせ給ひありしも奸臣と
共に妨けられて無効と

なりしを嘆く可きことな
りかし幸に桜田十八士の
如き士ありて國權をして
地に墜さらしめしは実に
天に　皇祖の威霊在存

此國を護りたまひしより皇
しかあるに和漢古今姸
蚩此國の國となりつるを
明詔屢くだり懇ろに顯く
謹み通[illegible]

明治二十五年五月
從三位子爵岩下方平

古塚累々として已に七世を経て其之跡

已形色入相ノ梢楊洛陽清水之三千房舎

丹甍不時香烟為於萬人之目見豈也

今茲[illegible]之再修乎功乃至佛殿不限之

一丘誅茅而[illegible]構而藏之宜施之人之衆

尭而[illegible]度[illegible]其家安[illegible]而[illegible]事就如[illegible]

皇帝物語六淵　王子晏於上人按
於下晏哉雅亭國爲我家宴曰猶
爲我作一中書一童子深涇袍行　敎
事畫晝之至范定爲或詩之乃去去人
一經者是分宗由言以雅洋一時處之
者滿浣成資者殆殉至以寫洋舉世者

右丈義之人西施十八仕書之題神妙於
之之東壽勤而手抑揚方鈕佳西遊更老
爲秘之西取也就之不爲也就之不字原也包
之唯然之遠因種之而以爲諷也太守謙詐元敎
之花者不多子如之而思也已太守遊詐士之黃
東不怪捉形鏈之滿形多心之之而更人雅之高

[illegible]家弟十八士之[illegible]物記[illegible]以余[illegible]于[illegible]
[illegible]祖[illegible]其[illegible]者多入[illegible]
十八士手足墨其一也即將[illegible]子孫[illegible]
[illegible]于[illegible]者[illegible]於[illegible]
明治二十三年三月[illegible]下
[illegible]拝手書

自古丈夫之人誰不欲際會風
雲拯生民於塗炭紀勲
業於千秋而身更出遭之
世抱有爲之志甘傚荊軻聶
政之爲如櫻田十八士豈可勝

浩嘆哉然予聞之未有此一
撃以前大名皆畏幕府々
威而無敢出言者有此一撃
以来小諸侯亦生軽幕府之意
旨則桜田一撃非関中興天地

之一大暁鐘而何我友野口珂北
著桜田始末十八男児意気面
目躍々然如生読罷猶覚有余
怒焉者櫻田之挙是非曲直
今日豈之深論哉而使天下

有志之士相率入於鐵錐劍俠之流果誰之罪耶抑亦由當局大臣不知制勢之術而已矣

紫山北村三郎識

櫻田事變論上

珂北　野口勝一

積陰凝閉結テ解ケス天地冥々漠々タルニ當リ迅雷激動大雨滂沱トシテ乾維坤軸爲メニ断裂セントスルカ如キ猛烈ノ勢ヲ現出セスンハ焉ソ穹宇廓如トシテ陽光顯赫タルヲ仰クコトヲ得ンヤ彼櫻田一擧ハ此ニ類スルモノアリ

昔皇綱紐ヲ解キ覇府權ヲ擅ニス徳川氏海内ヲ平定シ其治既ニ久シク末葉ニ至リ百弊坌出シ覇政モ亦老タリ恰モ積陰ノ凝結シテ陰鬱晦冥梅雨濛々其晴ルヽ何ノ時ニ在ルヲ知ラサルカ

如シ偶々外國交渉ノ事起ルアリ或ハ蒼皇周章和ヲ策シ或ハ切齒扼腕戰ヲ論ス然トモ同ク是五里霧中ニ彷徨シ勇者率チ戰ヲ主トシ怯者總テ和ヲ悦ヒ共ニ其利害ノ在ル所ヲ詳ニセサルナリ此時ニ當リ朝廷ハ弁髦ノ如ク將軍ハ木偶ニ同シ政柄ノ運轉ハ偏ヘニ有司ノ手ニ在リ其有司モ多クハ婦人ノ手ニ生長セシ諸侯ノミ臣屬ノ輔翼ヲ待タスンハ一事ヲ處理スルコト能ハス何ニ因リテカ三眼ノ明ヲ放チ千里ノ外ヲ洞視シ從容措置機ヲ察シ變ニ投スルコトヲ知ランヤ只二三ノ老臣稍々事理ニ通スルアリテ纔ニ破綻ヲ彌縫シテ幕府ヲ維持スルニ過キサルノミ

水戸前中納言幕府ノ懿親ヲ以テ主戰者ノ領袖トナリ海内翕然トシテ望ヲ屬シ仰テ宗師トナス幕府ノ老臣阿部伊勢守堀田備中守等要路ニ居リ外人ノ言ヲ聞キ稍々事情ヲ知ルヲ以テ外國畏懼ノ念ヲ懷キ陽ニ前中納言ヲ推シテ陰ニ之ヲ抑ヘ伊勢守退テ備中守獨リ局ニ當リ因循ノ手段ヲ以テ蒙昧ノ間ニ難局ヲ結ハンコトヲ

謀レリ然レトモ朝廷ヲ憚リ強使ニ告ミ東西ニ奔走シ一擧再擧蹶テ又蹶キ遂ニ良將軍ヲ擁立シテ好措置ヲ求メントスルニ至ル其事未成ラス備中モ亦罷メラル之ニ續テ局ニ當ルハ井伊掃部頭ナリ掃部頭紛難ノ後ヲ受ケ内外ノ威迫ニ告ミ遂ニ斷然トシテ剛猛ノ行ニ出テ前中納言ヲ始メトシ志士豪傑ヲ幽囚斬戮スルコト羊豚ヲ屠ルカ如シ纔ニ外使ノ心ヲ慰メテ一時ノ偷安ヲ求ムルニ過キサルノミ然トモ外交ノ開ケタル今日ヨリ之ヲ觀レハ和ヲ策スルモノ先

見ノ明アリ戰ヲ論スルモノ固陋ノ見ヲ持スルカ如シト雖モ當時ノ勢ヲ察スルトキハ和戰ノ策論共ニ是暗中ニ摸索シテ其手ニ觸ルヽ所ヲ以テ自ラ得タリトスルノ類タルヲ免レサルナリ

夫已ニ主戰ノ果シテ固陋ノ見ニ屬シ講和ノ果シテ先見ノ明アリトスルモ初メヨリ幕府ノ見ル所ノ如ク海内ヲ擧ケテ外人ニ俯伏スルトキハ朝廷ハ竟ニ政權ヲ收得スルノ期ナク幕府ハ殆ント本邦ノ主タルカ如キノ勢ヲ馴致スルヤ

疑ナシ然ハ則外國ニ對シテ條約ヲ結フハ幕府ナリ國ノ主府ハ江戸ニ在リ將軍營ニ據リ兵馬政刑ノ權ヲ掌上ニ把握操持シテ外國ニ摸倣シ政刑ヲ改更シ軍政ヲ變化シ令ヲ發シ法ヲ設ケ三百諸侯ヲ擒縱牽制シ新日本ニ新幕府ヲ建ツルコトアラハ朝廷ハ何ノ處ニ向テ其尊嚴ヲ維持スルコトヲ得ンヤ名義名分ノ空名ハ果シテ新日本ヲ風靡シ新幕府ヲ順從ナラシムルノ力アルヘキカ或ハ恐ル南朝ノ虛器ヲ擁シ又或ハ羅馬法皇ノ尊稱ニ止マルカ如キニ至ルモ亦知

ルヘカラサルモノアラン乃陋見ニ屬スル主戰論ニ主タルハ勤王論ナリ故ニ當時主戰家ノ手ニ成ル文書ヲ閲讀スレハ尊王攘夷ハ連用一語ヲナシ猶之ヲ折シテ尊攘ノ一語ヲ生シ此語ヲ以テ主戰家ノ本領トナシヽナリ假令ヘ目的ハ固陋ナリト雖モ之ニ因リ朝廷尊嚴ノ氣運ヲ造成シ幕府ヲシテ遂ニ政權ヲ返上セシメタルハ其本源實ニ此ニ出ツ然ハ則主戰家ノ固陋モ朝廷國体ニ關シテハ其功亦偉ナリ

蓋シ主戰家ハ固陋ヲ免レスト雖モ是知慮ノ足

ラサルニアラス只外國ノ情形ニ通セサルニ因ル然トモ朝廷ノ重キ國体ノ尊ヲ知ルカ爲メニ一死殉國ノ心ヲ以テ外其侮ヲ禦キ内國家ノ隆運ヲ圖ラント欲シタル一片憂國ノ衷情ハ氷清玉潔山高ク水長シ士人タルノ氣骨ハ宜ク斯ノ如クナラサルヘカラス他ノ講和ヲ主トスルモノ率子其局ニ當ルノ官ニアラサレハ外國ノ書ヲ讀ムノ人ト官ニ縁故アルノ徒ナリ既ニ稍〻外國ノ事情ヲ知リ其銃礮ノ利軍艦ノ盛ナルヲ見テ畏怖ノ念ヲ萌シ一戰國ヲ覆ヘスノ危キヲ

慮リ乃國ヲ憂フルノ心ハ主戰講和二者皆同シト雖モ朝廷ヲ思フニ至リテハ講和者ハ却テ第二ニ屬シ寧ロ朝廷ヲ以テ眼上ニ宿スルノ巨瘤トナスノ類亦多キニ居レリ故ヲ以テ其氣餒ヘ其論快ナラス逡巡怯懦巾幗ノ遺ヲ受クルモ猶振フコト能ハサルノ態アルニ至レルナリ、然トモ共ニ是幕府ノ末造ニ屬シ幕府ハ戰ハント欲スト雖モ戰フノ勇アルニアラス和セント欲スト雖モ和スルノ識アルニアラス講和モ亦是氣力ナキヨリ生スルノ結果ノミ只耿々タル勤王

一片ノ氣ハ煌赫煒燿主戰家ノ頭上ニ顯ハレ冥々漠々タル世界ニ光ヲ放チ日ニ長シ月ニ漸ミ苟モ之ニ觸ルヽモノアレハ灼然トシテ焚燒シ肉ヲ爛ラシ骨ヲ焦サントス井伊掃部頭一タヒ猛威ヲ振フニ及ヒ此氣俄然トシテ奔騰シ掣電激雷ヲ迸ラシ霜刃ニ鮮血ヲ淬ラスモノ乃チ積鬱セル天地ノ雲霧ヲ披キ維新ナル陽光ノ開明ヲ致シヽ先登第一ノ魁ト爲ルニ至レル也

櫻田事變論下

河北　野口勝一

櫻田ノ事タルヤ革命ノ義旗ヲ一劒ニ縮メタルモノナリ若シ此事微リセハ討幕府ノ旗影ハ大和行幸ノ事アルヲ待タスシテ畿甸ノ地ニ動キタルナラン盖シ中山公子ノ兵ヲ大和ニ起セシモノハ固ヨリ諸士ノ故智ヲ襲テ其畫策ノ淺近ナルニ過キサルノミ若シ諸士ヲシテ櫻田ノ擧ニ出テス隱々裏ニ諸藩志士ニ結ヒ機熟スルヲ待チ戈ヲ提ケテ徐ロニ起タシメハ其勢必ス張大ナルモノアラン然ルニ擧兵ニ先チテ井伊掃

部頭ヲ刺シ而シテ後ニ兵ヲ起サントス之レカ爲メ幕府大ニ戒心シ防衛頗ル密ナリ志士殆ト手足ヲ措ク所ナク遂ニ志士ヲシテ依違シ以テ中山公子等ヲ待ツニ至ラシム櫻田要撃ハ擧兵ノ目的ニ於テ齟齬ヲ来サシムルモノタリト雖モ人心ヲ動揺激昂セシメ他年維新革命ノ地ヲ爲スニ至リテハ上編ニ論セシ如ク其功モ亦偉ナリト謂フヘシ

幕府ノ人心ヲ失フコト既ニ久シク志士尊攘ノ義ヲ重スルコト頗ル盛ナリト雖モ然トモ其議

扞格ヲ極メ衝突ヲ来スモノハ一ニシテ将軍繼嗣ノ事ニニシテ勅命ヲ待タス外國條約書ニ調印セシ事三ニシテ海内志士ヲ擒殺スル事等ナリトス若シ此三者ナクンハ幕府人心ヲ失フト雖モ未タ速ニ滅亡ヲ招クニ至ラサルヘシ乃此三者ハ實ニ幕府ノ最大事件ナリ其一タモ失錯アラハ變亂忽チ之ニ従フ井伊掃部頭ノ死ヲ致スモ實ニ此ニ在リ

掃部頭局ニ當ルヤ首トシテ将軍繼嗣ノ事ヲ料理ス此時将軍病ニ罹リ繼嗣其人ナク海内領ヲ

延テ其如何ヲ想望シ加フルニ外國交渉ノ艱難ナルアリ乃平心虚氣之ヲ議セシメハ朝廷ノ望ム所松平春嶽等ノ計ル所ノ如ク年長賢明ノ人ヲ得ント欲スルハ輿論皆一ナルヘシ然ルニ朝吉ニ戻リ輿論ニ従ハス反テ後庭ノ婦女ニ黨シ劮弱ノモノヲ推シテ職ニ就カシムルハ何ソヤ蓋シ掃部頭ト雖モ年長賢明ヲ喜ハサルニハアラサルヘシ初メ水戸前中納言ト議協ハス其子刑部卿ヲシテ將軍タラシメハ幕府ハ前中納言ノ意ノ如キニ至リ己モ亦頭ヲ低レテ命ヲ聽カサルヲ得ス故ニ紀州藩ニ結托シテ政柄ヲ運轉セハ水戸ニ失フノ歡心ハ之ヲ紀州ニ收メ亦以テ幕府ヲ維持スルニ足ルモノトセシナラン此事若シ幕府ノ中世ニアラシメハ文恬武熙ノ時ナルヲ以テ海内ヲ控御スルヲ得ヘキモ時既ニ末造ニ迄リ然ラサルモ人心頻ニ離背セリ因テ萬口一談賢明ヲ忌ミ劮弱ヲ利セリトナシ人怨盡ク掃部頭ニ集リタリ縱ヘ掃部頭ノ心中ハ幕府ノ爲メニ計ルニ出ツト雖モ衆論ハ嘵々然トシテ責メテ私ヲ營ムニ在リトナス夫レ此一事

ヲ以テスルモ義人烈士ハ將ニ劔ヲ按シテ起タントス

次ハ條約調印ノ事ナリ外國條約ハ掃部頭其端ヲ開クニハアラス初ハ阿部伊勢守之ニ任シ後堀田備中守其局ニ當レリ備中守頗ル處置ニ苦ミ荏苒シテ掃部頭ニ至ル備中守ノ罷メラレタルハ外國條約ノ事ニアラス將軍繼嗣ノ事ニ因ル備中守ノ意ハ顧ニ朝廷幕府ノ議合體セサルヲ憂ヒ衆望ノ重キ一橋刑部卿ヲ推シテ繼嗣トナシ朝野ノ歡心ヲ買ヒ西東ヲ調和シテ而ル後ニ外國交渉ノ事ヲ處理セント欲セシニアラン若シ此ノ如クセハ果シテ一擧外國ト兵端ヲ開クニ至ルカ然ラサルハ知ルヘカラスト雖モ無謀ノ攘夷ハ刑部卿モ亦豈容易ニ之ヲ爲ンヤ已ニ人心ノ歡喜ト共ニ西東ノ間ハ圓滑ニ至ルコト疑ヲ容レサル所ナリ然ルニ掃部頭勢ヲ得謀テ刑部卿ヲ斥ケ備中守ノ苦心スル交渉事ヲ處スル甚タ容易ニシテ直ニ調印ノ事ヲ了スルニ至ル是レ掃部頭ノ功ニ似タリト雖モ實ハ備中守ノ爲サント欲スル所ヲ爲シタルニ過キス而

シテ其朝廷ヲ舍キ擅恣ニ之ヲ爲スノ責ハ免ルヽコト能ハス之ニ依リ海内擧テ其罪ヲ聲ラシテ止マス後来今日ノ如キト然ラサルトハ人誰レカ之ヲ知ン犬羊腥膻ヲ以テ外人ヲ視ルノ時代ハ國ヲ夷狄ニ賣リ幷セテ朝廷ヲ侮慢スルモノト爲スナリ夫レ此一事ヲ以テスルモ義人烈士ハ將ニ劍ヲ按シテ起タントス

夫レ已ニ前ノ二事アリ義人烈士ノ心ハ湯ノ鼎ニ沸クカ如ク激切憤慨ヲ極メ島津薩摩守ニ據リ大ニ成ス所アラント欲シ其京師ニ出ツルヲ

待ツ薩摩守不幸ニシテ死シ志士落膽セリ更ニ水戸ニ據リ謀ラント欲シ勅書降下ノ事アリ幕府大ニ驚キ掃部頭策ヲ決シ間部下総守ヲ京師ニ遣ハシ青蓮院宮ヲ幽閉シ公卿ヲ劫迫シ官人及ヒ志士ヲ捕獲スルモノ數十人京師大ニ震動ス遂ニ水戸前中納言一橋刑部卿等ヲ罪シ安島帶刀以下或ハ死刑或ハ流竄其罪ヲ獲ルモノ頗ル多シ人心洶々道路爲メニ目ヲ以テス蓋シ掃部頭ノ意ハ前ノ二事ニ因リ大ニ人心ノ激昂ヲ来シ薩摩守等ノ事アリ又敕書ノ水戸ニ降ルア

リ時世實ニ容易ナラストナシ其勢ヲ遏絕センニハ威力ヲ以テ強制シ嚴刑峻罰ヲ施シテ志士ヲ勦滅スルノ外ナシト思ヒシナラン若シ然ラストセハ如何ソ彼カ如キ酷虐ノ措置ニ出テ學士名流ヲ刑戮スルコト草芥ヲ掃フカ如キ不仁ノ行ヲコレ爲ンヤ玆ニ至リ義人烈士ハ憤然トシテ眞ニ劒ヲ按シテ起チ性命ヲ犧牲ニ供スルモ省ミルノ暇ナキニ至レルナリ

櫻田ノ事タルヤ諸士ノ心ニアラス諸士ノ心ハ義旗ヲ讖句ニ掲ケ幕府ヲ矯排シテ攘夷ノ擧ニ

出テシムルニアリ有司ヲ刺スカ如キハ義擧ノ一波ニ過キサルノミ故ニ二三年来志士ノ中國ニ至リ四國九州ニ渡リ山陰道ヲ迴リ北越ニ赴キ遊說ヲ試ムルモノ實ニ數人ナリ只一有司ヲ刺スヲ以テ足レリトセハ數人ノ劒客ニシテ辨スヘシ何ソ敢テ四方ニ奔走シテ援ケ求ムルヲ要センヤ其然ラサルモノハ目的只此一ニ止マラサルヲ以テナリ且高橋多一郎等ノ先ツ大阪ニ抵リ金子孫二郎ノ事了ヲ待テ品川ヲ去リ關鐵之助ノ再ヒ中國九州山陰等ヲ迴ルヲ見テモ

亦其意ノ在ル所ヲ知ルニ足レリ當時掃部頭ヲシテ濫刑ヲ施サヽラシメハ義旗或ハ畿甸ニ動クコトアリトモ頭顱ヲ雪塵ノ上ニ暴露スルノ耻ハ顧フニ免ルヽヲ得ヘシ然ルニ酷刑濫殺ヲ擅ニシ憤怒ノ激烈ヲ来シ義旗ヲシテ一劔ニ縮マリ早ク櫻田ノ事アラシムルモノハ畢竟掃部頭自ラ其頭ヲ授クルノ擧動ニ出テタリト云フモ亦可ナリ此擧是レ諸士ノ心ニアラスト雖モ勢ノ激スル所止ムコトヲ得サレハナリ

幕府勢盛ナル𪜈ハ朝廷大權ヲ總攬スルコト能ハス又王政ヲシテ古ニ復セシメント欲セハ幕府ヲ倒サヽルヲ得ス然ハ則チ誠心ヨリ出テ討幕府ノ旗幟ヲ擁ヘシテ四方ニ呼唱セント欲スルハ乃チ朝廷ニ忠盡ナルモノト謂フヲ得ヘシ若或ハ諸士ヲシテ只掃部頭ヲ刺スニ止マラシメハ其人物氷雪ノ如キモノアリト雖モ其行ヤ盗ヲ以テ呼ハサルヲ得ス諸士ハ實ニ勤王義旗ヲ首唱スルモノニシテ初メヨリ一大老ニ對シテ盗行ヲナスニ止マルモノニハアラサルナリ故ニ朝廷之ヲ殉難ノ士ニ列シ以テ靖國社ニ祀

リ又贈位ノ榮典ヲ蒙ルモノアリ抑々井伊掃部頭ハ職ヲ盡サント欲シ職ヲ誤リ死ヲ招キ櫻田諸士ハ義ヲ盡サンカ爲メニ激シテ人ヲ殺シタルモノ也

目次

第一章　米艦渡來國事多難　一丁
第二章　繼嗣議起條約調印　十九丁
第三章　水戸賜勅志士逮捕　三十三丁
第四章　志士刑死櫻田要擊　五十三丁
第五章　諸士進退事變文書　七十六丁
第六章　幕政一變井伊責罰　百五十四丁
第七章　二士之傳十八士傳　百五十九丁
附錄　二百二十九丁

櫻田始末

水戸　珂北　野口勝一　著

嘉永六年癸丑

伊豆守氏榮

將軍家慶

大膳大夫慶親

飛驒守鑑寛

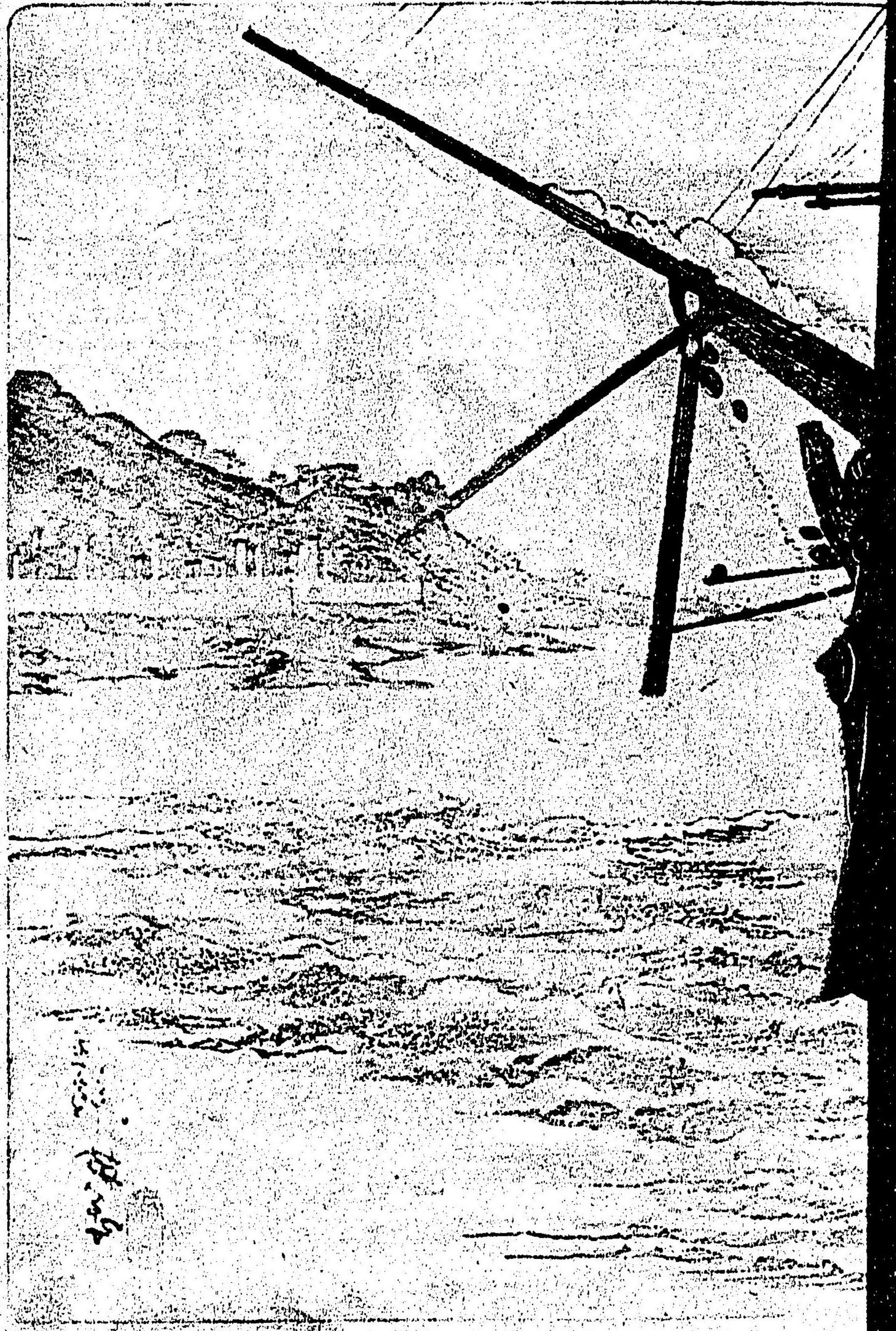
阿波守齊裕

伊勢守正弘

前中納言齊昭

第一章　米艦渡來　國事多難

孝明天皇御宇嘉永六年六月三日亞米利加合衆國の水師提督彼理兵艦四艘を率ひて浦賀に來るあり奉行戸田伊豆守屬吏を遣はして之に問はしむ彼理は本國大統領よりの使にして和親貿易を乞はんか爲めに來り即國書方物を齎らせし故重臣に面會して之を獻せんとの事を答へたり伊豆守急使を江戸に馳せて其由を幕府に報ず德川將軍大に驚き毛利大膳大夫立花飛驒守蜂須賀阿波守等の諸侯に命して武藏相模安房上總の海岸を守らしめ老中阿部伊勢守を駒込の水戸邸に遣はし前中納言の意見を問はしむ初め前中納言深く外國窺窬の事を憂ひ蝦夷地

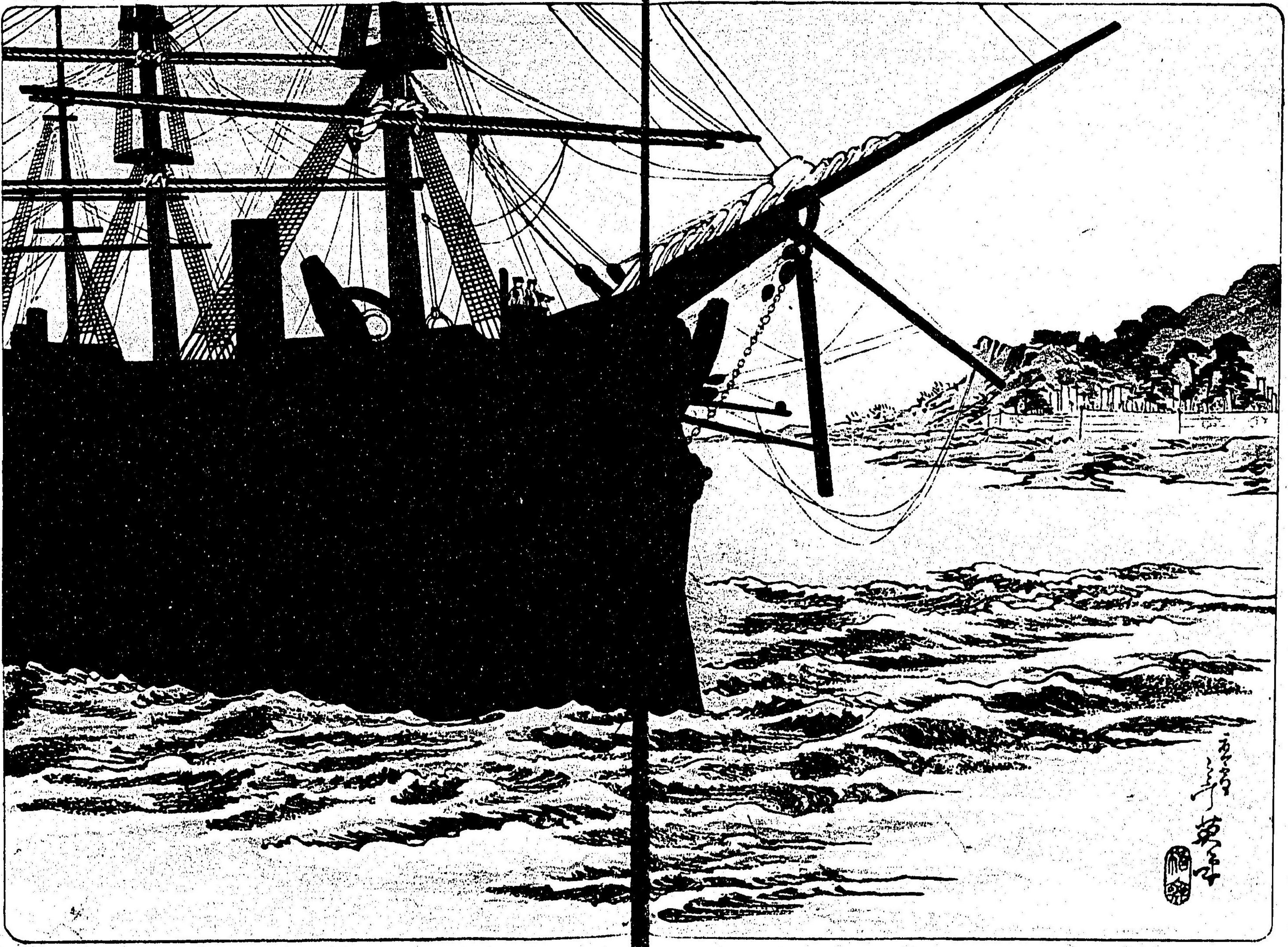


掃部頭直弼

大學頭緯

對馬守學弘

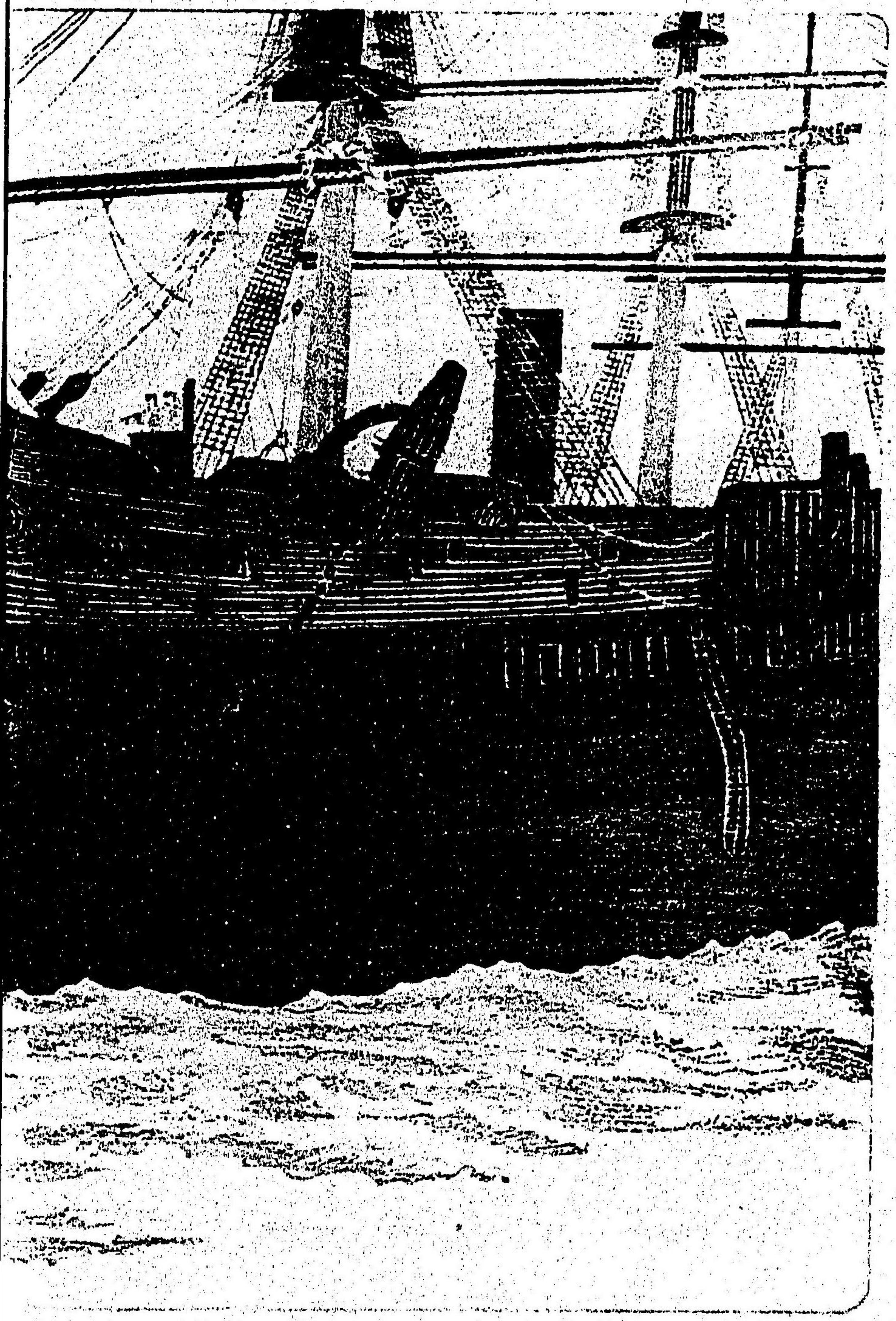
を開拓して北門の鎖鑰となさんとし武備を修め大砲を鑄て緩急の用に供ふる等頗る心を用ひたり之が爲めに反て幕府の嫌疑を受け弘化元年五月退隱を命せらる茲に至り米使の來るを以て幕府の諮問に與ることゝなれり城中には布衣以上の諸臣會議ありて國書を受取ることに決し此時井伊掃部頭に出府を命し十八日に林大學頭を以て應接掛となし其書を受取らしめ九日には外國船乘入るとの報知次第八代洲河岸定火消屋敷にて出火と譜を異にする半鐘を打つべきを以て外九所の火消屋敷も之を打繼くべきを以て是を合圖に早々登城又は各持場を守るべき旨を達せり之が爲めに太平に慣れたる人民は眼前に戰爭起れるが如く恐怖し江戶中の混雜は實に名狀すべからざるものあり此日假應接場を久里濱に設け浦賀奉行戶田伊豆守同井戶對馬守林大學頭等陂理に面會して國書を受取り其返翰は



將軍家慶薨
尾張紀伊水戸
三家
將軍家定家慶の子
筑後守忠徳
肥前守政憲
左衛門尉聖謨
土佐守成允
古賀增
安政元年甲寅

明年長崎に居る阿蘭陀甲比丹に取次ヶしむるよしを告く米使は其期に及ひ復來るべき旨を答へ十二日に至り拔錨せり將軍嘗て疾ありしか十九日益〻劇しく二十二日薨す然とも秘して喪を發せず米國書翰の和解を三家及ひ溜詰諸侯に示して其意見を上らしむ七月朔日之を大小諸侯に示したり三日前中納言を起して海防の議に參せしめ隔日登營の事となる此月喪を發し徳川權大納言嗣く又露西亞の水師提督布恬廷長崎に來り互市を乞ふ奉行水野筑後守其書翰を受け之を江戸に致す大目付筒井肥前守勘定奉行川路左衛門尉目付荒尾土佐守古賀謹一郎を遣はし明年蝦夷の國界を定め通市は諸事整頓を待て通報すべき旨を答ふ十二月露艦拔錨せり

安政元年正月米國使節陂理再ひ軍艦六艘を率ひて來る十一日浦賀奉行之を幕府に急報す復海岸を警衛すると前年の如し十



民部少輔長鋭
美作守政義
伊賀守忠優
河内守近直

六日米艦内海に入り本牧に繫泊す町奉行井戸對馬守林大學頭目付鵜殿民部少輔松崎滿太郎等應接の命を受けて江戸を發す浦賀奉行伊澤美作守米艦に諭して浦賀に引返さしめんとす肯かず彼理を招けども病を稱し副將をして來らしむ奉行戸田伊豆守猶諭して彼理の來るを促がせども復肯かず猶艦を進めて神奈川海に至る因て已むことを得ず井戸林等に命して横濱に於て應接せしむ此時水戸前中納言は溜間詰の諸侯を召して意見を問ひたるに孰れも皆無事を希ふとのみ別に何の策をも建つるものなし中納言は事の意外なるを嘆けりと云ふ老中松平伊賀守は松平河内守に内意を含ませ二月朔日急に横濱に赴き井戸林等に告け應接の事一々老中の決を取る時は老中は水戸前中納言に告け指揮を受けざるへからず然らは平和を破るの恐れあり故に專斷して處置を施すへ上後日の責めは老中之に任せんことを約したり前中納言は之を聞き大に驚き大學頭を城中に召し決して交易は許すへからさるを嚴命す老中等は亦前中納言の言に從ふへからさる旨を諭す已にして大學頭彼理と應接に及ひ彼理は素より米國にて軍功あるを以て之を挾み大學頭を劫かし若し言ふ所を聽かずんは直に軍艦を率ひ江戸を蹂躙すへしといふ大學頭大に驚き其請に從ひ十六日長崎の外に下田箱館の二港を開くことを諾し三月三日假條約を結ひたり之に因り米艦盡く去て下田に赴く前中納言は之を聞き鬱々として樂まず陳情書を上りて職を辭し爾後絕て登營せざりき幾許もなく老中阿部伊勢守職を辭し禁裡造營の奉行を命せらる伊勢守も亦此の條約を以て心之を非とせしに因るといふ是より先き井伊掃部頭を以て京都守護職となす十二月朝廷詔を將軍に降して曰く夫れ外寇の事は深く宸襟を惱ませらるゝ

安政三年乙卯
信濃守清直

所なり僧侶に於ても何の異なることかあらん頃年墨夷相摸海に來り今秋魯夷畿內近海に來る國家の急務は專ら海防に在り諸國寺院の梵鐘を毀ち大小砲を鑄造し海岸樞要の地に置き以て不虞に備ふべし將軍ハ之を諸侯に頒布したり

三年七月米國總領事巴爾理士下田に來り奉行井上信濃守を見て曰某本國大統領の命に依り日本國に滯在して交通の事を議るべきの委任を受けたり是より江戸に抵り將軍に謁見して國書を呈すべし信濃守より漫に外人を府內に入れさるの例規を告け頻りに止むれとも從ハす因て之を幕府に急報せり老中以下評議して若し彼ゟ請を許さすんハ如何なる變事に至るも測り難し無事を保たんにハ之を諾するの外なしとて遂に引見の事に決す水戸前中納言の意ハ固より之を拒くに在るを以て先つ前中納言の海防事務に參與するを止め而る後に發表せんと

前中納言齊昭
中納言慶篤
讃岐守賴胤
肥後守容保
隱岐守勝成
雅樂頭忠顯
掃部頭直弼
下總守忠國
民部少輔忠矩
宮內大輔賴聰
越中守定猷
若狹守忠義
備中守正睦

欲し是月二十三日前中納言を營中に召し將軍親から佩ぶる所の脇差を賜ひ曩きに請ふ所を許して職を解く明日三家に諭すに米使巴爾理士登營の事を以てす水戸前中納言同中納言及ひ溜間諸侯松平讃岐守松平肥後守松平隱岐守酒井雅樂頭井伊掃部頭松平下總守松平民部少輔松平宮內大輔松平越中守酒井若狹守等連署して其不可あるを建議すれとも之を止むるを得す幕府令を發し亞墨利加官吏國書を携ひ江戸に來らんことを請へり是れ寛永以前英吉利人謁見の先例に據るあり且條約を結びたる國々の使節都府に來るハ萬國普通の禮式たるにより近く登營を許さるべきを告く十月巴爾理士江戸に入り蕃書調所に館し十八日老中堀田備中守の邸に至り來意を告けて國書の副本を致す二十一日下田奉行井上信濃守巴爾理士を導て營に登り牙門に至りて駕より下り諸有司出で迎へて之を大廣間に

延く將軍烏帽子直衣にて出で揖す巴爾理士恭く國書を捧げ使事を口演し將軍之を慰諭す老中堀田備中守其書翰を受けて禮畢る既にして巴爾理士備中守邸に至り日本の大事に拘はる事件なりとて述て曰近年西洋各國交易盛に行はれ都府には必ず公使館の設けあり日本支那は未だ同盟國たらざるを以て其設けあることなし曾て支那に於て阿片の亂に至りしも廣東の奉行英人を輕ぜしより事起りしなり日本に於ても其覆轍を踏まざるに先ち速に江戶に商館を建て各國の公使館を設くべし已に英國よりの使節は滊船五十艘を率ひ廣東に在り某其使節に面會せしに直に日本に航すへしとの言あり若し夫れ英使來るを待ちて交易を許さんよりも今之を許すに若かず乃彼の五十艘は一艘渡來して穩に事を辨すへきのみ露國も亦近年滿州より支那を横領するの意あり又東印度の英國領地を蠶食せんとす

るの勢已に見はる之を防がんが爲めに英國はサガレン島蝦夷地に多くの海軍を出して其巢穴を衝かんことを謀れり故に日本に向ふて戰爭するは彼の最も好む所なり是れ深く慮らざるへからす是を以て各國同樣親睦して日本の太平を保たんと欲せは國內をして不服のものなからしめんを要す因て詳かに評議を盡し速かに返答あるべし我大統領は最初に日本と條約を結へるを以て殊に親密を主とせんと欲し日本の爲めに言を盡すを辭せさる所以なり假令へ英國と交易を開くに至るも阿片の禁は之を嚴にせさるへからす其害は實に戰爭よりも甚し且英國に於ては專ら之を日本に廣めんとするの意あるが如し此禁は條約の初めに方り決して忽かせにすへからす是又大統領の忠告する所なり幕府巴爾理士の上言を和解し諸侯に示して意見を上陳せしむ水戶前中納言意見書を備中守に贈る其大意

に曰く商館を江戸に置くときは人心服せず國內亂に至るの恐れあり之を許すへからず又將軍の親族を米國に遣はして大統領の好意を謝し併せて國情を告げて其要求を緩ふすへし幸に齊昭の身閒なるあり命を承らは老たりと雖も進て海に航し忠を盡す所あらんと。す備中守大に驚き將軍に告げすして之を還へす十二月二日備中守台命を承けて互市場を開くことを議す巴爾理士より全權公使を江戸に置き事務を執らしめ且下田港は不便なるを以て他港に換へ其場所既に定られ商館を建て並に寺院を造り商稅を輸し阿片を禁じ金穀を除くの外は兩國商人に任せて交易せしめ有司之を撿束することなかるべく此規約は政府の印信を請ふて後日の證となさんことを請求す是事重大幕府に於て專斷すへからさるものとなし且つ後の患あらんことを恐れ更に勅許を請ふことゝなれり三日夜水戸人堀江

信田遂田ハ獄中ニ死シ堀江ハ流罪

克之助信田仁十郎蓮田藤藏米國使館を襲ひ米使を斬らんとし捕はれに就けり八日林大學頭及ひ目付津田半三郎を京師に遣はし勅許を請はしむ二十七日關白傳奏に事情書を上る其要は四十五年以來万國の形勢一變し各國共に貿易を專らとなす本邦にも鎖國を開き使節を置かんとするの議歐羅巴諸國に於てこれあり米國は其首となり第三度の人撰にて使節を發し若し和議整はざるときは戰爭之に隨ふは豫め定まる所なり陂理の浦賀に來りし時已に一決すへきに本國よりの軍艦遲々せしを以て大統領の書翰を留めて去り翌年來るに及び彼我共に戰爭の覺悟を極めたり然るに數度の應接にて雙方の事情通暢せしが爲めに終に和親に至り條約を結へり此處置に對し異議を唱ふるものあれとも乃戰爭の一段に付ては万國の時勢を考へ專ら理世安民を思はさるへからす已に條約濟十八月なり約の如

く米國使節國書を携へて下田に來り將軍に謁見を請ふを以て昨年來數度應接の末登營を許し更に要求の條あるを以て茲に允准を請はんとは彼の望む所は十港を開くにあれども是は減少すべく開市場は江戸近邊に設け雜居は之を禁し殊に嚴に取締り京師の安寧を妨げるか如きは力を盡して之を拒がんとす方に今海外の時勢變改し寛政以來の舊制たる鎖國の法を改め万國に交際せざるときは米國其外一國と戰ふに於て勝利或ひは之れあるべきも彼の同盟各國軍艦を以て代はる代はる攻め來るに至り假令へ勝利ありとするも國力疲弊し且清國は一度戰端を開きしより今に至り外寇內患止む時なし故に外國の處置は寛永以前に溯るを以て時勢に適せりとなは又蝦夷地の如きは米露手を引く時は英人必ず來るへし万國の形勢同盟の事諸國航海隆盛の狀は命あらは尚條陳する所あるべしといふにあ

安政五年

大閤政通

關白尚忠

り

安政五年正月十七日朝廷諸公卿を召し僉議あり而して參議以上の公卿三十五人をして各其意見を上らしむ是に於て親王家を始め公卿は盡く和親貿易を以て國體を穢すものとなし幕府の擅まゝに條約を結ぶことを排斥し各諸侯に勅して意見を上らしむへき旨を建言に及はれたり之に依り朝議一決して大學頭等の請ふ所報せさるなり大學頭等大に驚き急使を馳せて之を江戸に報せり幕府事の容易ならさるを知り二月五日老中堀田備中守及ひ川路左衞門尉上京本能寺に館す備中守參內ありて上奏する所前に大學頭の陳するものと意同じ其後ち鷹司大閤に見えて事を告げんと欲すれども大閤病と稱して逢えば爲めに空く數日を過きたり二十一日九條關白以下參內僉議あり已にして兩傳奏備中守の旅館に就き今回の一條は神宮に對し

御代々に對し如何かなるへきやと深く宸襟を惱まさる此期に至り人心の安否國家の重事たるを以て三家以下諸侯の赤心聞食され度き思召なるを以て猶一應台命を下し各意見を書して叡覽に入るべき旨を達す三月幕府の答書至るを以て備中守奏して曰く閫外の事は既に將軍に任せらる三家以下の赤心は既に其意見を聞き心服の上にて事の決せしなり故に人心の安否は叡慮を勞さるゝに及ばず即其意見書を叡覽に入れ奉るは憚る所あり之を出し難きなり此時諸藩の有志者或は浪士と稱するもの京師に入り東西の議論如何に決するやを窺ひ知らんと欲し或は頻りに時事を切論し公卿に出入する等あり巷説紛々し訛言百出して公卿も亦方向に惑ふに至る勅許の事速かに辨せさるを以て幕府は巴爾理士に向ひ答ふへきの辭なし巴爾理士は亦頻りに幕府に逼りて印信を促す老中等之に諭して曰く方

長野義言

島田正辰

駿河守峯暉

に今備中守上京せしを以て專ら朝議中に繫はり遠からず勅允を受け歸るべきが故に暫く猶豫すへし巴爾理士尚可かずして曰く某之を聞く日本の政權は幕府に在りと今斯く時日を費とは何の故ぞや已に因循決せずんは直に京師に至り請ふ所あるへしとて逼ること益々急なり老中等は大に困み日を刻みて其期を延はし屢々急使を京師に馳せて之を備中守に報ず備中守東を顧みれは米使の督促は星火よりも急に西に向へは朝廷の議は金石よりも堅し進退甚だ窮する時に長野主膳といふものあり曾て井伊掃部頭の命を受けて九條關白家へ使し其臣島田左兵衛權大尉と相知れり且主膳は和歌を善くせしを以て公卿にも知人多きを聞き其人用ふへしとし禁裡付都築駿河守より竊に之を備中守に薦めたり備中守も策已に盡きたるを以て駿河守をして主膳に謀らしむ主膳は左兵衛權大尉に頼て九條關

大納言聰長

中山大納言忠能
正親町三條大納言實愛
正親町大納言實德
八條宰相隆祐
中院宰相通富
橋本宰相實麗
野々宮宰相定功

白に說を進め遂に其心を動かしゝより關白一日傳奏東坊城大納言を招き頃日來幕府の事情を聞くに內外の間に介して進退實に切迫を極めたり復外國の時勢をも察せざるべからば故に今に及び公武合體の廟議決定せずんは西東隔絶の姿となり內亂を生ずるも測り難し然るときは朝廷に於ても不利これより過ぐるものはあらば是を以て外國の處置は幕府に委任するの外なかるべし因て傳奏をして內奏に及はしめらるゝ之に依り勅書の草案を公卿に示されたり其文中に外夷の所置は幕府に委任せらるゝの條あり之か爲めに議論沸騰し是月七日中山大納言正親町三條大納言正親町大納言八條宰相中院宰相橋本宰相野々宮宰相の七卿上書して勅文を改めんことを請ふ曰く天照皇大神宮以來赫々たる神國當代に至り蠻夷と伍を爲すことならは神國の瑕瑾此上なく皇祖に對し奉り恐懼嘆息の至りに堪え

尊融親王
前內大臣實萬

ざるなり彼の征夷府は如何なる心ぞや已に叡慮伺の爲めに老臣上京せしめ而して勅に應ぜば反て上を誣るに同意の趣きを以てし諸侯及び万民を壓服せんとするの意に出でしならん蓋墨夷一使の應接すら强情容易ならざるに諸蠻追々來集するに及び表面には互市の利を說き內實に火砲軍艦を以て恐嚇を施さんとするの夷情たること疑ひなし能く我國民を懷け教法を布き人氣を察し地理を知り終には奪はずんは饜かざるの夷其猛威を振ひ難題を設けて兵端を開き皇國を押領せんとするに方り何を以てか敵對すべき遂に戰はずして降參に至るべし是れ匹夫と雖も慨嘆の次第なり況や大祿を領する諸藩人に於ておや故に三家を始め諸侯の意見を諮詢あらせられんことを請ふ十二日堂上八十八人上書する所も亦前文の意に同し或は堂上地下人々百餘人九條邸に至り意見を上陳せり朝廷にては靑

蓮院宮法親王三條前内大臣中山大納言を海防御用掛となし東坊城大納言の傳奏を罷め議奏万里小路中納言に命じて傳奏の事を行はしむ玆に於て長野主膳等の策略皆破れ都築駿河守は慚憤して自殺するに至る二十九日備中守を小御所に召し關白三公列座の上勅答を授けらる其要に曰く墨夷の事は神州の大患國家の安危に繫れり神宮歷代に對し恐れ多く思召され東照宮以來の良法を變革するは闔國人心の歸嚮に拘り永世の患害たるべき事深く叡慮を惱ませられ往年下田開港條約すら容易ならざる上は今又假條約の趣は國威立ち難く思召され且諸卿群議上啓する所あり因て三家以下諸侯に台命を下し衆議を採り言上すべし既にして備中守に歸府を命ぜらる備中守より昨日勅答の趣き恐れ入り奉れども方に今墨夷と應接切迫異變も測り難し然るに勅答の趣も之れ有る上は此後朝意の決する迄

關東に於て寛猛兩様共處理し難く若し万一事急なるに及ぶときは一方に決斷然るべき哉との旨を上れり二十六日傳奏備中守旅館に就き條約は決して許容せられず若し事端相生ずる時は精しく鎮撫或は彼より異變に及ぶ時は是非なし伊勢神宮の神慮を伺ひ定めらるべき旨を達せり幕府よりは奥右筆早川庄次郎を上京せしめ備中守の歸東を促がす四月五日備中守及び川路左衞門尉等京師を發し二十日江戸に着せり

第二章　繼嗣議起　條約調印

徳川將軍は多病の性にて國事多難の時に當り之を匡濟するの氣力なく且年齡既に三十を過ぐれども子なくして繼嗣未だ定まらず是を以て諸臣竊に賢明の資あるものを宗族中に擇み西丸に立てんとす水戸前中納言の第七子七郎麿幼より英敏を以て

前將軍家慶
刑部卿慶喜

薩摩守齊彬

安政四年
越前守慶永
阿波守齊裕
遠江守宗城
土佐守豐信
飛騨守鑑寛
西鄕隆盛

安島信立

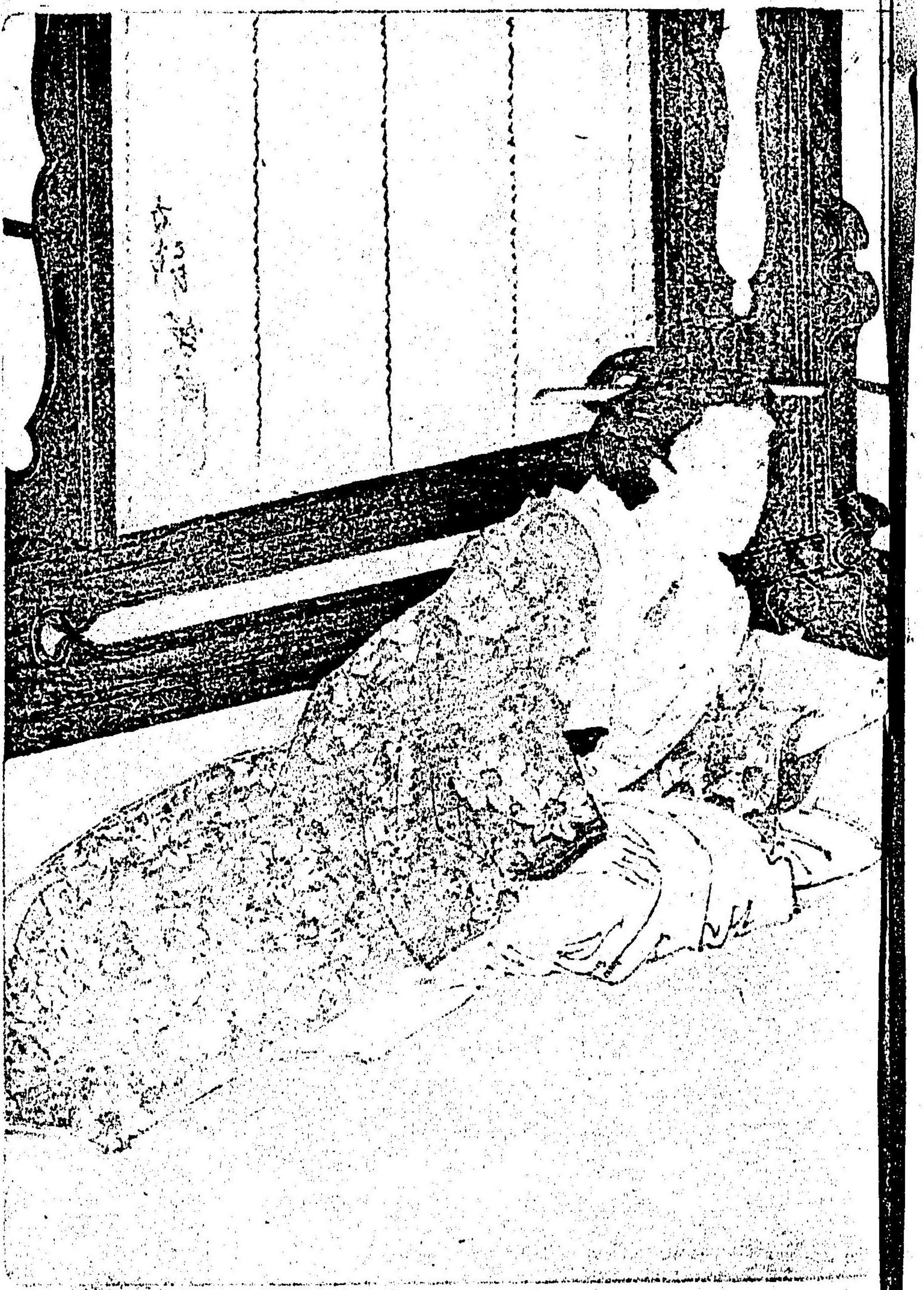
聞ゆ前將軍薨て子となし一橋家を相續せしめ刑部卿と稱す是れ繼嗣の豫備に充てしなりといふ老中阿部伊勢守既に意を此に屬すれども未た發するに及ばずして卒し松平薩摩守も亦夙に此意あり外國の事日に切迫なるに及ひ幕府中將軍の尫弱なるを憂ひ繼嗣の議漸く起れり

安政四年九月松平越前守松平阿波守連署して建儲の議を堀田備中守に致し中外望を一橋刑部卿に屬するが故に速に西丸に立つべきの事を以てす伊達遠江守松平土佐守立花飛騨守等之に同意し薩州よりハ西鄕吉之助を江戸に登せ幕府の大奥と諸大名との間に周旋せしめ三條前内大臣近衞左大臣も此議を助け東西相應して之を推す事頗る漏るゝより海内知名の士も響應して議論紛々たり水戸前中納言已に其事を聞き深く嫌疑を憚り家臣を戒めて言ふことを勿らしめ家老安島帶刀の言此に及

大和守廣周

筑後守忠徳
丹波守頼旨
玄蕃頭尚志
民部少輔長鋭
織部正利熙
肥後守忠震

ぶを以て痛く譴責を受くることあり十月堀田備中守久世大和守等陰かに其意を刑部卿に陳じたるに卿ハ堅く之を拒ぎ假令へ台命ありとも必ず固辭すべき旨を答へたり事中ころ止み去年備中守將に條約の勅允を請ハんとして發するに先ち西丸の議復た起り水野筑後守土岐丹波守永井玄蕃頭鵜殿民部少輔堀織部正岩瀨肥後守等老中に建言し川路左衞門尉井上信濃守等之に同意す只大奥側衆ハ論未た定らず奥女中ハ皆水戸前中納言の常に節儉を主とせるを聞き其風延て後庭に及ばんことを恐れ之を忌むこと殊に甚しく爲めに刑部卿の西丸に立つことを欲せば井伊掃部頭も亦此を以て私利を謀るものとし下として上を撰ふの非を論ぜり備中守ハ年長賢明を立つるハ諸侯有司の望む所なりと言へハ掃部頭之に答て假令へ之を立てゝ西丸とするも將軍を廢するにあらざれば其効あるべからず然らハ

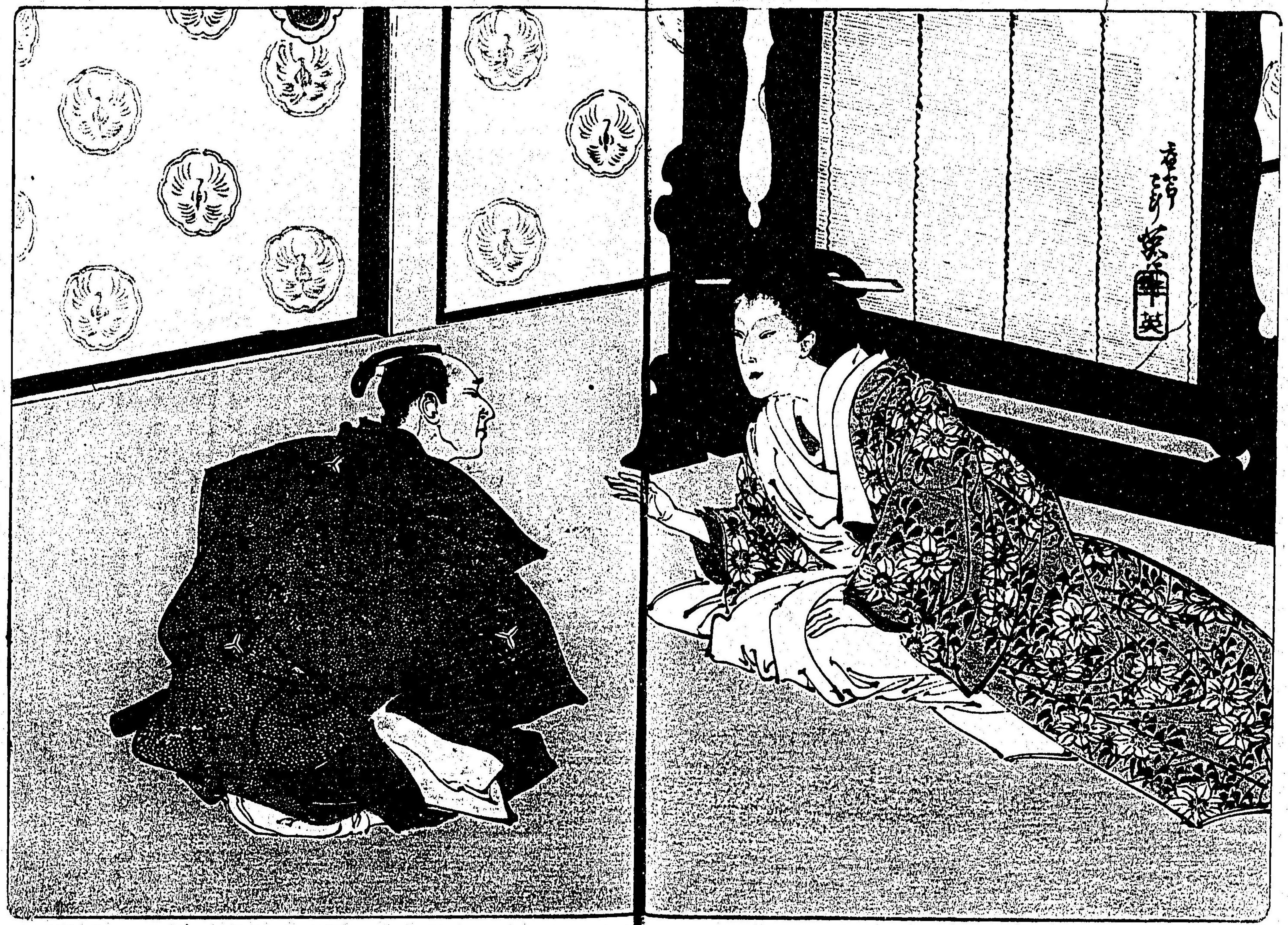


大納言齊順
宰相慶福

土佐守忠央

長野義言
島田正辰

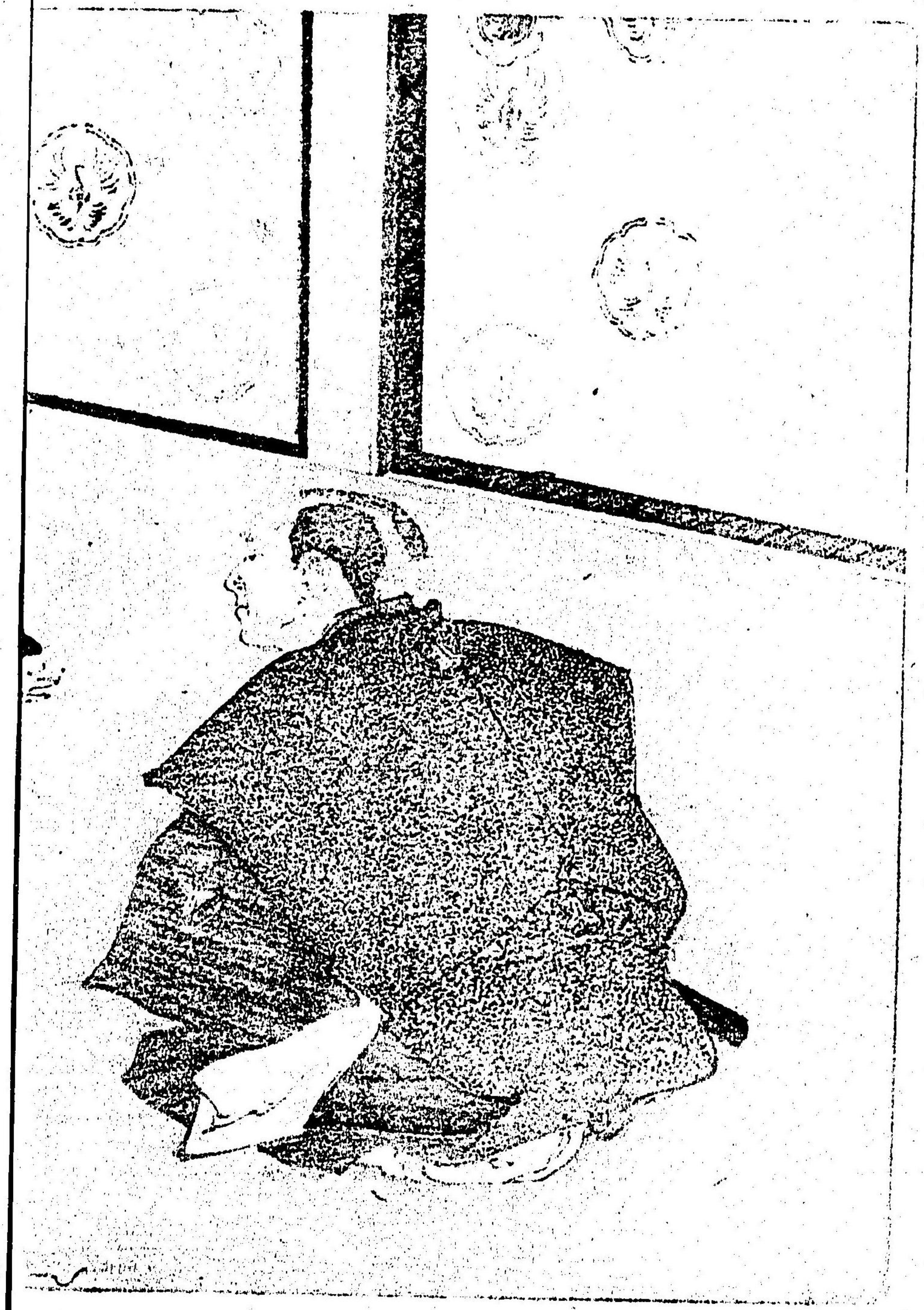
則廢立を謀るに均きのみ乃紀伊大納言の子宰相を迎へ儲嗣となさんとそ之に依り備中守同僚と議し刑部卿と宰相とを推して將軍の裁決を請ふに至る將軍は宰相を立つる、に決せり是れ紀州家老水野土佐守忠央に井伊掃部頭に入說し又大奧上臈歌橋に結托し將軍の母堂本壽院跡部氏に依り將軍に勸めて宰相に定めしなり長野主膳京師に抵り島田左兵衛權大尉と謀り九條關白に就て外國の事幕府に委任すべきを說くのミならず幷せて紀伊宰相を西丸に定むるの議に付贊助を請へり時に松平薩摩守書を近衛左大臣三條前内大臣に呈し勅を下して一橋刑部卿を繼嗣に定めしめんことを請ふ關白其議の幕府親藩及ひ有志に出でずして遠く外藩の薩摩に出てしを怪ミ主膳を召して掃部頭の意を問ふ主膳ハ其意素より宰相にあるを以て答ふ水野土佐守も亦家臣を上京せしめて九條關白に入說し相結で刑


應需年英
年英

安政五年
備中守正篤

部卿の事を沮まんとす土佐守は此時江戸に居るを以て又松平伊賀守に説き已に同意せしめ松平越前守は猶前議を主張し伊賀守に促がせども言を左右して之を決するに至らず

安政五年三月二十二日傳奏議奏堀田備中守旅館に就き幕府西丸の事は英傑人望年長の三件を以て撰擇し速に治定すべき旨を内達す已にして九條關白は主膳の言を納れ諸卿も之に同意する人あり議論頻に起り遂に詔を矯め年長英傑人望の三件を除き急務多端の時節英君を決定して西丸を守護し政務を補助するは今日の幸と思召さるゝ旨關白及び大閤の命ありとの意に改めしむ備中守は張紙して「年長の人を以」ての六字を加ふ又萬世長久の良策の事諸夷取計方後患之れ無き樣取計ふ事との命あり蓋し万世長久の良策とは年長英傑人望の三件を指されたるものと知られたり



丹波守道弘
筑前守元眞
因幡守正典
（石谷）因幡守穆清
越前守慶永

外國の事件既に切迫なるが上に繼嗣の議起り各黨與を分ち一橋刑部卿を推すもの松平越前守を以て主となし水野筑後守永井玄蕃頭等數人之を助け紀伊宰相を推すもの水野土佐守謀主となり老中松平伊賀守陰に之を助け平岡丹波守藥師寺筑前守久貝因幡守石谷因幡守松平對馬守等も亦相應せり然ども共に主領なきに苦む因て松平伊賀守は意を井伊掃部頭に通して共に之を謀る平岡丹波守は上臈歌橋と意を合せ本壽院に說き望みを果さんとす堀田備中守歸て中山道蕨驛に宿するを聞き松平越前守書を備中守に寄せて歸るの日直ちに決せんことを勸む備中守已に公卿以下京師の議論激昂するを見て大に時勢に察する所あり岩瀨肥後守も新に京師より歸り西丸に賢明を立つるの議を主張し將軍も亦之を納れ刑部卿に決して備中守を待て發せんとす事旦夕に迫まるを以て紀伊宰相を推すの黨大に騒き歌橋を以て本壽院に謀る本壽院は若し刑部卿に決せば只今自害して死すべしといふて將軍を劫かは將軍大に惑ふ是より先き其黨は井伊掃部頭を擧げて大老たらしめんとするの議を以て本壽院に說き將軍に勸めし備中守の歸着せざるに先ちて之を發せんとは未た果されは四月二十日備中守歸る然ども共密計を知らさるなり備中守內勅を奉して刑部卿を立つるの議を唱ふ伊賀守僞はり之に同意し陰かに備中守を除かんことを謀る二十三日井伊掃部頭大老となり先例に據らは直に御用部屋に列座せしむ

岩瀨肥後守は堀田備中守に先だちて歸り米使巴爾理士に諭す所あり二十四日に至り備中守巴爾理士を其邸に召し告げて曰く國內人心貼服し難きを以て朝廷に請ふ所あれども猶前議を固守せられ下田條約の外は一切聽許を得す今強て之を破るに

於ては內亂を生ぜんことを是を恐る然れども既に約する所ハ決して動かすへからバ幕府の權を以て尙奏上して許可を得べきを以て其間姑らく猶豫を要せん巴爾理士曰く既に定むる所あるに上下の議に拘泥し之を決行するの權力なしとせば是れ某を欺きて國書を受けたるものなり此事諸國に聞ゆる時ハ皆江戶を措き京師に向ハんとす某も亦其權力ある地に赴て可否の決を聞かんと欲するなり然らハ幕府權を失ふのミならバ外患も亦將に生ぜんとす備中守尙之を慰諭す此日ハ此の應接あるゟ爲めに備中守諸有司に先たちて退きたり松平伊賀守久世大和守二人將軍の前に於て密に紀伊宰相を以て西丸に立つることに議決し是より益〻謀りて備中守を斥けんとす初め掃部頭の大老となる時海防掛諸有司服せバ永井玄蕃頭鵜殿民部少輔岩瀨肥後守等ハ老中に對し掃部頭を以て大老となすの失計たるを激論せり二十五日勅答幷に諮問の條目を諸侯に班示す是に至り備中守の權力稍衰ひ松平伊賀守大老の權勢を負み專ら事を決するに至る一橋刑部卿を推すもの即鵜殿民部少輔等を指して廢立黨と名づけ之を擯斥齒列せバ備中守孤立援けなく復之を如何ともすること能ハバ五月二日老中連署して七月二十七日迄調印を延期せんことを約し猶自餘の諸國と談判の事ありとも米國に調印せし後三十日を經されハ之を爲さゝることを盟ふ六日巴爾理士將軍の大統領に答ふる書翰を受けて下田に歸れり此日將軍井伊掃部頭を召して紀伊宰相を養て西丸に立てんことを托し備中守を退けんとす是又本壽院より勸むる所ありと云ふ已にして尾張水戶を始め大廣間の諸侯勅答に對し意見を上るもの頗る多く水戶中納言の意見書ハ外國の要請を拒絕するに在るを以て備中守ハ松平越前守に托して中納

言の建白を改めしめんとす越前守背かす水戸前中納言廟算伺書を作り之を呈す是又省せられす鵜殿民部少輔は大目付土岐丹波守は大番頭に轉し勘定奉行川路左衞門尉は西丸留守居に徙り目付鵜殿民部少輔は駿河町奉行となる是皆廢立黨を以て要路を去らしめられたるなり堀田備中守慨嘆して松平越前守に告げて曰く死を以て繼嗣の事を爭んとし之を將軍に陳するも唯其涕泣するを見るのみ後可否の決を得ること能はず外國の事諸有司皆決を吾に取る吾若し退かは事乃解體せん故に忍んで今に至れり然るに伊賀守は大老に結て吾を斥けんとし其餘は只勢を觀望するの徒のみ大奥近臣は皆刑部卿の明を忌み黨類滋く多く且外事は朝廷の勅を奉するを得す西丸の事も亦内勅に逆ふことあらは何を以てか叡慮を安することを得んや唯力微にして勢非なり復爲ん所を知らすといへり

宰相慶福

内大臣實萬
左大臣忠煕
關白尚忠

下總守詮勝

道醇故ハ備後守資始

信濃守淸直
肥後守忠震

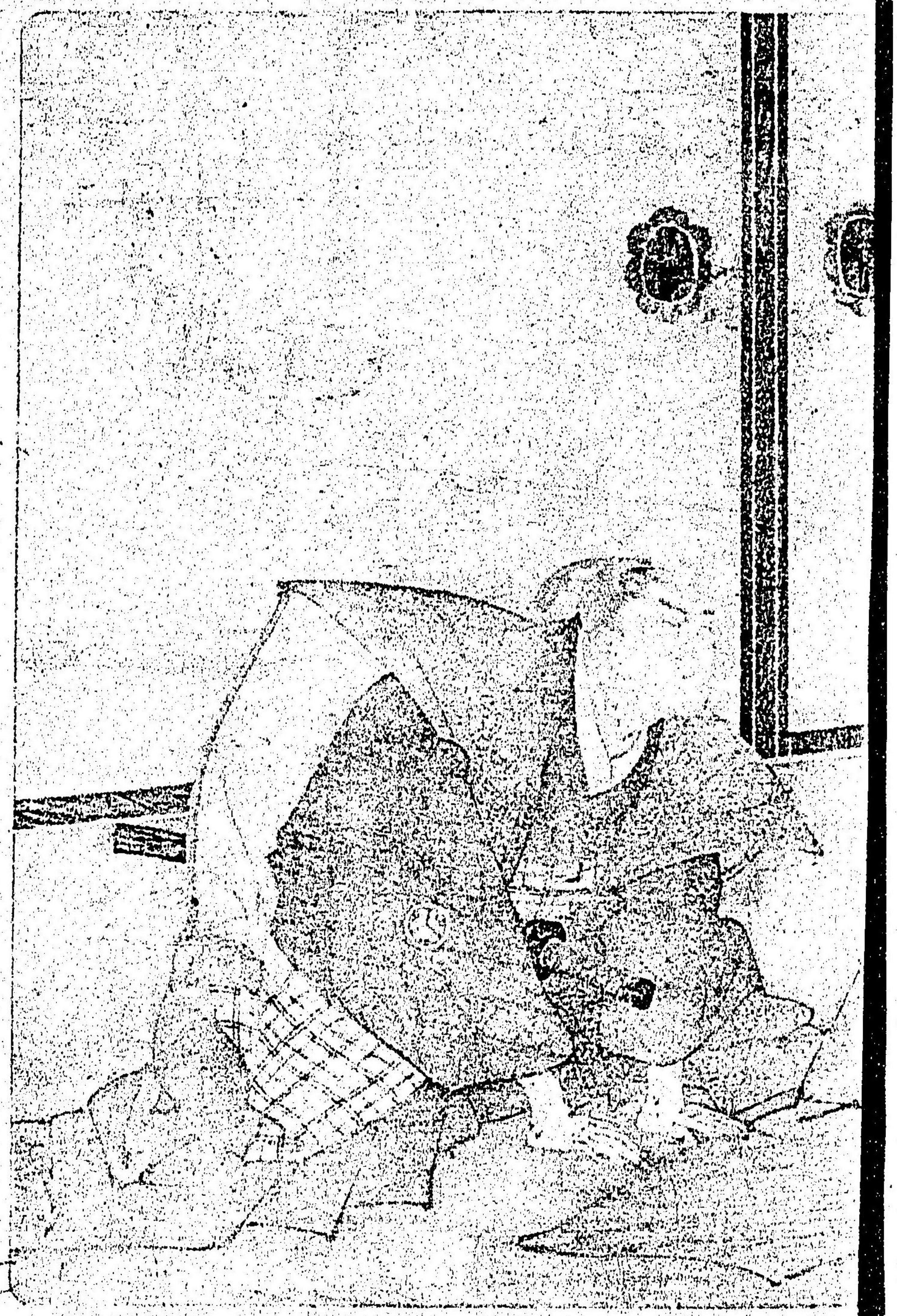
六月朔紀伊宰相を以て將軍の繼嗣と定め之を發喪して京師に奏したり松平越前守松平土佐守伊達遠江守相謀り書を三條前内大臣に致し關東の奏問を待たすして特に勅して一橋刑部卿に定められんことを請ふ三條前内大臣近衞左大臣と謀り之を上奏したるに九條關白之を沮み其議遂に行はれす間部下總守の參勤するに方り井伊掃部頭之を見て竊かに老中職に復することを約せり初め下總守太田道醇と共に老中たりしか堀田備中守と議論合はずして退きたるか故に備中守職に在る間は二人は復職の望みなかりしが茲に至り掃部頭に因縁して共に謀る所ありしなり是月十三日米艦一艘下田に來り續て露艦の來るあり米露二艦共に進て内海に入り小柴村海上に至る巴爾理士も亦其艦に在り幕府井上信濃守岩瀬肥後守をして之に應接せしむ巴爾理士二人を脅かして曰く英佛露の軍艦四十隻將に

伊賀守忠優

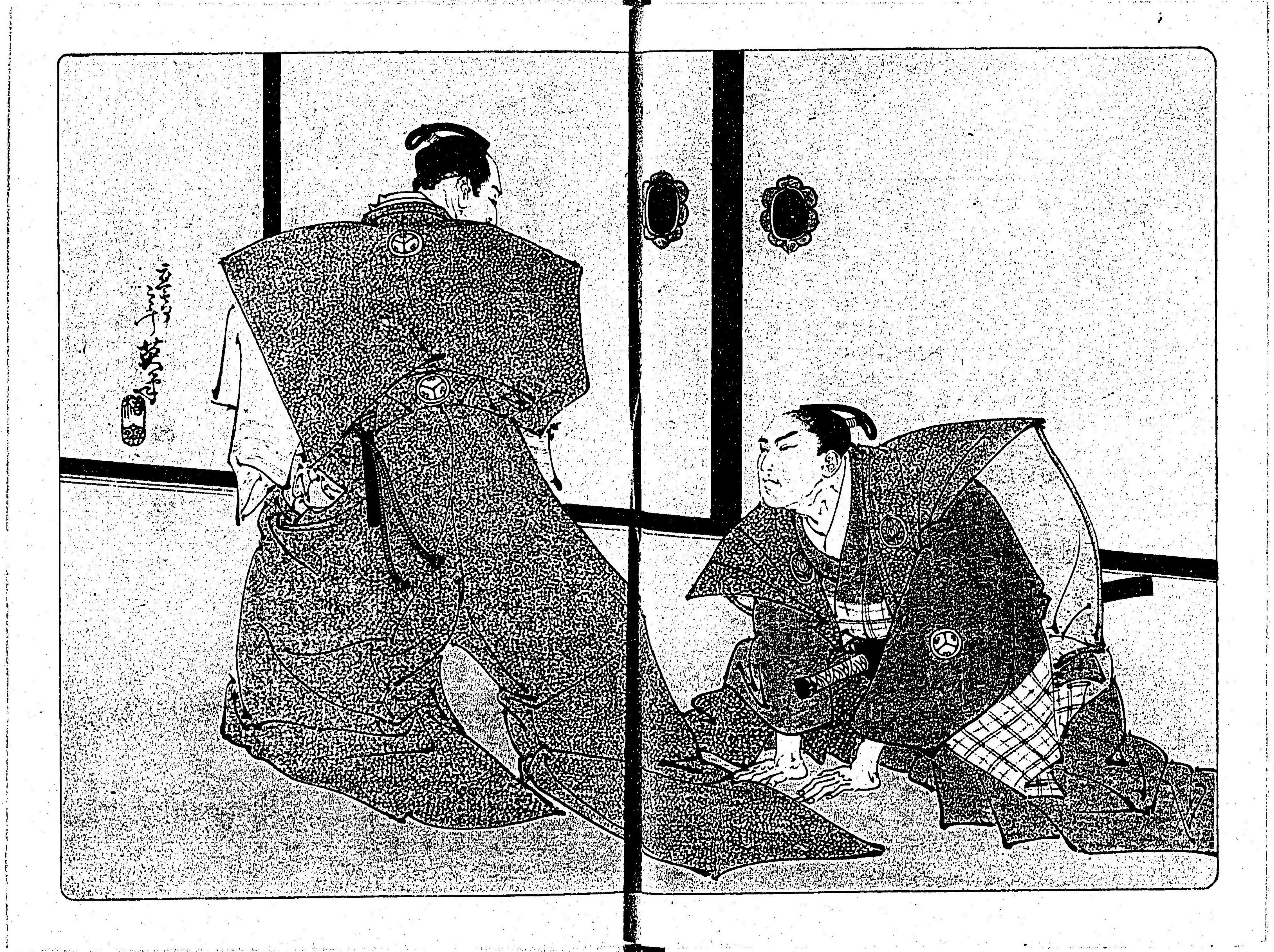
來て貿易を請はんとす殊に英と佛とは清國廣東の戰に勝ち其勢に乘して拖至るへし若し其請を許さすんは戰端の開くるや必せり今其來たらさるに先たち條約に調印せは彼れ後ち來るとも其上に出ること能はさるや明けし故に速に順序を進めて其難を避くるに若かさるなり二人選て之を大老老中に告く井伊掃部頭は勅允を待たんといひ松平伊賀守は京師の望に副ふを求むれは際限なきことなり斷して行ふに若かすといふ海防掛は事機既に迫まれりと稱し伊賀守に同意を表したり十九日井上信濃守岩瀬肥後守を神奈川に遣はして巴爾理士に應接して條約に調印せしむ翌日之を奏聞に及ひたり其要は亞黑利加條約の次第深く叡慮を惱まされ三家以下へ再應諮問すへきの旨を頒し已に其存意書を具備せんとするに際し露西亞亞黑利加兩國の船渡來し英吉利佛蘭西の軍艦も近日將に渡來せんとす然る上は應接困難に至り万一清國の覆轍を踐むか如きことならは容易ならさるを以て井上信濃守岩瀬肥後守を遣はし神奈川に於て調印に及ひたり是より益ゝ海防を充實して叡慮を安し奉るへしといふに在り而して西國中國の諸侯に命して京都大阪兵庫等を警衞せしめ又堀田備中守松平伊賀守の登營を停め條約調印の事を諸侯に班示したり二十三日備中守伊賀守共に老中を罷めらる太田道醇間部下總守之に代はる道醇復備中守と稱す田安中納言一橋刑部卿登營あり刑部卿先つ大老掃部頭に向ひ勅允を待たす條約に調印するの不可なるを論詰すれは掃部頭恐入る旨を陳謝す因て速に大老老中一人京師に詣り失體を謝すへきを告け尋て老中を見て同しく之を詰す久世大和守は據ろなき場合たるよしを陳す卿には據ろなきと云ふは彼英佛軍艦の事なるへし其艦は今安くに在るや未た一帆の

中納言慶頼
刑部卿慶喜

大和守廣周



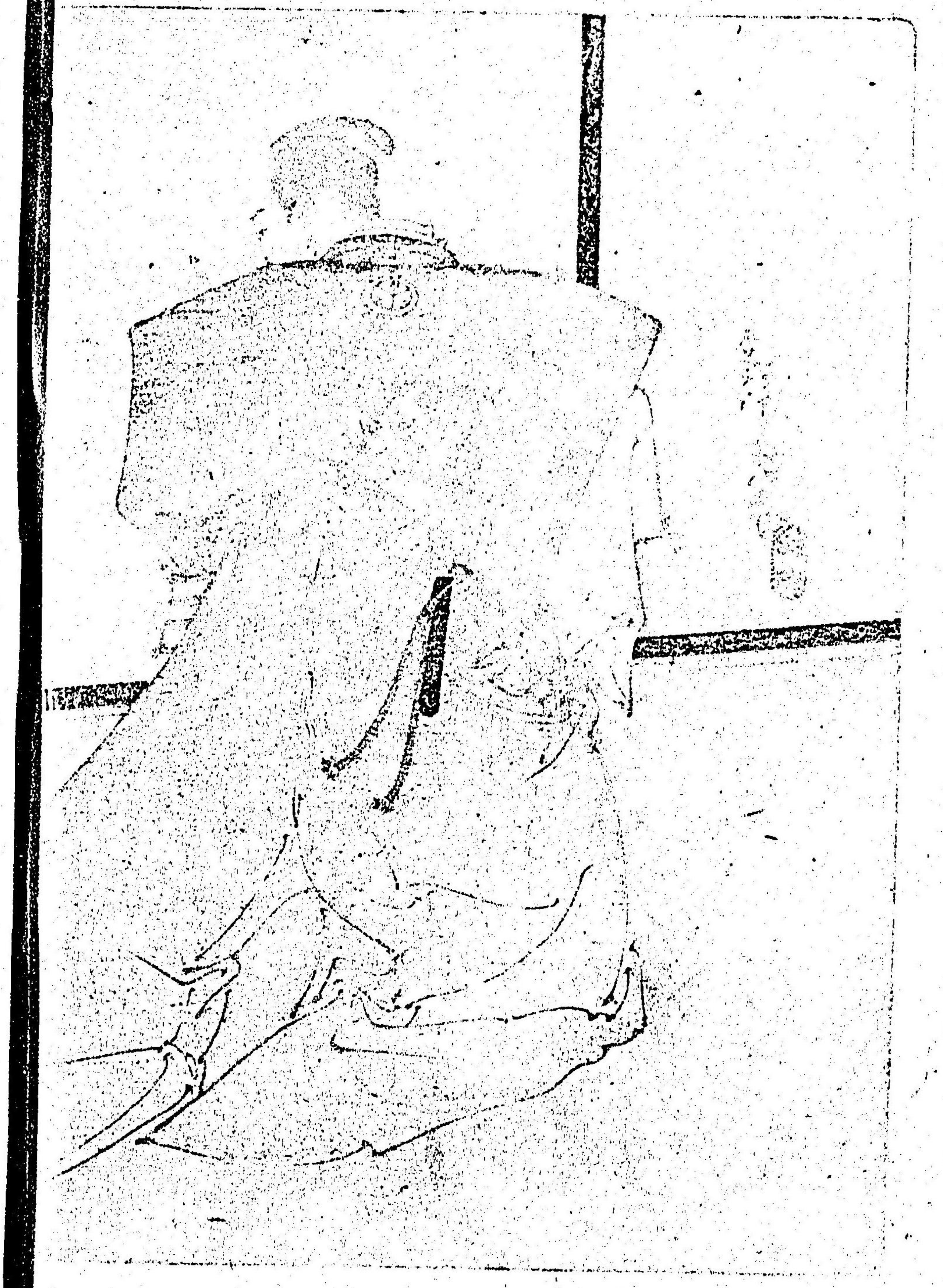
影たも見さるに既に戰敗れて將士死し今一戰に及はゝ大城も危からんとするか如きの思を爲すそれ是れ何事ぞや說客の言を信し東照宮以來尊王攘夷の大義を誤り將軍をして違勅の人とならしむるは朝廷を輕んし將軍を思はさるの致す所なり既に爲せし事は責むるも詮なし直に京師に上り罪を引て謝辭を陳すへしといふ皆唯々して之に從ふ二十四日尾張大納言水戶前中納言幷に中納言松平越前守登營して掃部頭に逢んとせしに掃部頭速に出てず夕景に及はんとする時出て見る大納言其勅に違ふて調印せしことを責むるに掃部頭强辯して屈せず前中納言は內外多事の日に當り忠誠愛國且つ名望あるは越前守に若くものなし宜く此人を以て大政を輔けしむべきを告く是れに先だち越前守も亦調印の事を責むと雖も掃部頭辯論して止まずといへり是日は一橋刑部卿將軍へ對顏の定日にて登營



ありて掃部頭を見て京師の使者既に定まれりやと問ふに公務多事未だ之を決せずと答ふるより卿は何をか多事といふや今日公務の大なるものは此事を舍き外に之れあるべしとも思はれす已に將軍の違勅に陷らんとするに方り他事に汲々たるとも果して其職を盡せりとするか宗家の大事を直に上陳するは吾等當然の務めなりとて立て將に内に入らんとす掃部頭も亦從て進み其袂を捉らへ使者の事は今日之を決すべきを以て姑く上陳を猶豫せんことを請ひ堅く約して去る是日遂に間部下總守を京師に遣はすことに決したりといふ亦大廣間詰諸侯連署して違勅の不可なるを論したり

第三章　水戸賜勅　志士逮捕

孝明天皇睿明の資に渡らせたまひ外國の事起りしより深く宸



前內大臣實萬

襟を惱ませられ宸筆の宣命を伊勢加茂石淸水に上り奉幣使の京師を發せしより飮食を絕ちたまふこと七晝夜淸涼殿の庭に出てゝ遙拜せらるゝ三條前內大臣は玉體を損し奉らんことを恐れ之を諫むるに天皇のたまはく二千五百年の國體朕か世に當り始めて之を辱むるあらは何の面目ありてか祖宗の靈に對するを得ん朕は其身を省みるに遑まあらさるなり天皇の御製に

皆人の心のかぎり盡してや
後こそふかめ伊勢の神風
朝な夕な民やすかれと思ふ身の
心に懸ること國の船

安政五年
下總守詮勝

安政五年六月幕府は條約に調印せしことを上奏す尋て老中間部下總守近日上京事の顚末を奏上すべきを報ず其奏狀の遲するや天皇大に震怒したまひ公卿百官を集めて廷議せしむ七月朝廷飛報を江戶に下して勅許を經ずして擅まゝに條約に調印せしを責め且三家大老の內一人をして上京せしむ大老井伊掃部頭大に驚き其事水戶の內奏に出づるかと疑ひ尾張水戶越前を罪せんことを謀れとも名の問ふべきとがなし乃其急登城を罪として六日俄に尾張大納言に致仕を命し水戶前中納言を駒込邸に徙し松平越前守に致仕を命し且各〻謹愼を命し又水戶中納言一橋刑部卿の登營を停む老中大田備後守は、其罪證なくして親藩を罪するの不可なるを論するに掃部頭聽かす乃京師を搜索せは必す罪狀を發見すへし若し之れなくは吾固より其責に任ぜんのみ

掃部頭直弼

大納言慶勝
前中納言齊昭
越前守慶永
中納言慶篤
刑部卿慶喜
備後守資始

將軍家定

是日將軍薨す將軍久しく病に臥し外國の事繼嗣の事頗る其心を苦ましめ病爲めに重きを致したるなり井伊掃部頭等喪を秘して發せず翌日詔を傳奏に上達し尾張水戶は罪あり謹愼を命

丹後守恭固
土佐守政平

薩摩守齊彬

土佐守忠央

し紀伊ハ年少なるを以て共に命に應し上京すること能ハす大老ハ外國に關る事務多端にして幕府を去り難し因て間部下總守を遣ハすへきを以て姑く之を待たれんことを請ふとの意を告く是夜若年寄本鄕丹後守側衆石河土佐守を罷め奥醫師岡櫟仙院の俸を減し致仕せしめ謹愼を命す櫟仙院ハ將軍の診察を誤りたるの罪に依り且三人共に彼の廢立黨なるを以てなりといふ松平薩摩守性英明久しく國事の振ハさるを嘆し有名の諸侯と交り矯正する所あらんとす近來幕府の處置當を得さるを憤り大衆を率ひ將に京師に入り大に爲す所あらんとし國を發して幾許ならす十六日途に卒す聞者皆痛惜せり紀伊の家老水野土佐守竊に間部下總守に說て曰く京師の關東を責むるものハ水戸の内奏あるか爲めなり前中納言を嚴責して東西の通路を絕つハ公武を合體するの上策なり下總守之を信し掃部頭に告

讃岐守賴胤
兵部少輔正誠

け水戸の支藩松平讃岐守松平大學頭松平播磨守の家臣をして嚴に駒込邸を防守せしめ竹腰兵部少輔水野土佐守をして水戸の取締を爲さしむ玆に於て水戸の士民大に激昂し君寃を訴へんと欲し爭て南上するもの頗る多し駒込邸に集まるもの亦數百人なり掃部頭も亦戒心する所ありといふ八月八日將軍の喪を發し芝增上寺に葬る

已に幕府ハ尾張水戸越前を罪し大老ハ上京を辭し間部下總守も上京延期を上奏し又薩摩守途に卒する等の事なり幕府の專恣薩摩守の急變の如き大に人心を動搖し處士横議訛傳百出して京師ハ實に紛議の衢となれり事朝廷に聞え天皇深く叡慮を惱ましたまひ有志の縉紳切齒扼腕すと雖も匡救の術なきに苦めり西鄕吉之助先つ京師に入り薩摩守を待ち勅命を得て大老掃部頭の罪を問ふ所あらんとせしに是又齟齬するに至れり薩

日下部信政
鮎澤國維
勝野正道

摩藩士日下部伊三次江戸に在り亦上京して謀る所あらんとし人に謂て曰く吾曾て三條前内大臣の知を受けたり大臣は掃部頭の姻家なり故に大臣に勸め掃部頭に說き其職を退らしめぞんれ尾張等三家の幽禁を解く所あらんと欲す慷慨志士と携さひ水戸藩士高橋多一郎鮎澤伊太夫等と謀り幕府旗下士阿部四郎五郎家臣勝野豐作も亦國事を憂ひ伊三次と交りあり因て供にせんことを約し一夜茶亭に於て送別の會を開く來り餞けするもの數人使を以て水戸の家老安島帶刀を招く帶刀は其何事なるを知らず至り見れば各〻密議細語事頗る常に異なるに似たり帶刀之を怪み辭し去といふ伊三次豐作星夜馳せて京師に至る伊三次交友多く京に在り日夜往來謀議せしに薩摩守の訃至るに及ひ皆爽然として計を失ふ伊三次頻りに水戸を稱して公卿以下に遊說し水戸の力ら能く幕府を匡正するに足るものとす京師水戸邸の留主居鵜飼吉左衛門及ひ其子幸吉勝野豐作等と謀り鷹司家臣小林民部權大輔同高橋兵部權大輔三條家臣森寺若狹守西園寺家臣藤井但馬守青蓮院宮臣山田勘解由伊丹藏人有栖川宮臣飯田左馬久我家臣春日讃岐守處士梁川星巖梅田源次郎頼三樹八郎山口薫次郎等と往來密議せり夫此諸氏は初め幕府繼嗣の事に關し京師に在りて周旋せし所あれとも其事果さず遂に至り東西策應して幕府の秕政を矯正し外國を攘斥せんと欲し朝廷に請ふて水戸家に勅を降さしめんことを計畫せり其事遂に九重に達するとを得たり

鵜飼知信
同　知明
小林良典
高橋俊璹
山田時章
伊丹重臣
飯田忠彦
梁川緯
梅田定明
頼醇

八月八日朝廷三公を召して廷議あり九條關白參朝なかりしを以て傳奏をして其邸に就き之を問はしむ關白は熟考奉答せんことを請ふ事急なり關白の奏を待たすして發せんとす偶〻女官讃岐井伊掃部頭の密奏書を進達す其要は降嫁せらるゝ姫宮

殿を新營し外夷の處置は關東に委任せられんことを請ひ尾張等三家一橋刑部卿と謀り將軍に毒を進めたるを以て罪を得たりといふに在り三公益〻憤激し議遂に決せり乃此の密奏は長野主膳等事の急なるを聞き之を以て朝議を動かさんことを謀るに出てたるなり八日勅諚を發せらる然とも之を幕府に下すときは壅蔽する所あらんことを恐れ鵜飼幸吉をして奉して水戸に赴かしめ又伊三次豐作も東に下る西郷吉之助大久保要入等其事を非なりとし之を止めんことを謀り周旋せんとすれとも勅書既に東して皆及はば十七日勅書水戸礫川邸に降る中納言大に驚き措く所を知らす之を前中納言に告く十八日勅書幕府に降る勅文共に同し

勅諚

先般墨夷假條約無㆓餘儀㆒次第にて於㆓神奈川㆒調印使節へ被㆓相渡㆒候儀又委細間部下總守上京可㆑被㆑及㆓言上㆒趣に候へ共先達て勅答諸大名衆議被㆓聞食㆒度被㆓仰出㆒候詮も無㆑之誠に皇國重大之義調印之後言上大樹公叡慮御伺之御趣意不㆓相立㆒勅答之御次第に相背き輕卒之取計らひ大樹公賢明之所有司心得如何と御不審に被㆓思召㆒右樣之次第にては蠻夷之儀は姑く指置方今御國內之治亂如何と大に被㆑惱㆓叡慮㆒候何卒公武御實情を被㆑盡御合體永久安全之樣にと偏に被㆓思食㆒候三家或は大老上京被㆓仰出㆒候處水戸尾張兩家愼中之趣被㆓聞食㆒猶又其餘宗室之向にも同樣御沙汰之由被㆓聞食及㆒候右は何等之罪狀に候哉難㆑計候へ共柳營羽翼之面々當今外夷追々入津不㆓容易㆒時節既に人心之歸向にも可㆓相拘㆒旁被㆑惱㆓宸襟㆒候兼て三家以下諸大名衆議被㆓聞食㆒度被㆓仰出㆒候はゝ全く永世安全公武御合體にて被㆑爲㆑安㆓叡慮㆒候樣被㆓思食㆒候儀外患計りの事には無㆑之內憂有㆑之候ては殊更

被惱宸襟候彼是國家之大事に候間大老閣老其他三家三卿家門列藩外様普代共一同群議評定有之誠忠之心を以て得と相正し國内治平公武御合體彌長久之様徳川家扶助有之内を整へ外夷の侮を不受様にと被思食候早々可致商議勅諚候事

午八月八日

近衞左大臣忠凞
鷹司右大臣輔凞
一條内大臣忠香
三條前内大臣實萬
二條大納言齊敬
近衞大納言忠房

御別紙勅諚之趣被仰出右者國家之大事者勿論徳川家御扶助之思召候間會議有之御安全之様可有勘考之旨出格之思召を以て被仰出候間猶内列之方並兩卿御家門衆以上隱居に至る迄列藩へも御趣意相心得候様向々へ御達可有之旨被仰出候

以上

[illegible]後守正綱

十九日老中太田備後守間部下總守は水戸中納言の召により小石川邸に趣き是日は大老井伊掃部頭出仕せざるを以て急使を遣はして登營を促がし大評議ありて水戸に下る勅書を沮抑するの議に決し幕府勅答を上り下總守上京奏問する所あるを以て其間勅書を開達せさる旨を陳す而して備後守下總守水戸邸に至り勅書の開示を止め且中納言に諷して家老を進退せしむ其勅書の處分既に定まるを以て下總守上京に決したり下總守曾て命を受けしより尾張水戸等を幽閉し加ふるに勅書の降るあり其措置頗る多端なるが爲めに逡巡して發せず遂に大老掃部頭と密議して志士を捕獲し公卿を黜斥して尾張水戸等の罪狀を摘發し水戸に勅書あるの事實を推究せんとするの策を

定む初め內藤豐後守伏見に居り京師幕府の間一和せし議論紛々したるを見て爲すへきの機會となし間部下總守に說くに朝廷公卿の事を用ふるもの僅かに數人に過きす諸浪士輩を驅りて出入するものならしめは紛紜自ら熄むへきの事を以てす下總守之を信し益々意を鋭にして處置する所あらんとし九月三日江戸を發せり

京師の志士は九條關白の其家臣島田左兵衛權大尉及ひ長野主膳の爲めに詿誤せられ關東に與みし敕旨に悖れるを憤り公卿に勸めて關白を罷めしめんとす諸大臣之を容れ關白に迫る關白止むことを得す九月四日辭表を上り近衛左大臣之を內覽す事聞ゆ幕府大に驚く井伊掃部頭書を上り水戸家の事を誣奏せり其大意に曰く水戸前中納言條理正く卓論ありと雖も直に間ふことあれは今日戰爭に及ふへき場合には之を無と言ひ常に言行相違の事多し是を深意のあるか爲めにして其實は一橋刑部卿を西丸に立て自身後見たらんと欲するの計略あるに因てなり有司も內々之に服從し堂上方にも右僞卓論に惑はされ之に荷擔する人あるやに聞けり既に將軍繼嗣事定まるに及ひ前中納言押て登營種々の申立てあり此事明白の處置に出ては容易ならさるか爲めに寬仁の意を以て謹愼を命せられたる次第なり然るに謹愼中に在りて竊に京師に周旋し種々の事を謀り遂に別勅をも下さるゝに至り乃國體を思召さるゝ懇切の叡慮も却て爭亂の基ともあらんとす因て水府風聞書を添えたり是を外面の說たりと雖も審かに推究せは實に容易ならざる事件たり關東への內問を他に泄すは恐懼に堪えすと雖も國家の大亂にも及ふへき大切の場合たるを以て陳述に及へり密々叡聞に達せられんことを請ふ夫れ此書の意を按するときは掃部頭は

明かに水戸前中納言を以て一橋刑部卿を西丸に立んことを謀りて成らず之を憤り其登營も亦之が爲めに勅書の下るも亦其謀に出てたるものと認定せしに似たり下總守加納驛に至るとき長野主膳來て密に京師の事を告く下總守書を掃部頭に贈れり其要に曰く水老の譴愼を免るし越前に大老を命すへき等の勅諚を下されたりといふ只一方の暴言のみ上聞に達し主上逆鱗あらせらるゝは實に悲歎千萬なり某事天下分け目の奉公と存し一命を懸け盡力せんと欲す固より天下には替へ難きを以て水老譴愼を免し登營を命せらるれは殿中に於て召捕るか殺すの外は之れ無きものと決心せり然とも後其非を悟り又考ふるに大老免除の事京師より命せらるれは水戸へ內通あるべく何を申出るやも計り難し其時に至らは勅命と申すものゝ謹愼中の身分にて天下の政事に口を出し其身を顧みずとの旨を以て駒込邸なる水戸家來殘らず追出し公義より護衞せしむるの取計ひは如何ぞや彼櫟仙院を鞠問せは水老の命を受け毒殺の邪謀其外密事必ず明白なるへし此賊白狀に及はゝ一番の手掛り復讐の根本なるへし事既に暴露せは水老切腹一橋を水戸又紀州に押込然るへく某着京せは敵は殘らず取調へ一人づゝ取詰其罪顯然たるに於ては押込隱居等の取計も之をあるべく乃九條關白の存意を承り之を爲すへし主上には固より妨げあることなく實に善道に在らせらるれど惡謀の片言のみ聞に達するを以て逆鱗あらせらるゝも已むを得ざるなり乃此書の說く所は全く主膳の詭言を輕信するに因れりと雖も下總守志の決する所は已に前の如く激烈なるを以て行の暴戾に陷るも亦勢の然らしむる所ならん十七日京に入り妙滿寺に館し頗る護衞を嚴にし病と稱して出でず京町奉行小笠原長門守をして

平野國臣
藤森大雅
大閤政通

諸志士追捕せしむ十八日鵜飼吉左衛門同く子幸吉を捕ふるを始とし小林民部權大輔宇喜田一蕙同子松庵池内大學金田伊織等數人を捕へ是より先き梅田源次郎頼三樹八郎等は既に獄に繫られ梁川星巖は先ちて死せしを以て其妻紅蘭を鞠問す成就院忍向西郷吉之助有村俊齋平野二郎等皆逃れ去る江戸に於ては飯泉喜内日下部伊三次藤森恭助等を捕ふ勝野豐作は踪跡を逸せり水戸の士民變を聞き南上し小梅及ひ駒込の水戸邸に集まり又松戸小金二驛等に屯集するもの數千人若し君家變あらは皆死を以て之に當らんとするの勢にして氣焰赫々く江戸を動搖せり掃部頭大に懼れ兵を彥根に召したり十月佛國と條約を結ふ是より先き締盟せし米英等を並せ之を五國條約といふ伏見奉行內藤豐後守鷹司大閤邸に至り說て曰く關東に於て鷹司近衞兩家の九條關白に迫るを憎み遠島に處するの議あり早く

右大臣輔熙
左大臣忠熙

之か謀ことをなすに若かさるなり鷹司大閤及ひ子右大臣大に驚き遽かに引退し近衞左大臣も亦之を聞て內覽を辭せり京師爲めに震動す下總守飛報を幕府に送れり其要に曰く鷹司殿父子は重犯人なり其家臣小林民部金田伊織の鞠問終結を待ち右父子を遠島に處するときは其餘の堂上皆口を噤すへく近衞殿內覽を辭し九條殿復職せば事靜謐に至るへし此度の事は一橋を西城に入るゝ計畫より外夷處置の事を誣言する水戸陰謀の次第叡聞に達し已に事實分明の上は陰謀荷擔の輩を處分し其餘は穩當の措置に出てんことを望まんとす玆に於て聖上軫念あらせられ諸大臣の罪實に遭はんことを憫み震翰を九條關白に下して出てゝ事を視せしむ二十四日下總守始て參內す聖上玉體に恙かあらせたまひ出御なくして只天盃のみを賜はりたり因て九條關白に倚り前後の勅書に對し諸藩建議は別に其策

もなく三家大老の上京し難きハ既に上奏せしが如く續て將軍の薨去あり老中の上京も延引に至り且外國との條約ハ時勢の已むことを得ざる所以を奏問に及び攘夷の事ハ武備整頓に及ぶまでの猶豫を請ひたり二十五日將軍宣下あり是より先き下田互市場の不便なるを以て之を横濱に移せり十一月十一日關白京都所司代酒井若狹守をして勅旨を下總守に傳ふ其要領ハ當春以來變せられしも一日たりとも夷人と國民と貿易する事あらハ伊勢へ捧くる宸筆宣命の意に背くを以て許容せられさるとの意に在り下總守ハ暴徒の妄言浮說を放ち天聽を誣惑し奉る所以を辨し此徒ハ既に獄に繋るを以て訊鞫の上へ狀を具して上陳せんとの旨を述べて退く十二月九日宸翰の勅書を所司代酒井若狹守に傳ふ其要に曰く外患の一條を苦惱せしに今亦内憂相生し實に驚嘆の至りなり此危難の際に紛々の事起り晝夜寢ねず内憂ハ忠憤の心より出づる歟其間にハ陰謀凶邪の徒もありとの事今度是等所置の宜きを得ハ内憂先づ鎭まるへく外患ハ當春以來追々諭せし如く究竟所々開港雜居の姿に及てハ萬一爭端を生せは夷人我邦の情實を窺知り防禦極めて艱難なるへし眼前の安逸を思ひ祖先に對し奉り他日面目なきゝ如きハ深く恐るゝ所なり然とも宇内の形勢も相變り止むを得さるの事ハ則之を知る只畿内近海の事ハ急度考量之れあるへく且下總守指出す所の書中蠻夷を遠ざくへきハ大樹以下老中も同意の趣き猶疑念あるを免れす因て一日も早く眞實に相違くるを以て念願とする所なり下總守又辨說し此の如くにして官武合體國家安穩は期すべき所にあらば故に追々暴徒を捕獲し吟味を遂げ正邪分明に至り上言に及ぶべき旨を奉答して公卿を排かし聖意を動さんと欲し益々逮捕を嚴にす藤井但馬守

等數人を捕ひ前の繫囚と幷せ嚴に之を鞫問せり之か爲めに京師上下大に驚き道路目を以てす三條前内大臣退て淀の民家に閑居せり下總守書を九條關白に出せり其要に曰く某逗留甚永く苦慮に堪へさるを以て叡慮の程兩三日中に發表あらんことを請はんとす曩きの勅旨は謹て拜承し奉ると雖も曾て上陳せしか如く軍艦銃砲武備相整ふを待て外夷を遠くる事大老初め急度力を盡す所あるへし是月晦日下總守を小御所に召して關白傳奏列座勅答を賜ふ其要に曰く蠻夷和親貿易は皇國の瑕瑾神州の汚穢たり實に皇太神宮始め歷代に對し奉り恐れ多き所あり叡旨は春來屢々明示せらるゝ所にして蠻夷は叡慮の如く相遠け鎖國の良法に引戻すへく止むを得さる事情は審に氷解あらせらるゝを以て方今の所之を猶豫せられ神宮幷に近畿は先勅の如くなるへし茲に至り下總守の剛愎なるも亦天意を動かすと能はすして僅に猶豫二字を得たるに過きず怏々として以て年を過ごせり

第四章　志士刑死　櫻田要擊

安政六年正月九日京師の四人小林民部權大輔高橋兵部權大輔藤井但馬守山田勘解由伊丹藏人飯田左馬梅田源次郎賴三樹八郎等の檻輿江戸に到る各分て諸侯の家臣に付して之を禁錮す間部下總守は猶京師に留まり幕府に利あき公卿をして自ら辭職せしめんとし蜚語を搆造して之を劫かす鷹司太閤老病を告け落飾を請ひ近衞左大臣は其官を辭し鷹司右大臣三條前内大臣も各々落飾を請へり茲に於て聖上宸翰を九條關白に賜ふ其要に曰く左右大臣前内府等病を稱して出す辭官落飾を願出つるは何の故そや元來神州の瑕瑾を厭ひ夷族を遠けんとする

忠憤の志より大臣を初め人々辛苦せしものにて大樹に對し異心を挾めるにあらず旣に關東と合體の上ハ關東の役々疑を解き國內平穩を期し大臣も速に出仕せしむへし九條關白之を奉行せさるを以て所司代に諭さる其要に曰く當官落飾願出て主上思召にてハ亞夷一條昨春堀田備中守上京の時外夷と戰ふの難きを陳ず是れ將軍の本職にあらず川路左衞門尉承久の例を說き無道の振舞あり下總守上京先役處置を誤り現時大老々中は正道を乘れる旨分明なること關白へ下命あらせられたり之ニ依り下總守ハ答奏を上りて曰く大閤左右大臣前內大臣辭官落飾を請ふに至るハ右の家臣等諸藩浮浪の徒の妄說に惑ひ邪正を分たず今已に隱謀惡計を悟るか爲めに先非を悔ひ辭官落飾を願出てられたるは殊勝の事なるを以て願意を許可せられんことを要す聖上猶未た之を許容せられず然とも大閤以下安んずること能ハず遂に落飾に及ひたり

板倉勝靜
佐々木顯發

大老井伊掃部頭ハ大小目付、寺社、勘定、町奉行をして京囚を鞫問し東西の關係を推究して水戶前中納言の罪を摘擧せしめんとす寺社奉行板倉周防守勘定奉行佐々木信濃守ハ其事を以て不可となし評定所留役組頭木村敬藏其非を論辯する所あり其要ハ京囚より沒收する所の書類を按ずるに其言ふ所皆賢明の將軍を立て外夷の驕傲を制するにあり是れ國の爲めにし私の爲めにするにあらず故に罪の問ふべきものなし但公武の間盟約あり士庶叨りに公卿と政事を議するを禁ずれども是亦朝廷の許す所にして其責め自ら歸する所あり故に京囚を鞫問するハ害ありて益なし乃ち其罪を問ハさるを以て愈れりとなす且水戶家臣を逮繫して其君の罪を證せしむるハ德川家の典刑に背き臣たるもの輙く其君の罪を言ふべきものにハあらさるなり板

石谷穆淸
播磨守賴方
伯耆守宋秀
尊融親王

倉佐々木兩奉行ハ此議に從ハんとし町奉行石谷因幡守ハ殿に糺治せんことを主張そ井伊掃部頭ハ因幡守の言を用ひ板倉周防守佐々木信濃守及び木村敬藏を退け町奉行池田播摩守に勘定奉行を兼ねしめ寺社奉行松平伯耆守をして周防守に代らしめ又下總守ハ九條關白に謀り靑蓮院宮を謹愼せしめられたり又更に水戶に下せる所の勅諚を收還せられんことを關白に謀り關白ハ傳奏の書を以て所司代に下そ或ハ云ふ是れ上奏を經へそして之を爲せりと二月二十日下總守京師を發して東に歸る三月十日京師の四人山科出雲守森寺因幡守等又到る是より先き志士を捕ること頗る嚴に勝野豐作ハ跡蹤を逃そるを以て其妻よし子森之助保三郎女ゆうを捕へ又水戶家臣太宰淸右衛門も亦逃るゝが爲めに其妾せい及び同居雷介親族奥州伊達郡金原田村八郎をも幷せ捕へ浪士山本貞一郎病死せしが故に其妻

橋本綱紀
吉田矩方
茅根　泰

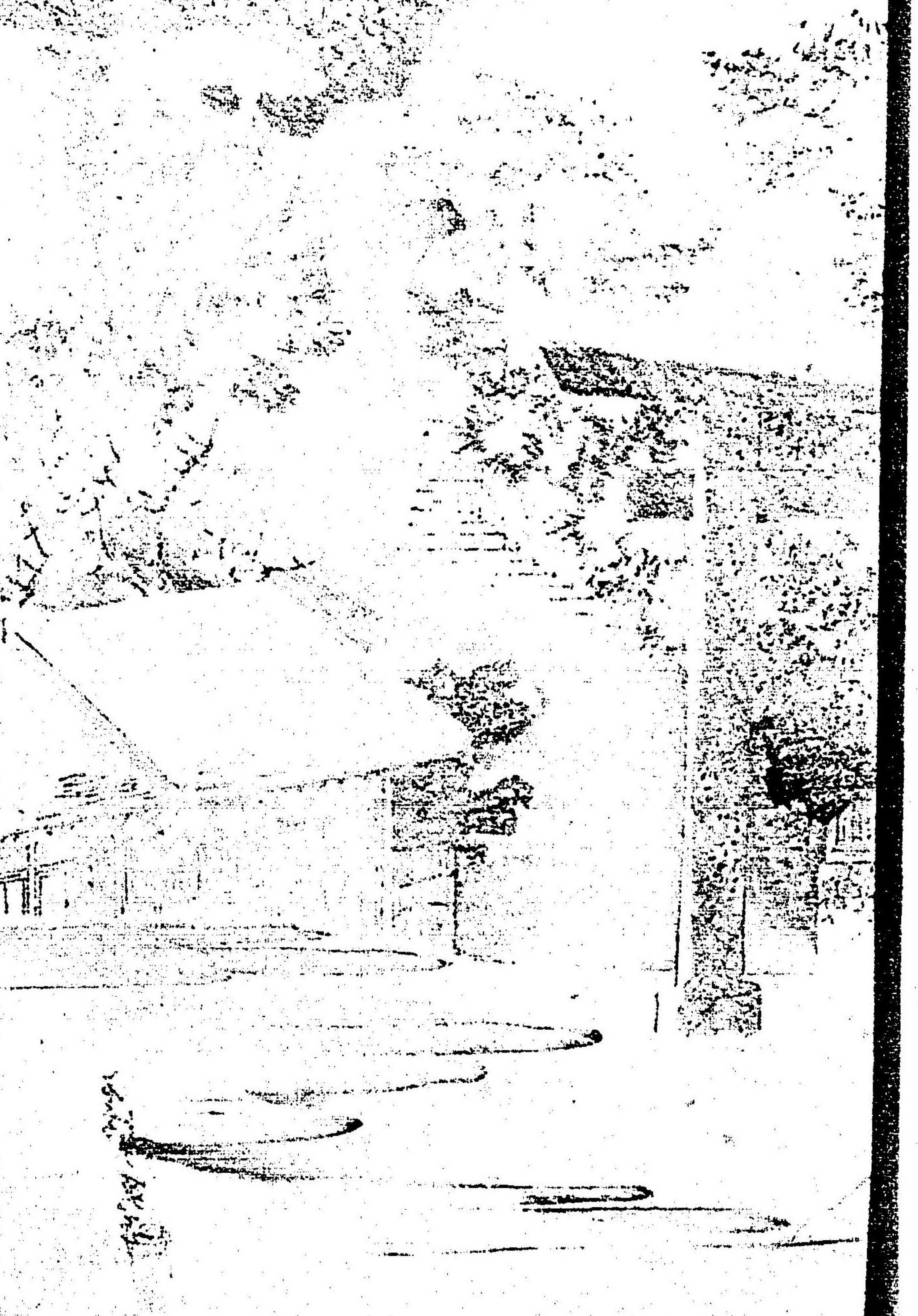
とよを捕ひ各獄に下その類最も酷烈の處置に出て志士を擧けて一網に打盡さんとそるにあり幕府小性組酒井隱岐守臣曾我權右衛門の家來飯泉喜內といふもの曾て上京して三條家等へ出入し後幕府の達文或ハ風聞等を書し屢〻京師に通報せしを以て幕府の嫌疑を受け此獄の起る首として喜內を捕ふ故に時人此事件を評して珍書の獄又ハ喜內の獄といへり橋本左內吉田寅次郎安島帶刀茅根伊豫之介鮎澤伊太夫等も亦捕れれに就け世に之を安政大獄といふ

八月二十七日水戶前中納言以下の罪を斷し前中納言にハ嚴に建白せし所採用あきゝ爲め家臣を京師に遣ハし上陳そる所あり且幕府繼嗣の事に就き下賤の者公卿の間に奔走して人心を惑亂し遂に勅諚を請ひ公武確執國家の大事を釀そに至り假令へ家臣の者內心を察し私に周旋せしに因ると雖も平素愼まさ

るの致す所ありとの罪案を下し水戸に永蟄居せしめ又中納言には父前中納言の行事を察し家臣を嚴整せず幕府に對し面目を失せりとし指扣を命し一橋刑部卿も亦隱居愼とあり水戸家老安島帶刀は繼嗣の事勅諚の事を以て切腹を命せられ水戸家臣茅根伊豫之介同鵜飼吉左衛門を死罪に同鵜飼幸吉を梟首に鷹司家臣小林民部權大輔水戸家臣鮎澤伊太夫を遠島に儒醫池内大學を追放に近衛家老女村岡を押込に處せ松平修理大夫臣日下部伊三次及ひ梅田源次郎西園寺家臣藤井但馬守成就院信海は既に病死し十月七日松平越前守家臣橋本左内儒者賴三樹八郎飯泉喜内を死刑に大覺寺六物空萬金原田村八郎を遠島に其後日下部祐之進勝野森之助も遠島とあり鷹司家臣高橋兵部權大輔同三國大學御藏小舍人安藝守男山科出雲守有栖川家臣飯田左馬三條家臣丹羽豐後守同森寺因幡守同森寺若狹守同富田伊織青蓮院宮家臣伊丹藏人同山田勘解由一條家臣入江雅樂頭若松木工頭久我家臣春日讃岐守水戸家臣大竹儀兵衛松平讃岐守家臣長谷川宗右衛門同速水伊達遠江守家臣吉見長左衛門下田奉行手附出役大沼又三郎岡部土佐守家來筧承三古賀謹一郎家來藤森恭助曾我權左衛門家來飯泉春堂勝野豐作妻子山本貞一郎妻子儒醫宇喜田一蕙同松菴利益院行阿黑澤とき蒲市正岩本彥助大名主茂右衛門佐七源助伊十郎源左衛門太宰清右衛門妾其他或は押込或は追放或は放免各々差等あり又水戸家臣山國喜八郎海保帆平荻信之介菊池爲三郎加藤木賞三松平修理大夫家臣大山正阿松平土佐守家臣小南五郎衛門酒井雅樂頭家臣菅野狷介土屋采女正家臣大久保要人間部下總守家臣大鄕卷藏松平豐前守家臣奥平小太郎儒者横山湖山等に謹愼を命し毛利大膳大夫家臣吉田寅次郎は梅田源次郎の連累として之を捕

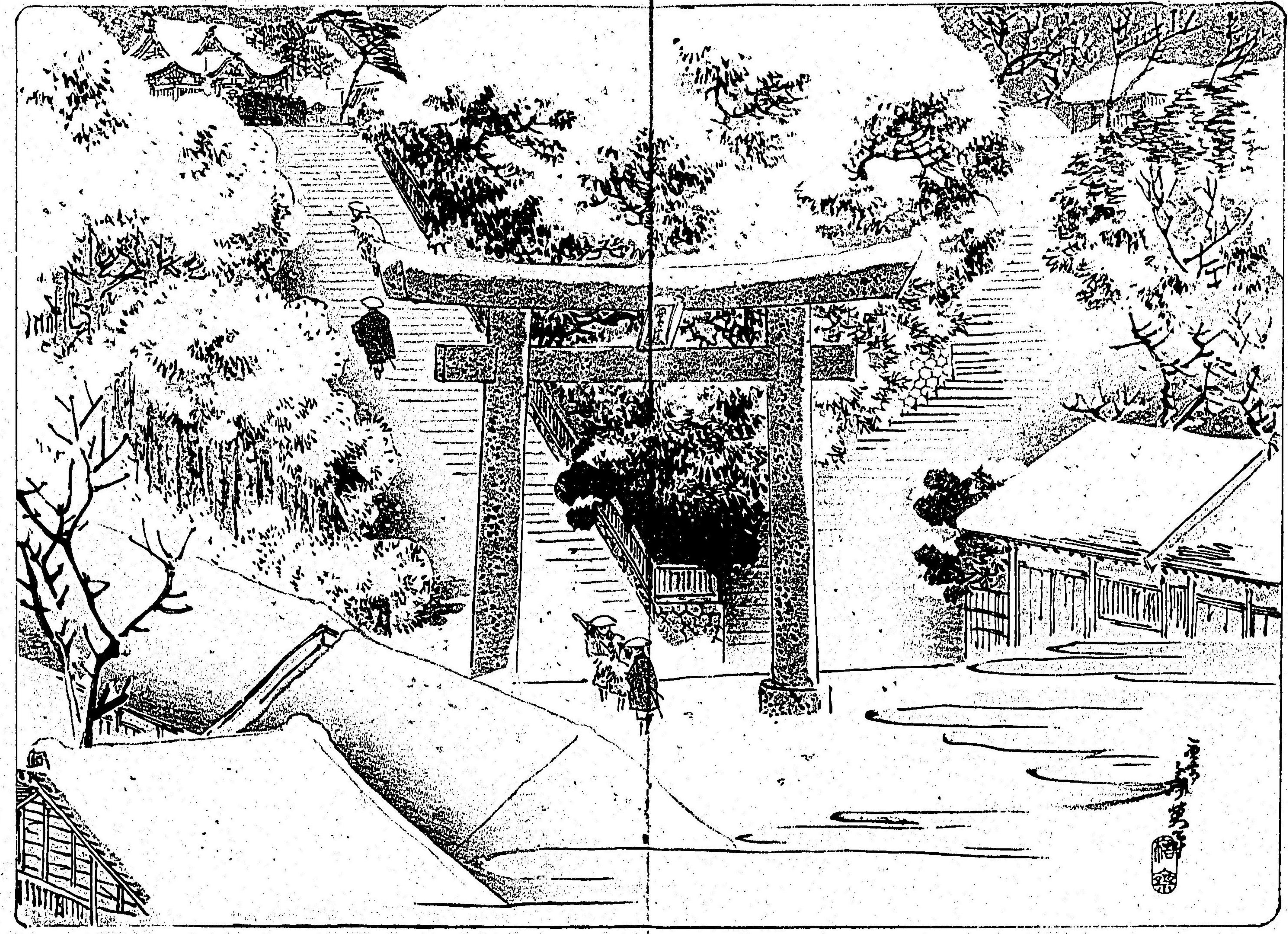
へしに吏に對するに及ひ間部下總守を刺さんとするを自白せしか爲めに是又死刑に處す此獄遂に十月の末に亘れり是より先き作事奉行岩瀨肥後守軍艦奉行永井玄蕃頭職祿を奪ひ謹愼西丸留守居川路左衞門尉隱居愼老中太田備後守に謹愼小普請奉行淺野備前守西丸留守居大久保伊勢守ハ共に隱居愼を命せらる是れ水戸に黨すといふを以てなり九月の初め前中納言江戸を發し水戸に下れり既にして水戸中納言の指扣を解き若年寄安藤對馬守をして水戸の事を管せしむ始め幕府水戸に命して勅諚を返納せしめんとするに水戸の士民議論沸騰し或ハ返納を可とし又之を非とし互に意見を主張して藩中寧日なし十二月に至り幕府復之を促がす中納言直に京師に納めんことを請ふ對馬守聽かずして幕府に致さしめんとす茲に於て水戸の士民益〻激昂し城南長岡驛に屯するもの數十人江戸往來の有司を拒留せんとす是を勅諚を以て幕府に出さんことを慮るなり前中納言之を憂ひ親書を家老郡宰に下して鎭撫せしむ因て金子孫二郎高橋多一郎を以て其首魁となし十二日二人を罪し兵を出して屯集の徒を退けんとす其徒來て二人を奪ハんことを謀り水戸街端に於て出兵に會し共に鬪ひ互に死傷あり此夜金子高橋及ひ關鐵之介等出奔し其他逃れ去るもの亦多し前中納言布衣以上の士及ひ文武師範等を召して勅諚返納の止むへからさるを諭し之を江戸に致さんとす士民猶呶々として其非を鳴らして止まず幕府水戸の喧擾するを聞き遂に其督促を緩め長岡の徒も亦散せり夫れ此徒の散せしハ別に爲さんとする所あるを以てなり是より高橋多一郎ハ京師に赴き金子孫次郎等ハ江戸に入る

萬延元年正月以來佐野竹之介等江戸に集まり上巳の日を以て

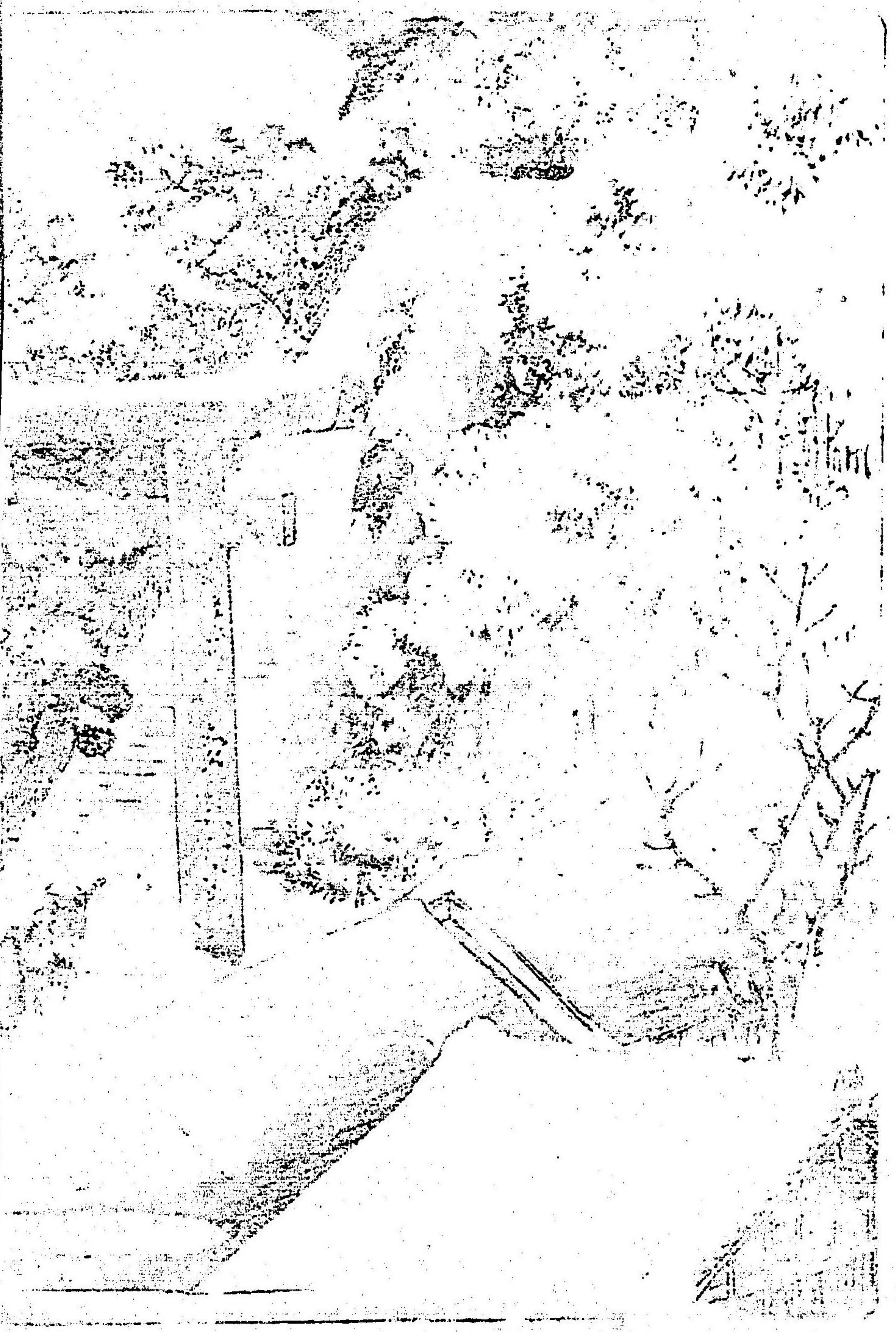


大老井伊掃部頭を要撃することを謀れり蓋し此謀ハ俄かに發せるにあらず既に二年前より計畫せる所あり吉田寅次郎の間部下總守を刺さんことを謀れるものも金子高橋等の掃部頭を刺し而して東西相應し兵を擧け幕府當路の有司を一掃せんとせるの謀あるを聞き關東ハ人の爲めに先きんせらる吾別に爲すことありとて京師に出んとして獄に囚れたるを以ても之を知るに足れり勅諚の督促切迫あるより宿謀激發して其氣焰を長進せしものあらん佐野竹之介等他日禍を君家に貽さんことを恐れ三月二日小石川水戸邸ある目安箱に書を投して暇を乞ふ其文に曰く

私儀代々御厚恩を蒙り罷在候身分にて奉願候儀ハ恐入候得共此度天下國家の爲存詰候大願有レ之出府仕候間何卒御暇被レ下度奉二願上一候此段相濟候樣宜敷被二仰立一可レ被レ下候以上



此夜金子孫次郎等皆品川の端鮫津なる川崎樓に會し明晨掃部頭の登營を途に要撃すべきの部署を定め之を待つ然るに時ならさるに天雪を飛はし滿府皆白沙の底に埋まり曉に至り紛々として止まず三日朝十八士約の如く城西愛宕山上に會し期を刻して櫻田門外に至り掃部頭の駕を要撃す掃部頭豫め戒心する所あり平常よりは扈從の士を増し不虞に備へ此日も亦從士連々し護衛し且其邸を距ること僅かに一二町の間に在り邸中より應援の便なきにあらされとも事急劇に起り且大雪綿を拋つか如くにして十歩の外を見るへからず扈從の士は刀に柄袋を裝し身に雨衣を纏ひ進退便を失ふと多く十八士は輕裝健闘大に從士を惱まし遂に掃部頭を駕中に刺し引出して其首を斷ち凱歌を放つて散し去る井伊邸變を聞き諸士馳せて其場に至るも已に及はず主人の屍を輿して邸に歸る（其闘毆の状は各々諸士の本傳に詳なり）此



五ツ過ぎなり

時諸侯上巳を賀せんが爲めに皆登營せしを以て城外殊に雜遝を極め其風說忽ち府內に傳はり人心爲めに洶々たり十八士中稻田重藏は鬪死し廣岡子之次郎は辰の口にて自殺し山口辰之介鯉淵要人は八代洲河岸に至て自殺し有村治左衛門は一首級を提げ遠藤但馬守辻番所傍らに自殺す佐野竹之介蓮田市五郎黑澤忠三郎齋藤監物は脇坂邸に自訴し大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之介は細川邸に自訴し岡部三十郎關鐵之介廣木松之介增子金八海後嵯崎之介は蹤跡を逸せり掃部頭從士は鬪死四人負傷十七人あり（其姓名は井伊家の屆書に詳かなり）

左の手簡は當時の通信に係り其狀を知るに足るを以て之を揭く

　或人より長州藩士福羽文三郎に贈る手簡摘要

節句の日四つの御大皷にて例の通御大老井伊掃部頭殿御登城門より御出外櫻田御門の外松平市正殿御門前御通行廣き所に被㆑成㆓御懸㆒候時俄に曲者起り立兩方より多人數御駕籠を取卷御供方種々相働候得共不意を打たれ候に付終に掃部頭殿を及㆓殺害㆒御首を取太刀の切先に差立退御供方即死三四人怪我人數不㆑知

小商の目擊

其日は折惡く時節不似合の天氣にて夜の內より霰雪其頃降り最中地上一二寸も積り候位の事井伊家の方は御供方合羽の上桐油柄袋と不都合に有㆑之四方も難㆓見分㆒大みそれ曲者方に取候ては十分理方の天氣に御座候櫻田門外張番所の脇よし簀圍にて濁酒おでん餅など賣候もの例の通出居其朝侍体のもの凡二十八人計も集り濁酒おでんなど給へ候由雪降中右のもの共武鑑なとくり候由心懸よき侍と存居何の氣附も無㆑之處井伊家御門明きの頃右のもの六七人御堀の側へわかれ又六七人は市正樣御長屋の側えわかれ殘り六七人相扣一か

たまりに相成居候處間も無レ之御行列參り御駕籠の處に至りし時右の内より一人駕籠訴の体にて封箱樣のもの御駕籠脇に差出し御駕籠脇手を出さんとする所に打懸り兩側より六七人つゝ御駕籠に取懸候由井伊家の侍大双相働候得共不意の處不レ任心六尺ハ逃け兎角の内切害御たぶさを取御首を討落し候由大音聲を揚け何か名乘候得共聢と不レ聞左候て御首を刀へ差上日比谷の方をさして立去候由

當時西丸御住居に付西下も込候故多分櫻田外御供待に相成既に勇之助樣御徒士以下右の所上杉の方へ寄相扣居候處御首を刀へ差立退候を眼前に見受申候

御行列ハ一圓亂れ散り取返の侍又ハ赤合羽なとまじり御亡骸表御門より御駕籠のまゝ舁込候由

遠方なからも表御門より見通の場所に付井伊家御玄關より上下のまゝ又ハ羽織のまゝ跣足にて五六十人も馳付候得共最早一件の間に逢不レ申由誠に一瞬の間に片付候由死骸怪我人早々取入候由

右の七八人日比谷を通り候内四人大細川の御門に驅入候由一人ハ辰の口にて自殺二人ハ八代洲河岸に差違是等私親類北條米太郎見受候事なり右の通にて七八人丈けハ行方不二相知一由

林鍬三郎噺明石樣御下供市正樣御長屋下に相待居候與先にて一件有レ之見受候由前の濁酒屋の噺とどんと符合致し候

井伊侯朔日ハ御出勤二日ハ御不快にて御出仕無レ之、三日御出勤にて前日御引にて三日御出勤を聞糺し候處餘程手筈を合せ候ものと存候共後の御沙汰書に掃部頭今日も登城無レ之と計り書申候

廣岡自殺

天下の御政事を御取扱の御方御首を打候あと未聞の次第亂の端を萌し申候何分箇樣の事湧出ねハ宜敷かと心中にハ兼て危ふみ居候處果して箇樣の事出來候三月六日

姫路八稲若新藏手簡摘要（前文に異ふる條を畧く）

窓より娘降雪を詠め且龍の口供待の馬など小兒に爲見罷在候處白布の鉢巻同布のたすき掛連立來一人の男直に兩肌ぬき帯もくつろげ腹おし出し長脇指引拔き腹へ當てちと相考ひ候樣子有之大石に腰かけ喉へ突立候處後一尺四五寸もぬけ通り猶又さし直し二刀さし候處血ゑほ前へはしりてそろりと後へ倒れ手足少しく動き候まゝで相果候いさぎよき死ふり何れも感心致候

此騒動ハ彦根樣御登城先を待かけ十八人蓑桐油着合羽着駕籠訴の体にて左右より罷出平伏致し相圖宜候處にて蓑合羽

有村服裝

ぬきそてゝ何をも白鉢巻白たそきにて切てかゝり半分ハ御駕籠脇へ切合半分ハ御駕籠へ取り云々

龍の口にて首提參候人ハ劒術稽古に用ひ候竹胴懸け手へ手甲かけ伊賀袴紺足袋切草鞋にて自害相果候一人ハ素肌馬乘袴紺足袋麻裏紐にて甲へいはへ付居申候右首持參の男遠藤樣辻番へ上り云々右首の儀夕方彦根より五十人計にて首もらひとして參候由に候得共遠藤樣にてハ御居けに相成居候間相渡不申候由此首大主樣首とも申又ハ供頭の首とも申候

鬪爭の狀

或人の手簡摘要（同上）

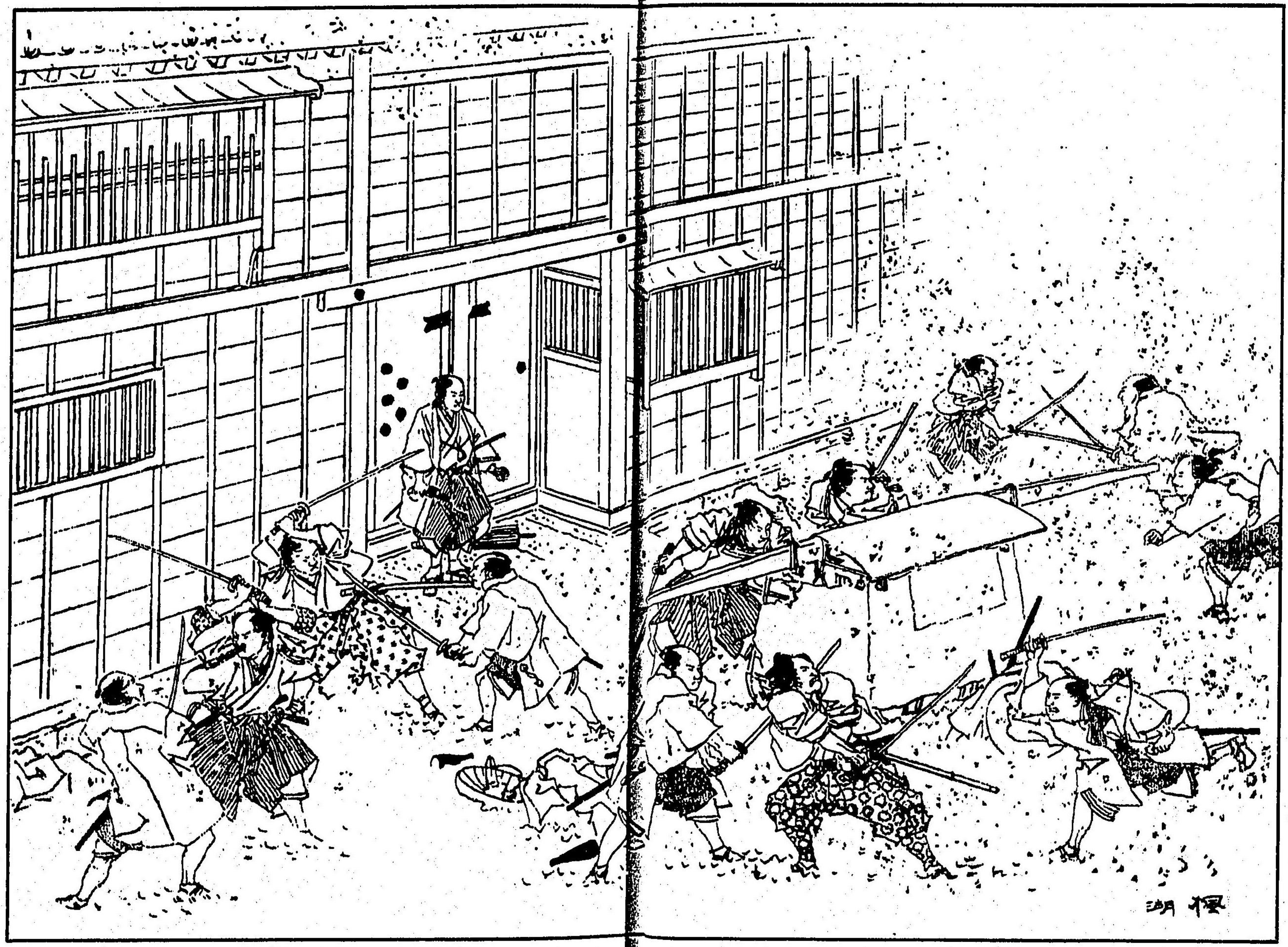
其節綿の如き雪ふり盛一寸先も見へ分兼候折柄先箱の徒士の間を通切候もの有之候に付引戻候得共手強にて喧嘩に相成候間駕籠脇の侍ハ爲取鎮追々繰出し空虚に相成候頃を量り空筒響き候を合圖に駕籠左右より拔連切掛る處供方は駕

籠を捨て前後に逃散候に付駕籠より轉び出て候を直に首打落し一同勝閧を揚け云々駕籠脇侍二十八も附添ながら主人の首まで渡候とは不覺至極云々

江戸より越後長岡某への手簡摘要　同上

八重櫻の如き大房雪ほと〳〵と降ゐるも外櫻田御門前の事にて朝五つ時頃諸大名登城見物或ハ供待にて隨分混雜の中に云々合羽不着年頃二十歳位水戸方にても同年位白き鉢巻致居大雪ほと〳〵降最中切合兩人共修練と相見え勝負の色可付とも不見内水戸方にて年頃五十歳位の男大音聲に慥に打留たり何をも早々引取候へと三度申候由夫を相圖に一同ばら〳〵逃去り飯田松左衛門（長岡家中）直に驅付見物致候處井伊樣方死骸五人の中一人ハ未たびく〳〵致居餘ハ血の氣もなく外に旅人体の死骸水戸方にても可有之哉と疑がハれ候處井

其図は松本楓湖画史が開国始末の挿画を作る時に写せる所の一なり然るに同書編者は斥けて取らず因て東陽堂主人の珍蔵となる今同主人に請ふて之を掲し



稲田重藏

實況目擊

角太郎談話
脇坂邸の狀

伊樣より大勢罷出死骸釣臺に載其外腕四本頭かけあと拾取り持歸り旅人体計り殘し置候處無程井伊樣にて片付候まて飯田氏見物致候趣相噺申候日比谷御門外にて兩人自殺致其中首一つ持參候由右ハ井伊樣の御小姓の首と申觸し候得共飯田見受候節首あき死骸一人も無之よしいぶかしき者に御座候由

脇坂樣より屆出候四人ハ當月番内藤紀伊守樣江御屆可出心得の處此騷動にて三御門締り往來不相成依て同所橋の上にて帶あと結直し夫より脇阪樣江驅付御屆申上候儀有之旨御取次に面會致度と御門江申入候處何れも恐れ候哉出會者無之然る所下坐見角太郎と申者小氣味わるくも罷出一と通私江被仰聞度と尋候處其方江申聞るに不及御取次に面會致度との事に付申入候處御取次彼是餘程手間取候處銘々催促に

井伊家小性

て漸く御白洲に相通候其中佐野竹之介一人抜身刀持居候間納候て御通り可被成旨申聞候處決して亂妨等は不致申何分戰の節鞘失ひ候旨申此人餘程深手にて漸歩行致候様子に付直に通し候處御取次二間計離れ何をも中の口に御廻り可被成と申候處御訴事御中の口へ廻候筈無之と申入候得共面体其外所々疵より血流れ候故玄關にては取次致かたく足洗湯可差出候間中の口に御通り可相成と申候處無據相廻候節迄餘程手間取候處佐野竹之介深手にて弱り歩行不叶離そ肩へかけ被下度と申候處右御門番の役だの中の口の役だのと申合又無據三人の者肩にかけ中の口に相廻候由長八罷出相咄申候

上杉様辻番脇にて大戰致候井伊様御小性は黒田様御屋舗より發子に參り候者にて當年二十二歳人撰の者の由肩先より切込れ候得共淺手にて命に拘り申間敷と申候

辰の口脇にて首一つ持ち自害致候は有村治左衞門の由其廻り井伊様にて同勢四十人計にて取圍餘程時刻移り又々十人位も相越漸く首取戻漸引上候

細川邸の状

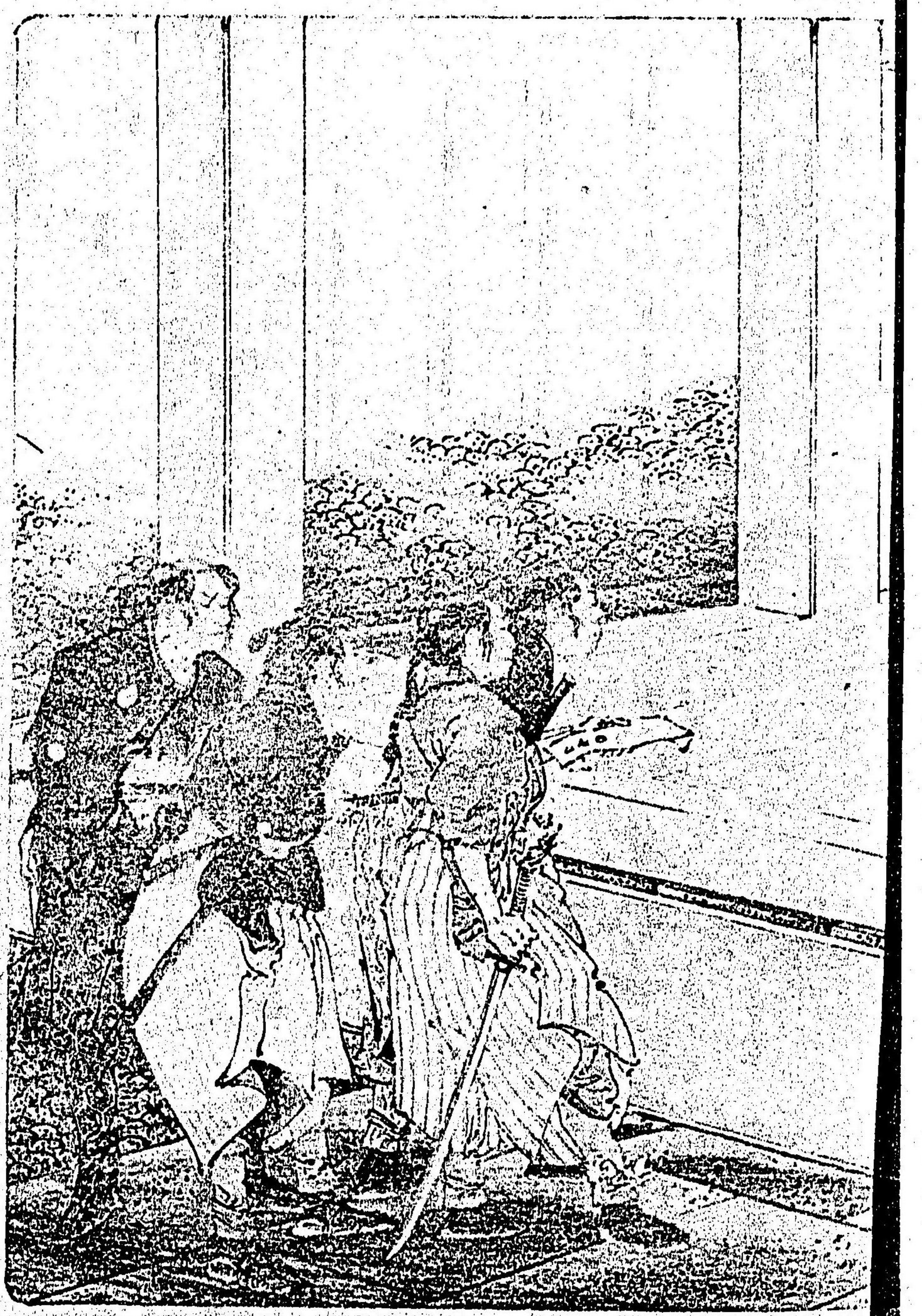
細川侯に參り空腹故御湯漬御無心申候と願ひ可相成候はゝ御酒一盃戴き申度といふより各様は疵所有之御養生の爲め如何可有之哉と其時申候得ば今朝は討死と覺悟の處本意を達し候上は養生所には無之死は本望ありといふ故望に任せ御酒被下候處大に悦ひ申けるは甚以恐入候得共小盃にて謡を御免蒙り度と申し一番うたひ候由に御座候勇壯の人々と驚き入申候

畑彌平目撃の状

　水戸家押役畑彌平三月四日夜水戸に着し其口上書

去る十二月十九日御内勅全く叡慮に御座候哉疑敷く眞僞奉

伺度且當今關東の事情等奉入御叡聞度私共も正月四日御城下出立にて上京仕罷在候處薩州藩より漸々承候儀も有之當二月十七日京出立にて同二十七日江戸表に着薩州有村雄介宅に立寄京都同藩德田嘉兵衞より傳言申述候故此度御國表の御樣子奉伺可罷下と存居候處神田佐久間町邊木村所右衞門初齋藤監物等四人に逢候處金子孫二郎殿薩州屋敷に潜居候由承候間京師御事情可相咄と存一昨二日同所有村雄介方へ罷越候處金子殿より被申付候儀彌同志の者中に潜居切迫に付明三日彥根殿を可討間其場所に罷出呉と見居品川驛津川崎屋まて注進可致我等ハ有村一同上京天朝警衞向に取懸候旨急度被申付候間昨三日早朝より櫻田御門外邊に徘徊致候處追々別紙申上候人數集候て待受候處五つ三分頃と覺敷時分彥根殿御門出霞ケ關の南より少し西の方にて切込彥根殿駕籠より出掛出やらに打重り慥に御首討取候間近習侍十四五人も切死下部ハ不殘散亂敵一人もなくなり候て合圖の聲を揚け血刀引提長屋門前日比谷御門を指て引取申候尤引取の人數七八人計慥に見受候跡ハ討死仕候哉逃去候哉引取候哉見失申候夫より私儀ハ品川に罷越金子孫二郎殿有村直に面會仕候處彥根より打手無覺束且御邸中の儀心に懸候間是より御屋敷に引移御國許に注進可申旨被申付且彥根より同日人數手分け五十人程つゝ白の股引脚半にて徘徊致候儀に有之何分無覺束樣を外藩より承候昨午刻小石川出立新宿に罷越承候得ハ御役所より藤屋に御出役の由承候處久米孝三郎殿御同役下役同役治部介御屋敷より罷越候にて私共御用狀御渡に相成候私共品川より歸かけ櫻田外場所見分仕候處奇麗に取片付置申候夫より日比谷御門を通り和田倉外へ



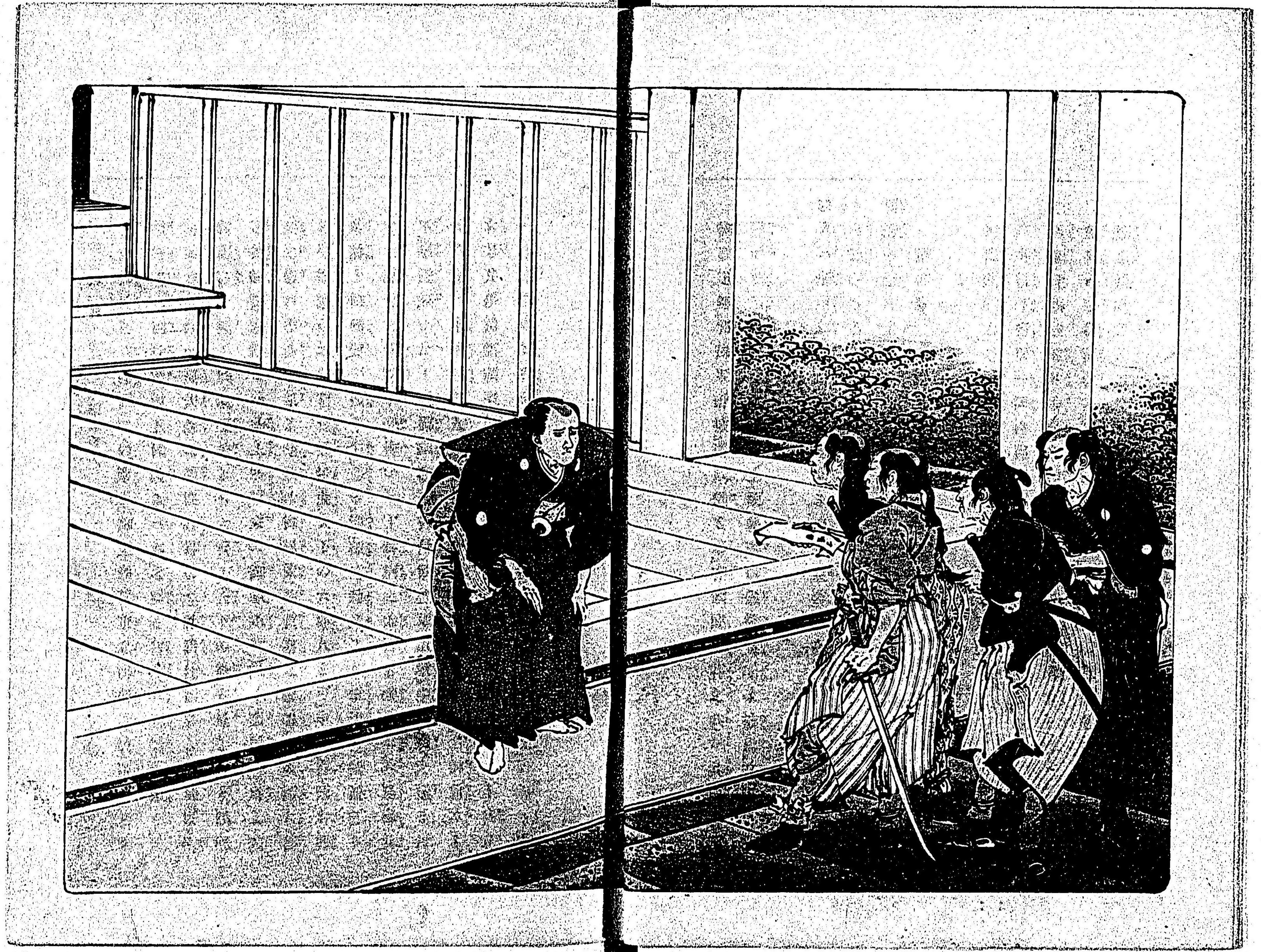
罷出候處二人の死骸拭を懸番人付居申候又辰ノ口三人同斷多分ハ手負割腹と被存候心當の處御坐候間相見不レ申候多分討死仕候哉何分委敷儀相分不レ申覺の分荒増申上候森井信了書面一同南部野島左三郎殿に御廻し夫より梶様野村様關様右の趣御同志様方に宜敷奉願上候

第五章　諸士進退　事變文書

要撃の十八士は各〻其場を去り前章に記せし如く自殺するあり自訴するあり佐野竹之介蓮田市五郎黒澤忠三郎齋藤監物の四人ハ老中脇坂中務大輔邸に至り左の書を出したり

自訴書

謹て脇坂侯執事に奉二言上一候執事御儀御賢明に被レ爲レ在天下之御政道無レ邪御取計被レ遊候儀と奉レ存候間草莽之我々共申上候



ハ恐入候得共存詰候儀無二伏蔵一別紙ニ相認奉レ入二尊覧一候追ゝ御大老井伊掃部頭殿所業を洞察仕候處權威を恣ニいたし我意に不レ叶ハ忠誠厚き人々をも御親藩を始公卿衆大名御旗本ニ不レ限二讒誣いたし退隱幽閉被二仰付一候樣取計就レ中外虜之儀ニ付てハ虚喝之猛勢ニ恐怖いたし神州之大害を釀し不二容易一事共差許し御國體を穢し乍レ恐奉レ惱二叡慮一勅意ニも奉二違背一候而已ならず御讓位之儀を企候奸曲天下の大罪人と可レ申奉レ存候。右罪狀之儀ハ委曲別紙ニ認候故御懇覽御賢察之程奉レ願候扨右等之奸賊御座候てハ此上將軍家の御政道を亂し夷狄の爲ニ被レ制禍害を成し候儀眼前ニ有レ之實ニ天下の御安危ニ拘り候儀と奉レ存候故此度天誅ニ替候心得ニて誅戮仕候事ニ御坐候毛頭公邊へ御敵對申上候儀ニハ無レ之全く我々共忠憤之餘り天下之御爲を存詰候ての事ニ御座候嚴刑之御所置被レ遊候とも

御恨不申上候依ては元主家譴責を蒙候様之儀無之様奉願候將又此上は天下の御政事正道に御復し忠邪御辨別被遊殊更夷狄之御扱に至候ては祖宗之御明訓御斟酌被為在華夷内外之辨得と御勘考被遊御國威を損丨不申様御判斷之程奉渇望候此段罪不顧万死奉言上候恐惶頓首

懷中書（此書は十八士各之を懷にす）

墨夷浦賀に入港以來征夷府の御處置假令時勢の變革も有之隨て御制度之變革もなくて叶はぬ事情有之とは乍申有司専ら右を口實として一時偸安畏戰の情より彼か虚喝の勢焔に恐怖丨貿易和親登城拜禮をも差免丨條約を取替丨踏繪を廢丨邪教寺を建ミニストルを永住為致候事實に神州古來の武威を穢丨國體を辱丨め祖宗の明訓孫謀に戻り候而已ならず第一勅許も無之儀を差免候段天朝をも奉蔑如候儀に有之實

に不相濟事に候追々大老井伊掃部頭殿所業致洞察候處將軍御幼少の御砌に乘し自己の權威を振はんか爲公論正議を忌憚り候て天朝公邊の御爲筋を深く存入候御方々御親藩を始め公卿衆大名御旗本に不限讒誣致し或は退隱或は禁錮等被仰付候様取計候儀夷狄跋扈不容易砌と申内憂外患逐日差迫る時勢に付恐多くも被惱宸襟御國內治平公武御合体彌長久の基を被為建外夷の侮を不受様被遊度の叡慮に被為在公邊の御為勅書御下し被遊候歟に奉伺候處違背仕尚又諸大夫始有志の人々を召捕無實を羅織し嚴重に所置被致甚敷に至り候ては三公御落飾御愼粟田口親王をも奉幽閉候のみならす勿體なくも天子御讓位の事迄奉釀件々奸曲無所不至矣豈天下の巨賊にあらすや右罪狀の儀は委細別紙に認候通斯る暴横の奸賊其儘差置候ては益公邊の御政體を亂り夷狄の大害

を來し候儀眼前にて天下の安危存亡に拘り候事共痛憤難レ默止、京師へも及ニ奏聞一今般天誅を加へ候心得にて令ニ斬戮一候勿論公邊江御敵對申上候儀ハ毛頭無レ之何卒此上ハ聖明の勅意に御基き公邊の御政事正道に御復し尊王攘夷正誼明道天下万民をして富岳の安に處せしめ玉ハん事を希ふのみ聊殉國報恩の微忠を表し伏て天地神人の照覽を奉レ仰也

別紙

皇國千萬世天津日嗣連綿照臨し給ひて伊勢の神宮も上古に替らせ給はす神道を尊ひ勇武を尙ひ給ふ事自然の遺風餘烈なれは古より遠略を展へ給へ且夷狄の禍有レ之日は精々退攘し給ひし事史に著はして今更稱揚し奉るに不レ及武將の世になりても弘安の蒙古を鏖にし文祿の朝鮮を征する事共神州の武威を海外に輝し候儀人口に膾炙する所なれハ是亦贅言を不レ待東照宮に至り給ひては尊王攘夷の御志深く被レ爲レ在候は不レ及ニ申上一勃興の御盛時なれは其初蠻夷來航通商等をも許し置れ給ひしかとも諸蠻夷も畏服し覬覦の念を達する事あたはず然る所東照宮終に其深念あるヿを洞見し給ひて洋教の禁を嚴にし給ふ大猷公に至り益邪教を驅斥斬戮して三眼の明を四海に輝し給ふ事誠に千古の英見卓識よて後嗣の遵奉し給べき所なり扨近時に至り候ては夷狄に狡計黠略の者多く出て万國へ通信貿易し遂に小を併せ弱を制し次第に境域廣大に相成り候勢に乘し屢神州をも覬覦するに至る去ながら打拂の令有レ之時は格別の事は仕出す事も成得すして打過ぬ天保十三年打拂の令を停め仁恤せられしより頻に來航し跋扈の態を顯すに至る就レ中嘉永癸丑墨夷浦賀へ入港威暴を示し難題を申掛候以來征夷府之御處置

方古今時勢之變革も有之一概に御國威を御振張難被遊儀は治世の風習左も可有之事に候得共申までも無之夷狄貪惏元より饜足事なく殊に狡謀詭計を挾み覬覦の念を逞く致し候故詰り耶蘇の術中に陷り神州の泰否にも拘り候重大の事に候處華夷の辨和戰の議始終着眼の大基本御廟議御一定の上諸御制度御變革無之ては於時勢不相叶筈に候へ共近來諸蠻御扱振推察仕候ては憚なから一定の御廟算如何可有之や去る卯年までは追々内備嚴整の御達も有之邊海の御守衞被仰付候大名に至り候ては多年防禦の爲に國力を費し忠勤を勵まし候處不測も去る辰年和親交易御取結之上恐多くも征夷將軍の御居城へ夷賊共登城被仰付剩へ御饗應尊敬を盡され候有樣春秋城下の盟を取るの比較に非ず神州未曾有の御失體にて實に冠履倒置の御處置と可申驚歎之至りに候縱令御國政の儀は關東に御任に相成居迄斯る重大の事件第一勅許も不被爲在候儀を全く懸りの有司數輩の了簡を以て五ヶ國本條約差許し將軍家御印章の御書簡迄も差遣され候始末何程偸安の末俗戰爭に可及儀を恐怖致候迚天下後世へ對し大義名分と申も有之征夷の御任如何可有之や辱くも武門の列に連り二百年の恩澤に浴し居候ては不堪悲泣之至況や徳川家譜代恩顧の士東照宮の神靈へ奉對沈默傍觀致候儀廉耻無之と可申決して不相濟事也扨陳るまでも無之天下の聞見する所に候へ共前件夷狄交易の儀如何樣にも勅許申度所存にて去る巳年春堀田備中守上京致し賄賂金錢を以て關白殿下を誑惑致し無勿體も龍眼を可奉暗と陰謀秘計不一方候處今上皇帝聰明絶倫千載不世出の聖主に被爲渡皇國開闢以來尊嚴の國體淳厚の風俗今上の御代に及び夷狄の爲めに消却汚

穢被ㇾ致候ては第一伊勢の神宮御初御代々の御神靈に被ㇾ爲ㇾ對帝王の御任不ㇾ被ㇾ爲ㇾ濟尤も戰を被ㇾ爲ㇾ好候には無ㇾ之國体を不ㇾ失万民安堵に被ㇾ遊度との叡慮よりかしとくも一七日の內供御御絕被ㇾ遊石清水等へ御祈誓被ㇾ爲ㇾ籠關東より如何樣申上候共一切御許容難ㇾ被ㇾ遊万一非常の節は假令万里の波濤を越孤島の中に終り候共御憾不ㇾ被ㇾ爲ㇾ在候得共泉涌寺を御離れ遊され候事難ㇾ爲ㇾ忍と窃に宸襟を御悩し被ㇾ遊候御事に風かに拜承仕候吁嗟海內の人民誰か感激悲泣せさらんや當此時神州の命脈實に累卵より危き事なりしが百官群臣忠憤切迫の餘り八十八人の堂上方禁中へ馳集り万死の力を以て諫奏を奉り其他有志の大小名勤王の至忠を獻せし故三公御初彌感憤被ㇾ遊安政乙卯三港其他近畿及數ヶ所の開港並夷狄永住邪教寺取立等之儀は一圓御許容難ㇾ被ㇾ遊趣は勅命を以て御下知被ㇾ爲ㇾ在猶又內地人心の居合如何に付大小名の赤心も被㆓聞召㆒度尤衆議奏聞の上叡慮難ㇾ被ㇾ決候節は伊勢大神宮へ御神慮可ㇾ奉ㇾ伺との御儀にて三月二十八日議奏傳奏衆より堀田備中守へ御返答被㆓差下㆒俄に下向被仰出㆒候趣の處夷狄へ內條約の儀は既に被㆓差許㆒候事故諸大名の赤心有体に達㆓叡聞㆒候樣にも不㆓相成㆒依ㇾ之表面天下江意見建白の達は有ㇾ之候得共蔭より某々を以て專ら西洋の事態を強大に主張し交易御差許は一時の權宜無御據万一關東の御趣意に違ひ候ては家の爲に不㆓相成㆒と吉凶禍福を以て遊說致し猶又御三家方へは御建議の文言認め直し候樣御內諭有ㇾ之由に候得共水戶前中納言殿には關東輔弼の名將に有ㇾ之尊王攘夷の御論始終一致の御方故御廟算伺書と云一册等當今の急務より將來の大害まで丁寧誠實に建白被ㇾ致尾張中納言殿にも御內諭に不ㇾ泥京師の御趣意

に基き御處置無レ之候ては不二相濟一と被二申立一候由實に難レ有事と謂つべし其後彌勅許の有無に不レ拘關東の御決斷を以て假條約御許に相成候趣に付御三家にては尾張殿水戸殿御三卿にては田安殿一橋殿御家門にては越前殿忠誠無二の御方一同登城に相成將軍御對顏被レ爲レ願候處御所勞にて御逢無レ之依レ之大老井伊掃部頭初御呼出勅命御遵奉無レ之假條約御差許に相成候ては將軍家御違勅の罪御遁れ被レ遊間敷候東照宮以來御代々樣へ御對し被レ遊候ても如何可レ有レ之や各方の了簡承り度旨御一同御演述に相成候處御目前にては掃部頭初畏服いたし候由に候得とも執政の威權を以て不日に條約差許恐多くも將軍家を御不忠御不孝に陷しいれ奉り徳川御家の御稱號を千百歳の後までも奉レ穢候のみならず將軍家御大病人事をも辨へ無レ之御砌に乘じ無實の罪を羅織し御親威の御方々を奉二禁錮一其他正議の侯伯松平土佐守始三人御威光を以て無体に隱居爲レ致候所業惡むにも餘りありと可レ申且又御幼君の御時節を幸として御三家方の權威を摧かん爲御連枝又は家老にて本家主家をも押領せんとの奸曲の功有レ之松平讃岐守水野土佐守竹腰兵部少輔等徒黨に引入れ種々の奸計を運し且つ我意に隨ひ不レ申正議の士を貶斥致し東照宮以來の美意良法追日破壞に及ひ候事長大息の至りに候其後八月に至り叡慣の餘り三家大老の中上京致し候樣重き勅書御下けに罷成候處御請にも差支尾水兩家の儀は不束の儀有レ之愼申付掃部頭儀は御用多にて上京難二相成一且つ先輩堀田備中守等取扱の義今更致方も無レ之依て嚴重申付候旨議奏衆まで申立己か逆罪を逃れ可レ申相巧み間部下總守を上京爲レ致專ら恩威を以て押付候所存にて賄賂を用ひ九條殿下を徒黨に引入れ内藤豐後守へ命

し御所向取締彌嚴敷致し恐れ多くも御讓位をも被レ遊候樣奉レ要候得共三公方御始賢明の御方々奉レ輔佐叡慮レ候に付朝威確乎として御撓み不レ被レ遊依レ之無實の罪を申觸し鷹司殿近衛殿三條殿等御落飾御愼み被レ遊候樣取計ひ其他諸大夫初何一つ罪科無レ之者を召捕關東へ差下し夫々非道の所置いたし專ら虎狼の猛威を以て天下を屏息せしめ畿内の開港並に邪教寺御取建等本條約差許し且青蓮院宮樣御英邁を奉レ忌御失德有レ之樣申觸し御寺務取放し奉レ幽閉レ候所業乍レ恐玉體にも奉レ迫候機顯然にて北條足利の暴横に均しく共に天を戴かさるの國賊と謂ふべし嗚呼此儘に打過なは赫〻たる神州一兩年を不レ出内地の奸民邪教に靡き彼か勢焰を助け皇國の奸賊平身低頭して彼か正朔を奉せん事掌の上に視るか如し苟も人心有レ之者は實に痛哭長大息に不レ堪事ならずや雖レ然東照宮の德澤未た地に墜す御三家御一門には尾張殿水戸殿一橋殿越前殿阿波家因幡家の如き德川家輔佐の良將も有レ之外諸侯にも薩州仙臺福岡佐賀長州土佐宇和島柳川等天下の爲め忠憤の念日夜不レ怠有志の諸侯不レ少候得ハ内は則ち御家門家來奉レ輔佐將軍家專ら内政を修め外は則有名の諸侯一意忠力を盡し武備を整ひなは神州の耻辱を一洗して叡慮を奉レ安候事天地に誓て疑有レ之べからず依レ之當今の事態概略を記して天下の公論折衷を待左袒して天下を興起せんと欲する所也周の衰ふる婦人すら不レ恤緯して周室の亡ふるを憂ひしに況や二千餘年の天恩を戴き三百年來東照宮の恩澤に沐浴する者誰か報效の念なからんや草莽の小臣痛憤切齒の餘り寢食を不レ安日夜遺恨を呑て時勢を憂しか彼か罪惡逐日增長し豈唯德川御家の罪人のみならず實に神州の逆賊也然則天地人同憤の時に乘し天下諸侯の

同志合力して天下の奸賊を誅伐して神罰を蒙らする者也

大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之助の四人は細川越中守邸に至り自訴して一封の書を出し且口演する所左の如し（書面は前の懐中書なり）

口上の覺書

我等共儀國許は二月十八日出立致し一兩人つゝ所々に止宿仕今曉一同打合せ愛宕山に寄合櫻田御門外にて掃部頭殿駕籠左右より仕掛候一旦は多人數立塞り候に付及爭戰御駕籠兩方に四五人かけ付御駕越に差留め引出し御首を討取聲を揚け銘々引取申候右十八人の内四人辰の口御門內に入込案內を乞候旨御取次出合被申候處我等儀は水戸殿家來にて唯今掃部頭殿を討取候間役人方に罷出御屆可申筈の處何れも不案內にて此方樣に罷出公儀より御裁許相待候覺悟に付

越中
村

夫迄の內御養育可被下候委細の儀ハ御重役樣に御目よ掛り御咄可申上との事也則坊主案內致し御小性頭出合松之間に通し留主居吉田平之助罷出應對の上早〻以使者水戸殿に被申込候

即夜創を病て死そ　佐野竹之介

細川肥後守に預　蓮田市五郎

同　黒澤忠三郎

同　齋藤監物

細川家ヽ來宮內平馬より水戸家々來小野孫七郎に通報書

以手紙致啓上候內藤紀伊守樣より昨夕家來の者御呼出其御許樣御家來八人御吟味中御預被仰付旨御達御座候此段被申上候係其元樣迄宜得御意旨越中守被申付候如此よ御座候以上

三月四日

同月五日大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之介黒澤忠三郎蓮田市五郎六人評定所へ召喚あり齋藤監物ハ創を病て出てず五人に向ひ松平伯耆守久貝因幡守池田播磨守山口丹波守駒井山城守其外懸役人列座して訊問あり

訊問及答書

其方共何の遺恨に依て掃部頭殿へ及二亂妨一候哉

（答）東照宮以來の御掟を破りて外夷を親ミ勅命に違ひ御國體を穢却て幼主の台命と僞り誠忠の老公に惡名を蒙らしめ無罪の忠臣を多殺害し其外罪尤多く有レ之候右に付私共朝廷より勅旨御頂戴の御恩を報し違勅の罪を糺し東照宮へ御報恩の爲め掃部頭殿殺害候

其方共掃部頭殿を殺害致候趣申候得共殺害ハ不レ致未た存命にて被レ存候

（答）決て左様にハ無レ之無二相違一致二殺害一候尤諸人見分の通に御座候

殺害不レ致候　（答）殺害致候

其方共何日頃水戸表を出奔候哉

（答）先月中出奔の者も有レ之候得共始終水戸表に往來致候

老公の内命を承て致候事可レ有レ之包隱候事なく可二申出一候

（答）内命ハ決して無レ之私共老公に申上候事ハ不レ宜由にて種々教諭被レ致候に付不レ得レ止此始末に及候勿論私共自身屆候て罷出候程の事に候得ハ何又隱候事ハ無二御座一候

其方共江戸へ參り何方に罷在候哉

（答）吉原品川四谷等の遊女屋にて日を送旅と申ハ無レ之候

何樣の風体にて罷在候哉

（答）多分ハ侍体にハ無レ之大小を風呂敷に包み刀屋体に途中

往來仕候
何方ニて支度致候哉
（答）芝愛宕山ニて勢揃ひ致候
三月三日と申事ハ臨時ニ申合候哉
（答）兼て申合置候
何故三月三日と相定候哉
（答）人數揃兼候事有之三月三日まて猶豫致候

同月八日池田播磨守南町奉行味吟御尋其方共何をも浪人の身分ニて候半如何の存寄を以て重き御役人に對し右体の狼籍相働き候哉不屆至極の旨被仰付候處

一同高く笑ひ相答候ハ初度中務大輔樣に差出候書類ニも相顯候通銘々共ハ水戸前中納言殿家來ニ相違も無之成程御掟の如く浪人の身分ニてハ是程の大義手ニ合申間敷事成共銘々共ハ恐多くも天公の命を頭ニ戴き此仕儀ニ及候始末ハ不申上共御明察被成候半過し頃來船夷人征伐の御綸旨主人共に被下置候ハ偏ニ御人撰の其器ニ當り候者に勅命を被下たるハ敢て可辭ニも無之武門ニ取難有受取奉り叡慮の御旨御重職掃部頭殿始諸大名御旗本ニ至る迄相達候處掃部頭殿より諸家へ被達候ニハ國家の爲斯迄於朝廷御憂慮被爲在候得ハ各練策の上存意上書可致旨ニ付家々必勝の術計深識を廻し上言致し候趣意いつをも一筋夷人征伐御國威相立候考の外ニ出てを然る上ハ御綸旨空しからに文武兩道兩つなから全く夷人征伐御決行有之筈の處夫切無御取用上書綸旨ハ反古ニ相成士ハ必至の覺悟を失候樣ニ成行水藩共憤憂ニ不堪候處其後夷人彌増尊大の御取扱ニて登城も終ニ御免御府内勝手のまゝニ馬上ニて徘徊日本の者是ニ行逢候得ハ道を可

讓との制令何事そや飽迄失禮輕蔑の振舞よ長しさせ御府内よ於て遊逸館舍迄ゆるし置を候儀ハ婦女子よ至るまて切齒よ不レ堪就レ中神奈川横濱開港已來國々ハ御膝元よ至る迄交易の爲困窮そる事池水の減そる如くハタト渡世方六ケ敷ニ付東西へ奔走致し候老若不レ少斯る折柄よも耳目の好む所能猿樂あと自宅よ於て謡舞ハせ觀樂を極められ其身よかゝりたる征伐治國の道ハ抛ち國辱も不レ搆窮民もいたえらそ己を飽煖の不自由なけをハよしといふ惡政無道の大老何とて天道助けたまふへき則臣等をして亡さしむるふて名ハ水戸の家來なれとも主人の申付よもあく又銘々の恨もあく假令遺恨を懐くとも高官の貴人を僅の銘々共よて立派よ仕遂候といふ事私よて決て難レ及況や浪人共の手よ合事よ無レ之候此理ハ言上迄もなく御列座の歴々方族よ知し召さるへき筈よこそ相覺え候失禮なうら盜賊火付の如き尋常の罪人同樣よ思召て其方共何をも浪人あとゝの御吟味口よてハ矢張掃部頭殿同樣天道よ遊ひ尊君よ不レ限都て執政ふ被レ爲レ與候御方の身櫻田の天殃思召をへし天より命そる所ハ水藩の外士農の中其限不レ可レ有臣等ハ天命を遂くる征夷の血祭を致たれハ公法よ身を任せて參るゝを待のミと申す

同月九日改めて左の所よ預けらる

松平調松江預　大關和七郎
同　黑澤忠三郎
本多主膳正江預　蓮田市五郎
稻葉伊豫守江預　森五六郎
堀田丹波守江預　杉山彌一郎
田村盤次郎江預　森山繁之介

此曉創を病て死す　齋藤監物

評定所の訊問ハ順を逐て之を記さんと欲すれとも未た完備せさるものを得す故に其日のあるものハ之を逐ひ日詳かならさるもの及ひ風聞に類するものハ後に收め疑ハしきハ總て闕如す」

閏三月十八日黒澤忠三郎評定所に於て陳述の聞書

其方儀井伊掃部頭殿供先に及亂妨候次第駕籠に手向致間敷哉

（答）私儀全く御駕籠を切破り御首を奉討儀に相違無御座候此儀ハ再御調にも不及若不明にも思召候得ハ掃部頭殿唯今まて御精勤に候哉拙者共申口ハ不明の儀ハ無之然る處御調口甚不明と存入候只今泰平に御座候得ハこそ狼藉にも候得共若戰國に候得ハ彦根三十五万石は水府のものに御座候乍去拙者共狼藉の罪ハ少も恐不申候右樣不明の調方被致候儀殊の外心外に候天下の御役人とは不存と大聲に罵り云々

同月二十一日森山繁之介評定所に於て陳述の聞書

此度同意出府の者三十四人外に上京八人右三十四人は掃部頭公に十七人高松公に切込候旨掃部頭の御首ハ乍恐討取候得共高松公打洩候間昨年より入殿爲致置候處廻女の首ハ討取候得共未た手に入不申候

松平伯耆守殿被申候ハ繁之介其方共ハ井伊殿に御怨可有之候得共有村治左衞門ハ如何の存寄にて同心致候哉

（答）治左衞門儀ハ去年七月御仕置相成候鵜飼幸吉と血縁の者にて何分片時も難忘儀に付私共に同心候間掃部頭を打留申候

同月二十三日杉山彌一郎森五六郎評定所にて陳述の聞書

池田播磨守殿御尋　彌一郎五六郎其方儀ハ掃部頭殿を討取候

と過日致二言上一候得共其意を不レ得仕方御首討取候て片袖成共取御首ハ役筋に持参致候時ハ假令紛敷首なり共達二上聞一井伊殿も改易ニ可二相成一候得共無二證據一只一途ニ討取ると計申ても無二取上一筋合なり且上京の者共如何の心得ニ候哉　（答言恐らくハ闕文あらん）

（答）此儀ハ御重役の内一兩人恨有レ之上京致候

先日夷人兩三人切害致候と申ハ如何

（答）此儀ハ御公武の御爲めと存及二刄傷一候就てハ多人上陸不レ仕使のミ登城致御城内に輕輩の者入足被レ爲レ致是迄も殘念ニ御座候間三四人切害仕候尚又此後右樣の儀御座候得ハ神奈川砂上に夷人の首塚を可レ築心底ニ候

鳥居欄之助殿御尋　五六郎其方共ハ高松公へ及二敵對一候儀ハ如何の心得ニ候哉

379922

御尋御尤ニ奉レ存候高松公へ敵對の儀ハ各樣にも御案内の通り私主子九郎丸石州へ養子ニ被レ遣候處昨年主人不調法の事ニ付高松の差圖を以主家へ返緣被レ爲レ致候事是迄も御法外の事と被レ存右故敵對仕候此後右樣の仕儀有レ之候得ハ諸役人輕重の無二差別一敵對可レ致と決心仕候

評定所拔書

水藩五人の者申分此度掃部頭殿殺害仕候儀ハ國民安堵を相計り候事にて私共狂氣亂心と御思召被レ下候てハ心外至極に奉レ存候全く德川家御役人暴政の筋有レ之依て御役人を奉レ恨候事に御座候私共申上候次第篤と御聞屆被レ下度奉二願上一候其條目如レ斯

一御暴政の御廉相認書差出候右條目御不審の次第有レ之候得ハ逐一御答可レ申候右條目は舊年鵜飼幸吉儀古來無法の御仕

置甚以殘念に奉存候右等の御仕置和漢歴史にも無之御邪政と存罷在候

右條目內へ二ヶ條ハ上天子を始め下萬民の困難を不救段是暴政なり夷狄神奈川に於て跋扈輕蔑を極め剛慢に募り候を討伐不被爲在是御暴政なり然る上ハ私共申立候儀ハ乍恐神君樣御定の御政事に復る事のみ希候然る上ハ我々如何樣の罪科に行れ候共不苦候

一德川家御政事に付主人前中納言殿是迄數度建白被致候得共更ニ御用無之然る處外夷我儘を極め御國體を亂し候儀も相聞水戸表ニも農兵共徒黨致劍戟の沙汰ニ及全く御上の御政事向不宜故の儀ニ御座候何卒從是ハ御改革被爲在度奉希候右等の次第柄卑賤の私共如何樣書取申立候共御用無之ハ必定の事ニ付不得止事彥根侯を奉殺害候私共身命を拋て御政事向の儀申上候間篤と御思慮被下度奉希候

右の外訊問覺書の如きもの數多あれとも略す下に錄するものハ蓮田市五郎の自記して卿に贈りたる書なり是尤も確實とするに足れり

要擊の狀

安政六年庚申三月三日朝五ツ時過元老掃部頭井伊を西丸下櫻田に於て討す同行の士ハ(八名略す)及予也二日の夜ハ同志の士一同品川妓樓に於て快飮す三日朝六ツ過出立芝愛宕山にて各支度をなす下駄傘の者あり或ハ股引草鞋の者もあり思ひ々々なり四人五人宛組合五ツ時櫻田ニ至る曉天より降出せる雪いと盛にして風景殊絕そここゝニ佇居るにあやしむ人なく實に天の助て討しむる所以かと思ハる半時餘にして赤鬼從者五十人計駕籠にて出仕す漸間近相成各傘を打捨て羽織をぬきすつる先方には雨具の儘切かゝるもあり雨具

を脱てかゝるもあり闘ハ暫時の間にて遂ふ賊魁の頭を斬る滿道の白雪ハ染て血となる有村刀の切先へ賊頭を貫き何やらん薩音にて高らかにうたひ辰の口邊さして歩行く同士ハ同音にてしめたと呼ハり各刀を鞘に納め思ひ々々に引退く嗟多日の積怨一朝にして與レ雪共に消盡す豈愉快ならす乎斬奸の仕組約束等甚不極也依レ之同士討にて疵を受くる者甚多し予も増子と戦ふ戦ハ氣を以て主となすと云り信や刀を抜てからハ間合も恥と不レ知只無二無三也眼ハほのぐらく實ハむちう也實に試合稽古とは又一段格別なりさすれハ大事の本望を遂せんと欲せは大將なるもの一人立置一より十迄其の人の指揮に任せ場に臨てハ勿論其人下知して且本懐を遂し一同引纏迄も其人下知せざれハまちまちになるもの也況や自訴の儀ハ大將たる人一人引請辯論せされハ其人の才辯に

よりていろいろ申口出來其結極如何と思ハる四十七士の吉良氏を討ちし時ハ大石一人にて事實ハ申述しやう覺ゆる也一體本望を遂せし上ハ一同引纏り内藤紀伊守殿へ自訴に及ぶの約束なるよしを知るもあり知らぬもあるか且内藤の屋敷ハ何れも不レ知それ故區々に予も大閤等五人と行けは黒澤佐野齋藤何れも深手にて跡より呼ハる故へ立戻り就中齋藤ハ深手歩行ハやうやう也或ハ見附番所へ行て御老中の役宅へ案内を賴中度申込めハ列座の者共上へ下へと押かへし只ぶるぶるの體にて何の返答も無レ之故不レ得二已事一又々引返し八代洲河岸を過山口鯉淵兩人自裁しており夫より辰の口迄至る是非是非田安樣へ罷出一封の書附を奉レ呈度存ずれども齋藤何れにも打疲れ歩行成兼依レ之脇坂殿へ參右次第を訴る待事久して内玄關へ通さる家老體の人物兩三人にて事實を問

ふ乃ち懐中の一封を取出して指出す八ツ時頃に至り疵所治療をうけ予れ右の肩二寸餘二針同三寸餘三針なり治療受けずして割腹せんとす皆曰く何ぞ從容死に就かさると爰に於て思とゞまり又日暮に及て一同申渡をうく其文は水戸樣御家來黑澤忠三郎佐野竹之介蓮田市五郎齋藤監物思召有レ之石谷因幡守に御引渡被レ遊もの也又石谷より申渡さる(前同名)此度細川越中守に御預被二仰付一もの也細川家より受取の役人々數大勢引連て詰居る直樣引渡になる佐野は深手遂に細川家にて落命す翌四日大關森杉山森山四人は細川家に自訴に及ひ預に相成居る由付人より承る座敷の間隔りて其人々に逢ふことは能はざれども一入床敷心地す五日黑澤大關森杉山評定所に出る齋藤と予は不レ出七日には一同出る齋藤は深手にて不レ出八日朝四ツ時齋藤遂に落命す九日夜六人とも御預

死體處置

訊問の狀

替になる予は八町堀本多修理介殿家來に預になる本多家は嚴重の手當にて四方格子都合にては三圍也役人下人迄には十八計日夜守衞す十二日評定所に出る四人の死體を瓶へ鹽漬にいたし出して予をして其姓名を云はしむ予不レ覺潜然たり日數を經たれは其人の容貌甚相違せり夫は山口辰之介廣岡子次郎稻田重藏鯉淵要人なり山口鯉淵は八代洲河岸にて自裁稻田は場所にて自裁か又即死か不レ知廣岡は有村と共に辰の口にて自裁すといふ有村は賊魁の首を抱て死といふ關鐵岡部增に海後廣木は行衞不レ知といふ

評定所吟味御役人は松平伯州石谷因州池田播州あり其外御勘定奉行山口等小役人迄大勢の出席也池田曰水戸樣御家來蓮田市五郎此度同志の者申合御大老井伊掃部頭殿を櫻田に於て狼藉に及ひ御場所柄と申剰天下の執權職へ右の始末に

及ひ候段恐入候儀に有レ之乍レ去又本望を達せし上自訴に及ひしハ神妙の至也掃部頭殿に狼藉に及ひしは如何なる趣意に有レ之哉委細可二申上一旨申さる答て曰如レ仰御場所柄も不レ顧御大老へ右の仕合に及ひしハ甚以恐多存し奉る存意の儀ハ委細書取に致し脇坂樣迄指出し候間それにて御承知被レ下度段申述池田曰成程出訴に種々書緘せたりしかそれにてハ掃部頭殿を討取らる趣意不二相立一樣存する尤箇條ハ澤山有レ之とは相見ゆるか其内先何か大眼目に有レ之哉と申に付如レ斯箇條ハ澤山に御座候それをつゝめて申せは天下の御爲と存討申候と答ふ池田左樣か然ハ其天下の御爲と存する趣意ハと申に付答曰一々其箇條を申上候儀ハ憚多き事にて如何となれハ當時の御大老御政事向等萬端御取行被レ遊るゝ井伊樣の事にて其上當時の御重役樣方御列坐中何程御吟味の御場所とハ申

なから其御失體の箇條輕蠻の我々より一々申上るハ實に恐多き次第に御座候間夫ハ得と御亮察被二下置一右の書附にて大畧御承知可レ被レ下候と申立る池田曰成程尤の申立にハ有レ之か其方共申合天下の御爲め掃部頭殿を討たと申てハ名義か立ぬやう思ハる侍と申ハ我等も同樣の儀其主君々々の命を奉し死してこそ名義も立つもの也其方なとハ御三藩の家來と申せは何更立派にしてこそ本意なれさすれハ御直にハ不レ伺共前殿の思召とか何か聞傳へ此度の旨儀に及ひしにハ有レ之左樣なれハ名義も相立實に其方共ハ君命を奉して死なれハ感心の至也といふ予是に於て膝立直してハ思もよらさる御推察を伺申候君命を奉して死するハ人臣の常道と申事ハ誰も存し居る水戸家の儀ハ一昨年より兩公共御譴責を蒙り居る故右の御推察と奉レ存候前君の内命を奉し井伊家を討なれハ立柄の

士喜て罷出可レ申且討ちかさも可レ有レ之何そ輕輩の我々出る事を待たんや水藩のもの共討候故右樣の御推察と見ゆれともこれか天下の浪士か討たれハいつれへ御疑念可レ懸哉右樣の仰にては全く意趣ありて同士討の樣思召か左樣の譯なら何そや薩州の有村なと人の爲に一命を捨て加勢に及ふへきや一體老寡君の儀ハ天朝公邊の御爲め深く被二思召一御敬愼に被レ爲レ入過激の臣下をは悉く御配慮被レ遊毎度御教諭被レ爲レ在候儀ハ一國の者共一同存罷在る此度の一條御聞に及ては定めし深く御配慮被レ遊事そと實以臣下の身分にては恐入候得共只今井伊家へ右の始末に不レ及ハ天下の御爲に不二相成一故各決心致候事に御座候と云終らは石谷曰播磨守申如く内命をうけるとか又ハ掃部頭殿御政事御取行の儀前殿常々悪み近臣へありとも咄したまへる御心中を酌取ての事に可レ有レ之左樣に無レ之ては名義更に不二相立一第一其方なとハ如何樣名ハ付ても惜まぬ事かといふ答て曰名を不レ惜ものハなけれとも旨義によりてハ毫も惜不レ申候名義と申ものゝ當時ハ立ぬやうにても後に顯然立もありて一樣ならさるものなり此度の儀も成程名義不レ立と申せは申ものゝ從レ是して尊王攘夷の大義天下に明になれハ豈名義なしとハ可レ申歟前公の思召をくみ取り右の一事に及ひしなと被レ仰事ハ乍レ恐毎度御役人樣の御疑念にて精忠無二なる老公を忌嫌ふやうに奉レ存石谷曰それならハ井伊殿を討て天下の御爲と其方ハ申か我等か見れハ隨分結構なる御大老と存す其方共ハ何を以て惡敷といふ答て曰然らハ一二件申上候掃部頭御大老職となられしより東照宮の御規格を破外夷と交易を始めそれか爲に天下の人民難澁するもの多く禽獸に等しき夷人を大城へ引入れ將軍樣に

謁見を許し御親藩を遠け天朝の思召を輕蔑し上樣御幼少の御砌に乘し己の威福を擅にし人心をして怨をいだかしめ万一天子を挾み天下に號令するもの出來たらハ如何被レ遊思召に可レ有レ之哉況や外夷の狡謀ハ日本を呑食するの氣十分なれハ實以不レ容レ易の事にて今の時井伊樣を踣し候得ハ天下の勢變革することハ必定なりされハ御役人樣方にも御心被レ爲レ付尊王攘夷の大義を取行相成候樣可二相成一かと存する故なりといふ伯州曰外夷の事なとハ掃部頭殿一人の取計と申計にも無レ之夫々御役方も有レ之御取計に相成にてなにも其方抔か天下の御爲めなとゝ不レ入事なり面々其主君々々ハ大切に奉公すれハ則天下の御爲になることなり天下ハ天下の御役人におるまい先刻より其方ハ前殿の思召を酌取此度の一條にハ及ハぬと申すか佐野竹之介ハ前殿の小性役を勤る上にハ何か竹之介より承レ之候儀可レ有レ之と云ふ答て曰竹之介とは二日の夜品川妓樓にて初て面會ゆゑ右等の儀前日承る謂も無レ之先刻より皆々樣にて前殿の思召とかなにか故なくしては名義か立ぬからと仰らるれとも縱令名義は立にもせよたゝぬに致せ老公の思召をくみ取致し候なとゝ申儀は毫も無レ之事故如何樣嚴重御尋ありとも不二申上一段申切るそれより老公の一事は尋なし

右は三月七日同十二日同十九日三度穿鑿の大意なり其國元の事情且勅の儀いろいろ尋になるそれそれ答ふ瑣細の儀は不レ足レ錄今予か此大意を書する所以は幕の横暴は申迄もなけれと前文の通老公へ罪を歸するの氣焔これあるをは萬一我輩死て後老公の思召より井伊を討たるなりと誰々か申口にこれあるなと僞口書認られんも測りかたけれは萬一左樣に及

なは此上もなき遺憾死て餘罪有之に付論辨の大意を記し置くものなり老公の御事に至りては縦令五鼎に煮らるゝとも豈故なきことを云ふへきや時艶陽三月廿二日本多家獄中にて書す

大坂城代に幕府より達書

去る三日掃部頭登城掛於外櫻田水戸殿家來共凡二十八程短筒等相用ひ及亂妨雙方共多人數死傷等有之掃部頭にも怪我被致水戸殿家來共の內八人は自訴致し五八は死亡候得共猶殘黨も有之趣自然其表に立入西國筋え可能越難計候間嚴重に手當被申付亂妨者立入候はゝ速に召捕候樣町奉行にも可申渡旨別紙書付相添え老中衆より申來り候間爲心得相達候

三月十八日

高橋多一郎等大坂に於て自殺又は逮捕せられたり其當時の事を記るす書あり左の如し

上阪之水藩變名幷始末書

伊奈小治郎と唱	高橋多一郎
松井篤之助と唱	高橋庄左衛門
篠田源太郎と唱へ又津田長太郎とも名乗り丹羽榮三郎又竹三郎抔とも申居候由	川崎孫四郎
足輕三郎と唱へ泉州堺に於て召捕	大貫多助
合原佐助と唱	黒澤角助
足輕作太郎と唱	黒澤次作

右の六人三月二十二日夜大坂生玉馬場先河彥と云茶屋に寄合島男也（元水藩當時大阪住劍術師範罷在候）と共に都合七人

大騒きに大酒致し多一郎庄左衛門孫四郎男也四人は四ッ時前島宅え歸り殘三人は河彥方に泊り二十三日朝生玉天王寺大騒ぎの後其儘行衛不知

金子孫次郎
佐藤鐵三郎
山崎織藏

曾根崎村丹波屋榮三郎又木瀬久吉と唱

右の者安政末年頃より大坂表に登り居當時大佛殿御名目の金貸付方掛りに相成居候右の者譯柄を以て大佛役人佐倉部之進を賴み込前文竹四郎多助角助次作等馬場先河彥に隱し置露顯に可及樣子を察し島男也と談合逃申候

三原源太夫と唱へ元水戸殿足輕なり又幸助と云三月末被召捕

（結澤伊太夫家來）
內藤文七郎

三月二十二日夜大坂西町奉行久須美佐渡守組同心召捕方役人外用にて高津町會所に參居候處長町の年行事參り申候には生玉島男也方に滯留人有之他出は一刀に候得共大脇とて何分武士と被存候と申候に付捕方聞て然らは島氏を呼寄可申と早速人を差遣し扨待とも待とも島氏不來曉方に成候間自然取逃候ては不宜候間目明の者附置候樣申付島氏へ遣し候行違ひに島は高津町へ參り扨目明しの者も島の宅を伺候處何か騷ケ敷樣子なり依之隣町の番人共呼集め所々手分致し雨中故傘を差し島か門口に居候處下屋より侍二人出て差居候傘を取掛け候に付不相成由申聞候て不渡候得は直に刀を拔捕方の者を切に掛り候故早々逃出し候て高津町に其段申通候處其分にては取逃し候ては不相成候間早々追付召捕候樣申付候に付又々跡を慕ひ歩行候さて此二人は高橋父子にて口繩坂を下り南へ行又引返し源正寺坂を下り直に町へ

出南へ行秋の坊北隣に春日屋と云茶店へ參り草鞋を求め傘を借度由申候處亭主無レ之由斷候得は近邊にて買呉候樣相賴み金二朱渡し候處買に參り候其內草鞋をすけ居候處へ捕方參り箇樣の侍は參らざる哉と相尋候處此方に候哉と申候に付捕方大に驚き顏見引退き捕方の者水戶家は兼々勇剛の由聞及候故近邊にて未た起きさる家まて叩起し十五歲以上の者は出候樣申步行候其內に多一郎切腹致し掛り候間亭主大に驚き斷申候得は子息手を引拵致し介抱して天王寺北の門に入り大黑堂の東隣小河欣次兵衞と申方の玄關より上り案內を乞ひ候處主人未た寢居候に付僕出候得は主人に逢ひ賴度儀有レ之由故僕主人に申入候此間に腹の血を指に付て傍の障子に鳥か鳴と書候得共指に血不レ含候故跡は不レ書、僕其時に茶を持出候間硯を請ひ懷中より半紙を取出し

但腹候に付其上へに伏し血にて分り兼洗ひ候故破れ出來候

國賊井伊掃部頭を討て天下治世の爲の微忠(以下血潰分らす)

右一枚

大老掃部頭日本の大禁を犯し國を夷狄に賣る(同段)

右一枚

天下當今累卵危、採□（血潰）宸廷□（同）□（同）□（同）、狂言山□（同）櫻花色、心事難伸

空死□（同）

鳥か鳴吾妻の森の眞心は鹿島の宮のおなたとそ知れ

高橋多一郎（四十八歲）

扨主人罷出候處御人品を見こみ御賴申候也拙子儀及二御聞一も御座候哉元水戶藩にて於二櫻田一大老を爲二國家一令二誅戮一薩州に可二

罷越候處捕方の者門前まで詰居候間於此處居腹可仕候に付拙子死後此金子にて石碑を當寺に建立被下度と申金子を打渡し且又悴事見苦敷死を仕候はゝ乍御苦勞御介借被成下と申置て自殺す又子息にも見事に死候扨又島宅に今一人居候此は島方にて切腹致し死兼候哉門前に出て倒れ死す島は入牢被仰付同人宅御闕所の處刀身十六本鍔杯は無之鐵炮三挺玉藥有之候を油紙包に致し有之此は江戸表より背に負候て雲助合羽を着鎗一筋かたける二條殿の御用札にて道中參り候由

右切腹の刀は貞宗理に信長拜領と有之

　但前中納言殿より多一郎拜領の由

　右に付居書如左

今朝何者共不相知二人拔身にて拙宅玄關に驅上り硯紙等差出候樣申乞候に付下男立出見請候次第申候に付右紙等申付相與置候て私起き上り寐卷の儘にて罷出如何の儀と相尋候處水戸藩中にて先達て掃部頭を討取猶天下國家の爲に夷國交易掛りの者も不殘打果し可申存念に罷在候定て聞居可申と申候故何分にも曲者と察し候故彼是挨拶取繕ひ姓名杯相尋候處委細の儀は此通書置候間跡々始末取片付等宜敷相賴申候折柄私門前多人數何れも棒など携へ追々押掛け參り門前より高聲にて尋常に繩にかゝれと右往左往に立騷き候故何分下拙乍不及程能申諭し如何樣申諭て一と先拔身爲相納何卒手段を以て脇差を奪ひ取度存候得共右之通門前役方手先きの者と覺敷者多人數立塞り居候事故彌以曲者必死の覺悟にて自殺致候次第不取敢此段御屆申上候以上

三月二十三日

小河欣次兵衛

御年頭一音院様
御執事秋ノ坊様

一　脇差銘貞宗　但一尺五寸
一　金六拾二兩　外に慶長判一枚

右所持の品に御座候以上

覺

一　今曉六ツ時比何者共不相知年四十歳計同二十歳計の侍二人當山內役人小河欣次兵衛宅玄關にて切腹仕候處御捕方左の御見分御引取にて候不取敢此段御屆申上候以上

御捕方
西御奉行組
藤田直太郎様
佐川槇藏様

右之通に御座候以上

申三月二十三日　四天王寺家來
酒井左久馬
木下直次郎

御奉行所
西町奉行組同心　浦上炎五郎
東町奉行組同心　平山新太郎

右死骸爲受取罷越申候事

又

關出雲守小笠原長門守より角倉與市に通達書

於江戸表及亂妨候水戸殿家來殘黨の者共召捕方の儀去る十二日委細相達申候處此節右殘黨の內六人大坂表ゑ立越候內高橋多一郎同庄左衛門篠原淸次郎は同所に於て切腹其餘別紙の通三人は逃去未た行衛不相知右は何方より右体大坂表ゑ立入候儀に候哉夫々嚴重に手當有之候はゝ夫迄に不至差押可申哉にて猶此上近々登り可來哉も相聞候間精々無油斷